赤ちゃんから
おとなまで

聖書教育

2021年
10
11
12
月号

総主題 時代を生きる教会

テーマ 平和の主よ、来てください

詩編・イザヤ・ミカ・ヨハネ

なまえ：

目次

聖書教育 2021 年 10・11・12 月号

テーマ 平和の主よ、来てください

教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の全領域において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。
日本バプテスト連盟 1971 年制定、1999 年改訂
聖書教育ホームページ　https://www.bapren.com/

1　目次
2　プログラム表
3　準備のための聖書日課　川上敏夫

特集・連載

4～　特集 クリスマスメッセージ　渡辺牧人
6～　特集 キリスト教教育週間　NCC教育部
8～　連載 世界バプテスト祈祷週間をおぼえて　吉髙 路
10～　連載 ともに分かち、ともに生きる　萩原永子
12　執筆者紹介
13　概論 この時代に「詩編」を読む　梶井義郎

今号の展開例　第27課～第39課

14～　聖書の学び・成人科　梶井義郎
16～　みんなで聴く聖書のおはなし　梶井義郎
17～　青少年科　松坂克世
18～　幼小科　中條邦子

92～　暗唱聖句手話　塩山幸子
94～　暗唱聖句カード　新共同訳・口語訳
99　「聖書教育」読者アンケート
100　次号予告

2021 2022

聖書教育 2020～2022年度プログラム

総主題 時代を生きる教会

課	月　日			週題	聖書箇所
27	10月3日		詩編・イザヤ・ミカ・ヨハネ	わたしの贖い主よ	詩編19:1～15
28	10月10日			いつもわたしを	詩編23:1～6
29	10月17日			すべては主のもの	詩編24:1～10
30	10月24日			豊かな平和に	詩編72:1～14
31	10月31日			希望に生きる	詩編92:1～16
32	11月7日			光が射すと	詩編119:129～136
33	11月14日			都もうでの歌	詩編131:1～3
34	11月21日			主が望まれるのは	詩編147:1～20
35	11月28日	世界祈祷週間		平和の主よ来てください、この世界に	イザヤ11:1～10
36	12月5日			もはや戦うことを学ばない	ミカ4:1～4
37	12月12日			彼こそ、まさしく平和	ミカ5:1～5
38	12月19日	クリスマス		すべての人を照らすいのちの光	ヨハネ1:1～18
39	12月26日			この方こそ神の子	ヨハネ1:29～34
40	1月2日		マルコ	福音のスタート	マルコ1:14～20
41	1月9日			罪人を招くために	マルコ2:13～17
42	1月16日			ここにわたしの家族がいる	マルコ3:31～35
43	1月23日			五つのパンと二匹の魚	マルコ6:30～44
44	1月30日	協力伝道週間		シリア・フェニキアで	マルコ7:24～30
45	2月6日	信教の自由		だから、目を覚ましていなさい	マルコ13:32～37
46	2月13日			メシアと告白しつつも	マルコ8:27～38
47	2月20日			信仰のない時代に	マルコ9:14～29
48	2月27日			神殿といちじくの木	マルコ11:12～26
49	3月6日			生きている者と共に	マルコ12:18～27
50	3月13日			裏切る者と共に	マルコ14：10～26
51	3月20日			心は燃えていても	マルコ14：27～42
52	3月27日			鶏の声を聞くたびに	マルコ14：66～72
1	4月3日		マルコ・使徒・コロサイ	ユダヤ人の王	マルコ15:6～32
2	4月10日	受難週		イエスの死	マルコ15:21～47
3	4月17日	イースター		そこでお目にかかれる	マルコ16:1～8
4	4月24日			アテネでのパウロ	使徒17:16～34
5	5月1日			恐れるな、語り続けよ	使徒18:1～11
6	5月8日			それでもエルサレムへ	使徒20:17～38　参照21:1～16
7	5月15日			証しをしなければならない	使徒22:30～23:11
8	5月22日			神の言葉はつながれはしない	使徒26:19～32
9	5月29日			元気を出しなさい	使徒27:13～38
10	6月5日	ペンテコステ		聖霊は語り続ける	使徒28:17～31
11	6月12日			知恵と知識の宝は	コロサイ2:1～5
12	6月19日	沖縄命どぅ宝の日		祈りの輪の中で	コロサイ4:2～6
13	6月26日	神学校週間		主イエスの名によって	コロサイ3:12～17
14	7月3日		エフェソ・マタイ・ダニエル	秘められた計画	エフェソ1:3～14
15	7月10日			平和を共に	エフェソ2:14～22
16	7月17日			でっかい愛がうれしくて	エフェソ3:14～21
17	7月24日			古い人を脱ぎ捨てて	エフェソ4:17～24
18	7月31日			愛されている子ども	エフェソ5:1～20
19	8月7日			神の武具を身に着けなさい	エフェソ6:10～20
20	8月14日	平和		平和を実現する人々	マタイ5:9
21	8月21日			名前を変えられてもなお	ダニエル1:1～21
22	8月28日			永遠に続く国	ダニエル2:26～45
23	9月4日	教会学校月間		燃え盛る炉の中で	ダニエル3:13～30
24	9月11日			獅子の洞窟の中で	ダニエル6:10～29
25	9月18日			ダニエルの祈り	ダニエル9:1～19
26	9月25日			ミカエルの告知	ダニエル12:1～13

2021 年 7 月現在

川上敏夫 松山バプテスト教会 牧師

2021年10月

準備のための聖書日課

1日㊎	創世記1:14〜19	夕べがあり、朝があった
2日㊏	ハバクク2:1〜4	信仰によって生きる
3日㊐	**詩編19:1〜15**	**わたしの贖い主よ**
4日㊊	出エジプト記2:23〜25	人々のうめき、叫び、嘆き
5日㊋	出エジプト記3:11〜12	わたしは必ずあなたと共にいる
6日㊌	出エジプト記12:1〜11	主の過越の食事
7日㊍	出エジプト記14:19〜31	大いなる御業を前にして
8日㊎	出エジプト記15:6〜13	慈しみをもって導かれる主
9日㊏	詩編133:1〜3	注がれたかぐわしい油
10日㊐	**詩編23:1〜6**	**いつもわたしを**
11日㊊	詩編50:8〜15	すべては主のもの
12日㊋	ヨハネ4:23〜24	まことの礼拝を求めて
13日㊌	出エジプト記20:1〜7	みだりに主の御名を唱えるな
14日㊍	ヨブ記28:20〜28	主を畏れ敬うこと、それが知恵
15日㊎	民数記6:22〜26	主の御顔による祝福
16日㊏	アモス5:4〜6	主を求めよ、そして生きよ
17日㊐	**詩編24:1〜10**	**すべては主のもの**
18日㊊	サムエル記下7:1〜16	主はあなたと共におられます
19日㊋	申命記17:14〜20	神なる王を畏れることを学ぶ
20日㊌	エレミヤ22:1〜5	正義と恵みの業を行え
21日㊍	列王記上11:1〜13	ソロモンの心の迷い
22日㊎	イザヤ9:1〜6	平和は絶えることがない
23日㊏	ヨハネ20:19〜23	安かれ、平安があるように
24日㊐	**詩編72:1〜14**	**豊かな平和に**
25日㊊	創世記2:1〜3	神の安息の日
26日㊋	ヨハネ13:1〜11	弟子たちの足を洗われる主イエス
27日㊌	イザヤ46:1〜4	白髪になるまで
28日㊍	ホセア14:2〜8	レバノン杉のように香る
29日㊎	詩編143:1〜6	御手の業を思い巡らす
30日㊏	詩編146:1〜10	ハレルヤ、主を賛美せよ
31日㊐	**詩編92:1〜16**	**希望に生きる**

2021年11月

準備のための聖書日課

1日㊊	詩編119:1〜8	主の道を歩む
2日㊋	詩編119:9〜16	若者の歩むべき清き道とは
3日㊌	詩編111:1〜10	主を畏れることは知恵の初め
4日㊍	箴言1:1〜7	未熟な者に熟慮を教える
5日㊎	エゼキエル2:7〜3:3	御言葉は蜜のように甘い
6日㊏	テサロニケー5:16〜22	絶えず祈りなさい
7日㊐	**詩編119:129〜136**	**光が射すと**
8日㊊	箴言6:16〜19	主のいとわれる驕り高ぶる目
9日㊋	イザヤ2:6〜11	高ぶる目は低くされる
10日㊌	詩編51:15〜19	打ち砕かれた悔いる心
11日㊍	ルカ12:13〜21	どんな貪欲にも注意せよ
12日㊎	ルカ12:22〜34	ただ神の国を求めよ
13日㊏	詩編130:1〜8	主に望みをおく
14日㊐	**詩編131:1〜3**	**都もうでの歌**
15日㊊	詩編102:13〜23	シオンの再建
16日㊋	イザヤ57:14〜21	打ち砕かれた心の人
17日㊌	詩編33:16〜22	馬は勝利をもたらさない
18日㊍	申命記30:15〜20	主の戒めと掟と法を守れ
19日㊎	詩編78:1〜8	後の世代に語り継ごう
20日㊏	哀歌2:11〜12	息絶える幼子と乳飲み子
21日㊐	**詩編147:1〜20**	**主が望まれるのは**
22日㊊	イザヤ1:1〜9	天よ聞け、地よ耳を傾けよ
23日㊋	サムエル記上16:1〜13	油を注がれたダビデ
24日㊌	イザヤ2:1〜5	主の光の中を歩もう
25日㊍	イザヤ53:1〜12	この人を見よ
26日㊎	ヤコブ3:13〜18	平和を実現する人たちの働き
27日㊏	ヨハネ黙示録22:16〜20	アーメン、主イエスよ、来てください
28日㊐	**イザヤ11:1〜10**	**平和の主よ 来てください この世界に**
29日㊊	ミカ1:1〜7	サマリアは瓦礫と化す
30日㊋	ミカ2:1〜5	貪欲と強奪の罪

2021年12月

準備のための聖書日課

1日㊌	ミカ3:1〜12	御顔を隠される主
2日㊍	ミカ4:5〜8	シオンの山の残りの民
3日㊎	詩編23:1〜6	主の臨在と祝福
4日㊏	エフェソ2:14〜22	十字架による平和の福音
5日㊐	**ミカ4:1〜4**	**もはや戦うことを学ばない**
6日㊊	創世記35:16〜20	エフラタ近くのラケルの記念碑
7日㊋	サムエル記上17:12〜16	エフラタ人のダビデ
8日㊌	民数記24:15〜19	ヤコブのひとつの星
9日㊍	マタイ2:1〜6	メシア誕生の地ベツレヘム
10日㊎	ルカ2:1〜20	飼い葉桶の中のメシア
11日㊏	ミカ4:14	敵は我々を包囲した
12日㊐	**ミカ5:1〜5**	**彼こそ、まさしく平和**
13日㊊	ヨハネ8:12〜20	世の光に従いつつ生きる
14日㊋	ヨハネ19:28〜37	渇く
15日㊌	ヘブライ2:10〜18	血と肉を備えて
16日㊍	ヨハネー4:1〜6	肉となって来られたキリスト
17日㊎	ヨハネー4:7〜12	独り子の派遣
18日㊏	ヨハネー5:18〜21	主イエスこそ永遠の命
19日㊐	**ヨハネ1:1〜18**	**すべての人を照らすいのちの光**
20日㊊	使徒言行録8:26〜40	卑しめられた神の小羊
21日㊋	ヨハネ1:43〜51	もっと偉大なことを見る
22日㊌	テモテー1:12〜17	罪人を救うために
23日㊍	イザヤ40:1〜11	荒れ野に道を備えよ
24日㊎	マタイ3:1〜12	聖霊と火によるバプテスマ
25日㊏	ヨハネ1:19〜28	荒れ野で叫ぶ声として
26日㊐	**ヨハネ1:29〜34**	**この方こそ神の子**
27日㊊	イザヤ8:23後半	栄光に輝く異邦人のガリラヤ
28日㊋	ルカ3:21〜23前半	主イエス、三十歳のとき
29日㊌	使徒言行録4:5〜22	無学な普通の人の証し
30日㊍	マタイ22:1〜14	選ばれる人は少ない
31日㊎	ヨハネ15:11〜17	わたしがあなたがたを選んだ

（聖書は、日本聖書協会新共同訳を使用）

ホノルル市役所裏の隅に飾られる家畜小屋の赤ちゃんイエスさま

ルカによる福音書2章4～7節（新共同訳）

ハワイ・オリベットバプテスト教会
日本語部牧師　渡辺牧人

ルカによる福音書２章４～７節（新共同訳）

ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

Aloha！常夏の島、ハワイ・オアフ島から私たちの救い主キリスト・イエスさまの誕生を覚え、心よりお祝い申し上げます。私は生涯の半分を日本以外〈主にハワイ（高校から）、テキサス（大学）、カリフォルニア（神学校）〉で歩んでいますが、現在も日本バプテスト連盟とつながりを持たせていただいているのは私にとって恵みです。オリベットバプテスト教会（Olivet Baptist Church）日本語部（初代牧師：E.B.ドージャー師）では、前任牧師・渡辺邦博（私の父）が就任（1978～2000）して以来いままで40年間以上『聖書教育』と『新生讃美歌』を愛用させていただいていることを心から感謝しています。

日本とハワイのクリスマスの雰囲気は大分違いますが、聖書の語っているクリスマスの意味は世界中どこにいても変わりません。クリスマスの季節になると、ホノルル市役所には多くの飾りがなされます。最初に目立つのはシャカ・サイン（握った手の親指と小指を突き出してアロハスピリットや「Hang　Loose 落ち着いてリラックス！」

をあらわす）をしている、はだしのサンタクロースと赤いムームーを着て首にレイをかけているミセス・サンタクロースの大きな人形です。そして、高くそびえてきれいに輝くクリスマスツリーや雪ダルマなども運転しながら見ることのできる大きさで飾られます。市役所の建物内もカラフルできれいなデコレーションで溢れます。それを観るために、市民や観光客でにぎわうのです。

しかし市役所正面の目立つ場所には、家畜小屋での赤ちゃんイエスさまを観ることはできません。車を駐車して、市役所の建物裏側の目立たない暗いところまで歩いて行って、はじめて家畜小屋で飼い葉桶に寝かされている赤ちゃんイエスさまと出会う事ができるのです。正面の明るく人がにぎわっている場所ではなく、薄暗い、あまり人がいない建物の裏側、むしろ寂しいような場所に家畜小屋の赤ちゃんイエスさまと共にいるマリアとヨセフが設置されているのです。私がそれを探し当てた時、なぜか大きな感動が与えられ、静かに涙が流れるような感覚を味わいました。宗教家リーダーたちではなく、夜野宿をしていた羊飼いたちが天使の導きに応えて家畜小屋を探し当て、救い主イエスさまと出会った場面を思い浮かべることができたからです。

以前イスラエル旅行で、ガリラヤ地方（ナザレ）からベツレヘム方面に移動したことがあります。野外は約 40℃の暑さの中、クーラーが効いた快適なバスで、2 時間以上舗装された道路上を走る旅でした。外を眺めると丘あり谷ありの茶色い景色が続いていました。それまでは、聖書で当たり前のように「ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った」（ルカ 2：4）と、スラーッと読んでいましたが、約 2000 年前、バスや電車などが無い時代に約 140㎞の山道をヨセフと共に出産間近のマリアが、旅をしていたことの過酷さを思わされたのです。またベツレヘムで見た飼い葉桶は、冷たく堅い石で造られているものでした。当時の飼い葉桶は、通常石で造られていたようです。家畜小屋は、木造の小屋ではなく、暗い岩の洞窟のようなところでした。その時まで、当たり前のように飼い葉桶や家畜小屋は木で作られているものだと思い込んでいた私にとって目からうろこが落ちるような出来事でした。

救い主イエスさまとの出会いは、神さまが導いてくださる事により起こり得る出来事ですが、同時にそれぞれが自覚的にその導きに応え、イエスさまとの出会いを求める事により見つけることができるのではないでしょうか。イエスさまとの出会いは必ずしも明るく目立ち、多くの人々でにぎわっている場所ではなく、むしろ目立たない寂しい所でも与えられるのです。暗闇を体験した人、悲しみや寂しさ、痛みを味わっている人、貧しさに苦しんでいる人のその場所に、救い主イエスさまがいてくださる事を思わされるのです。

現在のアメリカ合衆国は数十年前とは大分違ってきていて、必ずしもキリスト信仰がメージャーではなくなっています。私たちこそが信仰のリバイバルを必要としていることを思わされながら、家畜小屋にて誕生してくださった救い主イエスさまとの出会いを大切にして、私の罪を赦すために十字架に架かられたイエスさまを崇め、クリスマスの賛美を共に捧げたいと心から願っているのです。

第71回
キリスト教教育週間

2021年10月17日㈰～24日㈰

日本キリスト教協議会（NCC）教育部
総主事　比企敦子

平和のきずな献金
さあ、つながろう

「私の名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである」
（マルコによる福音書　第９章37節）
（聖書協会共同訳）

パンデミックの終息がみえないまま２年目となりました。オンラインによる礼拝や分級、人数制限下での対面礼拝が続いています。世界中の人々のいのちが守られるためには十分な医療措置が必要ですが、感染症による被害はすべての人に平等に降りかかるのではないことがよくわかりました。貧困による医療格差、ワクチンの独占、更にさまざまなDVなど、女性や子どもをはじめ社会的弱者と言われる人々は真っ先に打撃を受けます。イエスご自身もその只中におられます。教派を超え、祈りをあわせつつ、共につながりましょう。

こどもたちのいのちと教育の機会を守るために

2021年度献金先を紹介します。１つめは、アジアで最貧国と言われたバングラデシュで30年間も初等教育支援を続けている「アジアキリスト教教育基金」です。当初から授業は二部制で、こどもたちは家事や仕事をしながら通います。学ぶ喜びを知ったこどもたちは、働きながら中学や高校で学び続けます。２つめは、「ママ・ナ・ムトト」プロジェクト（スワヒリ語で母と子の意味）で、「日本キリスト教海外医療協力会」がタンザニア・タボラ州で行っている医療・保健教育活動です。タボラ州は、タンザニアの中でも医療が行き届いていないため、生後一週間未満の赤ちゃんの死亡率は国内平均の４倍近いそうです。妊婦検診や新生児健診が実施できていないため、せっかく誕生したいのちが失われてしまっています。コロナウィルス感染症拡大のため、状況は更に悪化していますが、准看護師や助産師となる学生への奨学金支援もしています。

「とかちエテケカンパ」と奨学生への支援

３つめは、アイヌ民族のこどもたちへの教育支援です。日本には、先住民族としてアイヌの人々がいますが、日本政府のアイヌ政策は先住民族としての権利を無視したままです。日本キリスト教団北海教区は、過去の反省に立ち、アイヌ民族の方々と共に歩むために30年前に奨学金制度「アイヌキリスト教協力会」を始めました。アイヌ民族の豊かな文化や誇りを共に分かち合うために、教育支援を続けています。ぜひ関心をもって豊かなアイヌ文化にふれてください。

呼びかけ・問い合わせ先

NCC 教育部
（日本キリスト教協議会教育部）

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-21
TEL&FAX 03-3203-0731
E-mail ncc-education@cello.ocn.ne.jp
URL https://nccj-edu.jimdo.com
募金期間 2021 年 6 月～ 2022 年 3 月末
献金送付先 郵便振替 00150-8-98713
加入者名 日本キリスト教協議会教育部
振込用紙に「平和のきずな献金」と明記してください

2021 年度の「平和のきずな献金」は右記のように用いられます。
お祈りと共にどうぞお支えください。

献金先
- バングラデシュの貧困家庭のこどもたちの教育支援に
（アジアキリスト教教育基金［ACEF］を通して）
- タンザニアの母子保健・健康教育支援に
（日本キリスト教海外医療協力会［JOCS］を通して）
- アイヌ奨学金に
（「アイヌ奨学金キリスト教協力会」を通して）
- 外国にルーツをもつ福島の子どもの教育支援
（「福島移住女性支援ネットワーク」（EIWAN）を通して）
- NCC 教育部平和教育推進基金に

外国にルーツをもつこどもたちの母語継承教育

４つめは、上記タイトルそのものです。東北地方には、日本人男性と来日女性との間に生まれたダブルのこどもたちがいます。主に、フィリピン、中国、台湾、韓国などです。こどもたちは学校で日本語を習得しますが、母親の母語を学ぶ教育プログラムはありません。思春期に母子の意思疎通がスムーズにいかないと、時に深刻な問題も起きます。「EIWAN」は、数か所で母語継承教室を開いて母子両方の教育支援をしています。皆さまの周囲にもダブルのお子さんがきっとおられると思います。冒頭の聖句は、ここまで述べたように、国内外の異文化を受けとめあう大切さについても語りかけているのではないでしょうか。

ミャンマー CDM（Civil Disobedience Movement）への連帯

ミャンマー国軍による犠牲者は 800 名（2021 年 6 月現在）を超え、少数民族への空爆や性暴力も起きています。日本では 2 月のクーデター直後から「オンライン祈り会」が続き、毎回、在日ミャンマー人を含む 90 名程が集います。スライドで紹介される映像や証言は生々しく、家を焼かれた少数民族の母子はジャングルで夜を明かしています。ミャンマー国軍のルーツ、ビルマ独立義勇軍健軍には、アジア・太平洋戦争時、旧ビルマに侵攻した日本軍が深く関わっています。日本軍はビルマでのイギリスとの戦争に義勇軍を組織し利用しますが、日本の敗色が濃くなると義勇軍は蜂起して抗日に転じます。戦後イギリスから独立してビルマ連邦共和国が成立しますが、やがて国軍はクーデターを起こし、軍事独裁支配が長く続きました。

ミャンマーは多民族国家ゆえの困難さはありますが、文民統治をめざしてきました。カチン族やカレン族にはキリスト者が多く、北部カチン族の 99％はキリスト教徒と言われています。北米系バプテスト宣教師の働きによりますが、在日ミャンマー人にキリスト教徒が多い所以です。日本で牧師となったカチン出身の方は何人もいます。日本の ODA（政府開発援助）がミャンマー国軍に流れないよう政府に働きかけ、CDM 運動に連帯し、こどもや若者のいのちが守られるよう、共に祈りをあわせたいと思います。

連載

2021年度「世界バプテスト祈祷週間」を覚えて

世界と繋がる

私がこの原稿を書いている今6月初旬。「世界を繋ぐ平和の祭典」と言われるオリンピックが行われるかどうかで、世間が騒然としています。世界各国共通の大問題である新型コロナウイルスに直面し、多くの人びとが苦しみ、また心配の種を常に抱え、日ごとに決行を危ぶむ空気が濃くなる中にあっても、開催ありきで事が進むのを見るに際し、やはりオリンピックは世界を繋ぐ平和の祭典ではなく、命を軽視した経済のイベントだったのだという思いが拭いきれなくなっています。

私たちは、新型コロナウイルスという未曾有（みぞう）の危機を体験しています。この危機が世界規模の危機だからこそ、互いの苦しみ悲しみが手に取るように理解でき、世界の人たちを心配し想いあう祈りへと導かれているように思います。

これまで私たちは、世界宣教という祈りを通して、国内、国外を問わず世界と結ばれてきました。この繋がりは、新型コロナウイルスで閉ざされようとも切れることのない繋がりです。「不要不急の外出を控えて」とか、「人との接触は控えて」などと毎日のように繰り返されると内向きになってしまいそうな自分がいます。しかし自分に閉じこもることなく、扉を開けさえすれば、世界宣教という世界と繋がる道が用意されていることをあらためて実感することができます。ここにこそ、希望を与えてくださる主イエス・キリストによる繋がり、主にある平和があると思います。

日本バプテスト女性連合の歩み

世界バプテスト祈祷週間の働きは、日本バプテスト女性連合（以下、女性連合）の前身である婦人会同盟の時代、生活に困窮（こんきゅう）している女性たちのための助産施設「隣光舎」の働きを事業とし、祈り捧げ支えることから始まりました。それから現在まで、世界バプテスト祈祷週間の推進を担い、日本バプテスト連盟（以下、連盟）が行う国内、国外伝道、そして女性連合独自の世界宣教の働きを支えるため祈りと献金を捧げてまいりました。

女性連合の使命の一文に「世界のさまざまな痛みの中で苦しみ悲しむ人びとに寄り添い、共に福音にあずかります」とあります。この部分の基となった聖句は、ルカによる福音書4章18～19節で、今の時代、特に大切にしなければならないみことばだと思います。

これまで、女性連合は独自に多くの繋がりをいただいてきました。例えばアジア諸国の支援先では、命も個性もないがしろにされ、過酷な状況に置かれている女性たち、貧困や家庭内での暴力、性的虐待など深刻な状況に置かれている子どもたちの事実に直面します。また、東日本大震災以降、福島に生きる移住女性の方がたの支援先との出会いから、異国で生き抜く生きづらさ、子どもを育てる厳しい現実に立ち向かう外国籍の人びとの懸命な生きざまをも知らされています。

私たちが繋がりをいただいているそれぞれの場所で、生きて働かれている主が、苦しみ悲しむ人

市川八幡キリスト教会 教会員　**吉高 路**

びとの真中にいてくださる。寄り添ってくださっている。その凄い事実と出会わせていただき、その生きるための数々の闘いとそれを支える主のみ業とに参与させていただきたいと強く思わされます。

「変化著しいこの地で、主イエスが今どこにおられ、その眼差しが今どの方に向かっているのか、追っていきたいです。そして私たちは、主イエスと同じ眼差しをもって、そのお一人お一人に寄り添っていきたいと願っています」。数年前、カンボジアの嶋田和幸宣教師が「国外伝道ニュース」（連盟宣教部発行）に寄せてくださったことばです。この姿勢は、私も常に心に留めておきたい思いです。

世界バプテスト祈祷週間ポスター

みんなの世界宣教

連盟の国外伝道の働きは、復活のイエスさまが、世界のどこにあっても先立って働いておられるのだという信仰に基づき、決して一方向ではなく双方向の働きとして、関わりをもつ相手側のニーズに応え、共に福音に与る働きとして進められています。この働きが、これからも豊かに導かれますようにと祈ります。また、今、時代の転換点に立つ中で、これからの世界宣教の意義や具体について、連盟と女性連合が一緒に考えていければと思います。

今年もアドベントの最初の日から一週間を世界宣教の働きを覚え祈る日々として「世界バプテスト祈祷週間」を過ごします。もちろん世界宣教の働きは女性連合、女性会だけの働きではありません。連盟の協力伝道の働きであり、教会、伝道所、私たち一人ひとりの働きです。そして、この日本を含む全世界にあって、キリストの恵みと解放の業を分かち合う働きであることを覚えたいのです。

私たちの心の窓を世界に大きく開き、主が先立って働かれている世界に出会い、祈りを合わせともに主に仕え歩んでまいりましょう。

「ともに分かち、ともに生きる」「おはなし」、あなたはどう読んだ?

どう読む?「おはなし」

ジョン・クラッセンの書いた『ちがうねん』（クレヨンハウス 2012）という絵本をご覧になったことはありますか。大きな魚から帽子を盗んだ小さい魚の物語です。ドキドキするこの絵本を読んだ後、「だから盗んではいけません」と教訓として読み聞かせると、クラッセンの「帽子シリーズ」の面白さが半減する気がします。

ともすると私たちは、ある物語に出会った時、そこから何か学ばないといけないと構えてしまうことはないでしょうか。また、聖書の中の「物語」に対しても、はじめから教訓やお説教のように受け止める傾向はないでしょうか。聖書を読んだ後で、「さて、人生のためにここから何を学び、どう生かすべきか」にばかりに重点を置いていると、聖書の中にある数多くのストーリーの深さ、豊かさ、面白さ、苦しさ等々を見失いかねません。教会学校の現場は、「聖書の知識と教養を得られたら良し」ではないはずです。そのことを踏まえて、『聖書教育』の「おはなし」は、「聖書を教えること」よりも「聖書から聴くこと」に…更に「みんなで聴く」ことにポイントをあてて執筆されました。『聖書教育』の読者である皆さまは、その「おはなし」をどう読んでおられるでしょうか。

「おはなし」が生まれるまで

皆さんの手元に『聖書教育』が届く約1年前に、執筆者会議が開かれ、各執筆者たちが該当の聖書箇所について語り合う時を持っています。この会議自体が一つの共同学習と言えるでしょう。それぞれに背景も置かれた場も違う者たちが集まって共同学習しているのですから、ワイワイと盛り上がることもあれば、話が暗礁に乗り上げることもあります。沈黙を含めた対話を繰り返す中で、やがて「今回は、このことを語ろう」というものが浮かび上がることがあるのが、共同学習の醍醐味（だいごみ）です。

執筆者は、冊子ごとに違います。ですから、ウン年前に同じ聖書箇所を取り扱ったのに、その時その時の執筆者会議という共同学習の結果で、語りたいポイントが変わってくる場合もあります。このことが明白に表されているのが「おはなし」に添えられているカット（イラスト）でしょう。「おはなし」ごとに添えられているイラストは毎回一つだけです。その一つのイラストは、執筆者会議の中で、「まさに、このことを語りたい」というものが描かれています（尚、このイラストは『聖書教育』の HP からダウンロードできます。色付きのもの、ぬりえ用のものと二種

『聖書教育』編集委員
萩原永子
（洋光台キリスト教会 牧師）

類ありますので、ぜひご活用ください)。「ああ、この聖書箇所はよく知っている。こういう『教え』なんだよね」とハナから思う前に、ぜひイラストに目を留め、書いてある「おはなし」に浸ってみてください。そこから何か浮かびあがるものがあると思うのです。

神さまの物語の中にある、「わたし・たち」の物語

「みんなで聴く聖書のおはなし」について考える時、私が思い出すのは、長崎バプテスト教会の幼児教室「光の園」での日々です。そこでは毎日「聖書のおはなし」の時間がありました。半円を描いて座る子どもたちの前には、「おはなし」をする先生が座ります。先生が手にした聖書には、いくつもの栞が挟まれていて、「〇〇ちゃん、前に出てきて緑色のしおりのページを開いてください」と、一人の子に呼びかけます。そうやって、毎回誰かが前に招かれて聖書を開くと、「今日は、ここからおはなしします」と言って、先生は物語を語り出すのです。聖書には、ワクワクする沢山のおはなしがある…。幼少期のその感動は、私にとって聖書を読む原体験となっています。

思い返せば、聖書全体が、神さまの長くて広くて大きな物語です。そこには、様々な人たちの、悲しみや怒り、喜びや感動が生き生きと語られた物語がたくさん載っています。同じように、私たちもまた自分の人生という物語をそれぞれに生きています。けれども「物語」を味わうようには、じっくりと堪能しきれません。誰かや何かに傷つけられたり、誰かを傷つけたりして、「物語」どころではなくなってしまいます。だからこそ、聖書という神さまの大きな物語の中にあるいくつもの物語が、私たちを力づけ、「私の人生」という物語に、新たな視点を与えてくれるでしょう。一人では気づかなくても、誰かと共に読み、分かち合うことで、はじめて気づくこともあります。

共同学習を経て、「この箇所を、こんな風に見たよ」「こんな物語を聴いたよ」と記された「みんなで聴く聖書のおはなし」…。読んだ時、「なるほど」と思う方も、「そうかな？」と思う方もおられるでしょう。どんな思いが浮かぶにしろ、そこに生まれた物語を、ぜひ味わってみてください。そして、教会学校の場で、お互いに「あなたは、どう読んだ？」と対話をしてみてください。新たな物語がそこに浮かび上がってくるはずです。

執筆者紹介

概論・聖書の学び・成人科・みんなで聴く聖書のおはなし

梶井 義郎（かじい よしろう）
高松常磐町キリスト教会
牧師

5年ぶりの執筆でした。執筆の途中、大分県に30年以上一人暮らしをしていた母が長引くコロナ危機のせいか、体調を崩しました。その為、三回の執筆者会議（Web）のうち、一回を欠席して大変、ご迷惑をおかけしましたが、編集の皆様のご理解と牧会、そして、常に祈ってくださった高松常磐町キリスト教会の皆様の支えで責任を果たすことができました。大人も子どもも生きづらいこの時代にあって「聖書の学び」などが、教会学校の「現場」に少しでも用いられることを願っています。

青少年科

松坂 克世（まつざか かつよ）
日本バプテスト静岡キリスト教会
牧師

こうやって作られているのだなあ、と聖書の言葉を真ん中にして対話を重ね、今回も感激しつつ執筆しました。聖書からの問いに出すべき正解はありません。でもあなた（わたし）なりの答えを見つけ出すために、共に悩みたいと願っています。あーでもない、こーでもないとワイワイガヤガヤ言いながら。そのために用いられるならばこれ以上幸いなことはありません。第39課の寅さんの言葉は『男はつらいよ　葛飾立志篇』（第16作）より。

幼小科

中條 邦子（ちゅうじょう くにこ）
宮崎キリスト教会
牧師

実り豊かで食べ物のおいしい宮崎に越してきて9年目となりました。12月分の原稿締め切り間際に大量の梅が我が家に届きました。原稿とワークと工作と梅に取り組む毎日でした。編集委員の皆様にはご迷惑をおかけしたことと思います。すみません。『聖書教育』10・11・12月号が皆さんのところに届くころには、おいしい梅干しや梅シロップができ上がっていることを願っています。

表紙

三浦 あや（みうら）
藤沢バプテスト教会
教会員

表紙タイトル「すべての人を照らすいのちの光」
その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。ヨハネ福音書1：9
世界バプテスト祈祷週間をおぼえて、色々な国の子どもたちが祈りを捧げている絵を描きました。この絵を描いている今現在、ミャンマーやイスラエルで軍事攻撃が起きています。一人ひとりの命が尊ばれるよう希望の光を灯し続けていきたいと思います。

編集後記

＊詩編を暗誦している方は多いことでしょう。私にも折々に口をついて出る詩がいくつもあります。学びを通して、詩が声のように生きられる場所があったことに思いを馳せます。言葉そのものに呼吸を感じながらの編集に、忘れならない詩となりました。（T.N）

＊10歳のとき、兄に連れられて初めていった教会学校で読んだ詩編23編。よく分からないまま、想像力だけは豊かに「緑の牧場」の風景を思い浮かべていました。心騒がせてしまうことが多い日々の中で、私たちの羊飼いイエスさまのご降誕を待ち望みながら編集を重ねた1冊をお届けします。（Y.I）

この時代に「詩編」を読む

高松常磐町キリスト教会
牧師　梶井義郎

著者

詩編の著者は、三分の一が不明です。他の三分の二は各詩編の表題にその名が記されています。例えば、今回学ぶ19編、23編、24編、131編は竪琴の名手であったダビデ、72編は民の訴えを正しく聞き分ける知恵があったソロモンと記され、ダビデ、ソロモン自身の作、あるいは、ダビデ、ソロモンに由来する後代に作られた詩と言えるでしょう。

構成

詩編は旧約聖書の歴史書にあたるモーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）に倣って五巻にまとめられ、各巻は頌栄で結ばれています。今、私たちの手元にある旧約聖書が、紀元前6世紀のバビロン捕囚後にバビロンにて編集されたという視点に立つと、偶像礼拝に伴う亡国という「混沌」の闇にあっても、悔い改めるイスラエルに「光あれ」と語られ、歴史を支配されイスラエルの民と共に歩まれる主なる神に栄光を帰すという、編集者の編集方針が見えてきます。

「イスラエル」の叫びとしての詩編

バビロン捕囚以後に編集されて以来、約2600年に渡って歌われてきた150編に渡る詩編を一つのメッセージとして説明するのは困難です。90編で分かるように一つの詩編の中でも「嘆き」、「叫び」、「苦悩」、「悔い改め」、「感謝」、「賛美」、「願い」などが含まれているからです。しかし、150編全体に渡るテーマがあるとしたら、それは「イスラエル」の叫びとしての詩編ということでしょう。詩編のおよそ半分は、困難な時代状況にある詩人が主なる神の先立つ恵みと助けを前もって感謝し、神の助けを命がけで叫び求める祈りの詩（うた）だからです。

「イスラエル」とは

詩編が語る「イスラエル」とは、バビロン捕囚により「追いやられた人々」（147編）、「貧しい人々」、「助けを求めて叫ぶ乏しい人」（72編）のことであり、その時代において「小さくされた人々」のことです。直接的に1948年に建国された現代の「イスラエル国」を指しておりません。

「小さくされた人々」が詩編における「イスラエル」ならば、そして、その「イスラエル」の叫びを主なる神が、歴史の中で聞かれるならば、私たちは、大人も子どもも生きづらい今日の時代状況において、自分の身近におられる「小さくされた人々」と出会い、また小さく声を挙げられない自分自身と出会い、共に生きようとしているのでしょうか？

聖書の学び

わたしの贖(あがない)い主よ

聖書 詩編19編1～15節

暗唱聖句 天は神の栄光を物語り　大空は御手の業を示す。
詩編 19：2

27課

10月3日

全体の構成

詩編８編と同じく、神さまの創造をたたえる賛歌で、前半（19:2～7）と後半（19:8～15）に分かれます。前半は、天における神の栄光、特に、太陽の運行に見られる神の栄光をたたえ、後半は神の教えである「主の律法」における栄光をたたえ、その教えを完全に守ることができるように、という詩人の祈りで終わっています。

根源的祝福

まず詩人は、神の被造物である「天」「大空」「昼」「夜」に目を注ぎます。詩人によると「天」は神の栄光を物語り、「大空」は神の「御手の業」（19：2）を示します。「御手の業」とは、詩編８編７節に「御手によって造られたものをすべて治めるようにその足もとに置かれました」とあるように、神の創造の業を示しています。ヘブライ語で「栄光」とは「重い」という意味もあります。神が造られた「天」「大空」をはじめ、全地は神ご自身の栄光を示す重い使命を帯びている、ということでしょう。今世紀に入り、地球温暖化による豪雨、高温、超大型台風などの異常気象が顕著(けんちょ)となってきました。それは「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」（創世記１：28、詩編８：７参考）という使命に背き、開発という名の貪(むさぼ)りである「重い背きの罪」（19：14）を「知らずに犯し」（19：13）続けている、私たち人類に対する神の想いを「物語」（19：2）っていると言えるでしょう。

「昼は昼に語り伝え　夜は夜に知識を送る」（19:3）とは、昼と夜も神の被造物（創世記 1:14～18）ですから、創造者である神についての「知識」をたとえ「話すことも、語ることもなく」（19：4）とも、それぞれリズミカルに次の昼と夜とに伝えていることになります（岩波書店『詩編』脚注参照）。間断なく続く「昼」と「夜」、「夏」と「冬」、つまり、日々の流れは、「見よ、それは極めて良かった」（創世記１：31）という神の根源的祝福なのです。

詩人にとって「太陽」も「昼」と「夜」と同じように人類に対する神の根源的祝福を演じる役者であり、エジプトやメソポタミアのような偶像神ではなく、あくまでも天地を創造された神の被造物です。「そこ」（19：5後半）とは、「天」（19：2 複数形）のことです。また、「幕屋」（19:5 後半）とは「太陽」が夜に休む場所です。朝となれば「天の果て」から登場し、夜となれば「天」における「幕屋」で休むリズミカルな太陽の運行も今日一日に対する神の根源的祝福を語りかけています。

８～11 節では、神の教えである「主の律法」（19：8）であるトーラーの栄光をたたえています。２節の「神」（エール）に対して、８節から「主」（ヤハウェ）という言葉が登場します。ヤハウェとは、「彼は生じさせる」という意味です（『聖書教育』2020 年 7•8•9 月号 80 頁）。人がその名を口にしてはならないほど畏れるべき存在の「神」から、人に命の「律法」をくださる方、また、名を名

乗るほどに「主」として近くに迫ってきてくださり、救いの出来事を起こしてくださる方です。

わたしの贖い主よ

14節の「驕(おご)り」と「重い背きの罪」とは、それぞれ、高ぶって自分を絶対化するという偶像礼拝を指します。「神に従う人は信仰によって生き」（ハバクク2：4）ます。私たち人間は、つい高ぶって自分を絶対化してしまう偶像礼拝に陥(おちい)り、滅びの道を歩みがちです。そういう私たちの「知らずに犯した過ち、隠れた罪」（19：13）を赦し、清め、再び、信仰者としての道へ歩ませてくださるお方、それが「わたしの贖い主」である主なる神です。旧約聖書において、既に主なる神を罪の「贖い主」として讃美していることに注目したいものです。

準備のための聖書日課			
27日	㊊	エゼキエル 47:1～12	すべてのものが生き返る命の水
28日	㊋	エゼキエル 47:21～23	外国人のための嗣業
29日	㊌	ローマ1:18～23	神の永遠の力と神性
30日	㊍	ローマ10:14～21	信仰とは聞くことによる
1日	㊎	創世記1:14～19	夕べがあり、朝があった
2日	㊏	ハバクク2:1～4	信仰によって生きる

成人科

●最近、10月に入っても大型台風が日本列島を襲うようになりました。また、この原稿を書いている2021年3月下旬現在、新型コロナウィルスの収束が見えません。疫病、そして、地球温暖化による豪雨、高温、超大型台風などの災害は「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物を支配せよ」という使命に背き、開発という名の貪りという「重い背きの罪」を犯し続けている私たちに、神さまが語りかけているのではないでしょうか。

●詩編は朝となれば「天の果て」から登場し、夜となれば「天」における「幕屋」で休む太陽を通して、「わたしがこの世界にいていいのだ」という神の根源的祝福を語りかけています。神が創られた「天」「大空」「昼」「夜」などの天体や自然の移り変わりを通して、今、この時代、この世界においてもなお、かけがえのない者として祝福をいただいていると感じた体験があれば、分かち合いましょう。

●詩編は、そういう神の根源的祝福のうちにあるのに人間は高ぶって自分を絶対化する「重い背きの罪」を抱いている。そして、そういう私たちの罪を赦される「わたしの贖い主」を賛美しています。クラスで罪の赦しの証しを分かち合いましょう。

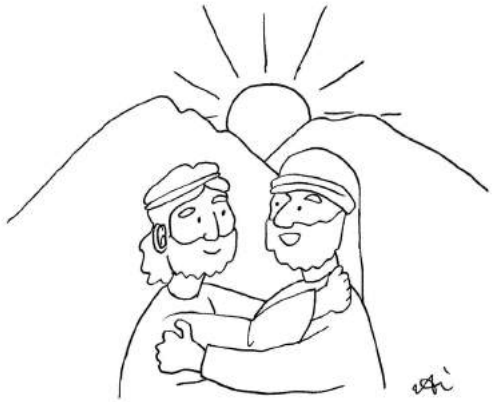
わたしの贖（あがない）い主よ

聖書 詩編19編1～15節

暗唱聖句 天は神の栄光を物語り　大空は御手の業を示す。
詩編 19：2

27課

10月3日



詩編の詩人にとって、「天」「大空」「昼」「夜」は、神さまによって造られた被造物です。詩人によると「天」は神の栄光を物語り、「大空」は神の「御手の業」を示しています。「御手の業」とは、神さまの創造の業を示しています。「栄光」とは、重いという意味なので、神さまが造られた「天」や「大空」をはじめ、全地は神ご自身の栄光を示す重い使命を帯びているのです。

最近、10月に入っても大型台風が日本列島を襲うようになりました。地球温暖化による豪雨、高温、超大型台風などは「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」という使命に背き、開発という名の貪（むさぼ）りという「重い背きの罪」を犯し続けている、私たち人類に対する神さまの想いを物語っているのかもしれません。

「昼」と「夜」も神さまの被造物ですから、創造者である神さまについての「知識」を「話すことも、語ることもなく」ても、それぞれ歌うように次の昼と夜とに伝えています。季節もそうです。繰り返し続く「昼」と「夜」、「夏」と「冬」、日々の流れ、自然の移り変わりは、「見よ、それは極めて良かった」という神さまからの豊かな祝福なのです。

詩人にとって「太陽」は、「昼」と「夜」と同じように、人類に対する神さまからの豊かな祝福を演じる役者です。礼拝する相手ではなく、あくまでも天地を創造された神さまの被造物なのです。朝となれば「天の果て」から登場し、夜となれば「天」における「幕屋」で休む規則正しい太陽の運行も今日一日に対する神さまからの豊かな祝福を語りかけています。

神さまの呼びかたが、「神」（エール）から「主」（ヤハウェ）という言葉に変わったのは、名前を名乗りたくなるほど近い存在だからです。そして「主」という名前は、私たちの日々の生活において、「神さまが救ってくださった」という出来事を思い出させてくれるものです。「主」は、私たちに命を与え、知恵を与え、心に喜びを与えてくれるのです。しかし私たち人間は、つい高ぶって自分がいつでも正しく、なんでも知っていると誤解しがちです。そういう私たちが知らないうちにおかしてしまった罪を赦し、清め、もう一度神さまを愛し、隣人を自分のように愛する命の道へ歩ませてくださるお方、それが私たちを赦し、救ってくださる主なる神さまです。だから、今日も詩人は祈るのです。

わたしの贖(あがない)い主よ

聖書 詩編19編1〜15節

暗唱聖句 天は神の栄光を物語り　大空は御手の業を示す。
詩編 19：2

聖書から…

今日から新しく詩編を学んでゆきます。詩編というのは、メロディに乗せて歌い継いでいった「うた」でした。というのは、それは「ことば」を文字として語り継いだり、書いたり読んだりして受け継いでいったものだけではないということです。節をつけて、時にはそこに感情を込めて信仰の事柄をメロディと共に歌ったものです。この詩編からはどんなメロディが聞こえてくるかな？ そう感じながら読むとまた違う味わいになるでしょう。

今日の詩編 19 編では、冒頭に「指揮者によって」とあるように、歌い手を導く人もいたようです。ここには神さまの壮大な創造の業(わざ)をリズミカルに歌っています。一日の生活のリズム、一年の季節のリズム。織りなす日々の営みの中で、神さまの創造の業を繰り返し覚えることを与えられています。私たちはそんな毎日の生活の中で、新しく創造される神さまの出来事をどのように感じているでしょうか？

私たちも日常の中で、大好きな賛美歌をふと口ずさんでいる時があります。誰に聞かせるわけでもなく、それこそが神さまへの賛美なのかもしれません。自分の節で、自分の声で、自分らしく賛美する。それが私たちに与えられた賛美なのです。

分かち合おう

- 聖書の学びにあるように、「栄光」とは「重い」という意味がある言葉です。創られたものとしての重い使命、それを丁寧に、そしてまっすぐに担い合う時に神の栄光が表されるのでしょう。神さまに創られた存在としてお互いに尊重し合うこと、それがみ言葉に従うことです。誰と向き合おうと、対等な立場で何かを一緒に担い合っていることはあるでしょうか？話し合ってみましょう。

- この詩編に、実際に自分なりの節をつけて歌ってもいいでしょう。そもそも、人はなぜ歌うのでしょうか。教会学校で賛美歌を歌い、礼拝で会衆賛美があり、時には特別賛美として聖歌隊やトーンチャイムの演奏がある教会もあるでしょう。どうして人は歌うのか、話し合ってみましょう。

- 信仰を歌い継ぐ、なんてすごいことだと思いませんか？ 私たちは大好きな賛美歌を覚えて、気がつくといつの間にか鼻歌で歌っていることもあります。それは信仰を告白することでもあり、み言葉そのものを歌うことでもあります。そんな時、神さまを近く感じることもあります。そんな経験はないでしょうか？

幼小科

わたしの贖（あがない）い主よ

聖書　詩編19編1～15節

暗唱聖句　天は神の栄光を物語り　大空は御手の業を示す。
詩編 19：2

27課

10月3日

聖書から…

創造主である神さまは、「天」や「大空」や「昼」や「夜」、海の魚、空の鳥、地を這う獣たち、そして、私たち「人間」も造られました。神さまは創造をされたとき、「見よ、それは極めて良かった」と造られたものを祝福され、共に生きるようにとされました。しかし、今は人間が、自分たちが思うがまま生きるために、自然が破壊されて大変な災害も起こっています。私たちが神さまから造られた世界と共に生きるということはどういうことなのか、神さまに贖われた者として、みんなで一緒に考えたいですね。

活動①

「神さまが創られた世界はどんな世界？」

私たち、教会の周りにある神さまが創られたものを探してみましょう。何があるでしょうか？「花」「木」「犬」「猫」…。

逆に私たち人間が作ったものはどんなものがあるでしょうか？「椅子」「エアコン」「冷蔵庫」…。

私たちが作ったもの、神さまが創られたもの、どうしたら一緒に生きられるでしょう。一緒に考えてみましょう？

活動②

「あの空はどうして青いを歌おう！」

さんびか「あの空はどうして青い」（『友よ歌おう』いのちのことば社）をみんなで歌いましょう。オリジナルダンスや手話、手作り楽器などを用いて楽しく賛美しましょう。

活動③　ワークシート

「あの空はどうして青いを作ろう！」

ワークシートを参考にしながら、紙芝居、ペープサート、パネルシアター（※）などを作ってみましょう。でき上がったら、それを用いて一緒に賛美しましょう。

※パネルシアターの土台（パネル板）は段ボールなどにフランネルやフェルト生地などをはるとできます。絵の型紙はＰペーパーというのもありますが、不織布や接着芯などでもできます。手に入りやすいものをご利用ください。マグネットシートに絵を書いたものをホワイトボードへはったり、画用紙に書いたものにマグネットをつけてもできます。

ワークシート

あの空はどうして青いを作ろう!

聖書の学び

いつもわたしを

聖書　詩編23編1～6節

暗唱聖句　命のある限り　恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
詩編 23：6

28課

10月10日

歴史的背景と解釈

詩編 23 編は神への感謝と信頼を歌ったダビデに由来する賛歌です。詩人である「わたし」は山あり谷ありの人生において神の愛と守りを確信して平安そのものです。

また、詩人「わたし」をイスラエル民族と捉えて、モーセを通してエジプトからイスラエルの民を導いた牧者としての主（ヤハウェ）を賛美する詩という捉え方もできます。主は羊の群れであるイスラエルを「死の陰」（23：4）であるエジプトから導き出し、途中、荒れ野では「青草の原に休ませ」「憩いの水のほとり」（23：2）に導きました（参照：出エジプト 15：13）。

「わたしを苦しめる者を前にしても　あなたはわたしに食卓を整えてくださる」（23：5）は、敵の真っ只中からの救いの保証としての最初の過ぎ越しの食事（出エジプト 12 章）を指していると考えられます。

主なる神の御名、それは「あわれみ」

「御名にふさわしく」（23：3）とは、主がいつも民のそばにいることを意味します。「羊飼い」（23：1）が羊飼いである理由は、羊のそばにいることにあるからです（参照：出エジプト 3:12、33:14）。ですから「御名」とは、ご自分の民の「うめき、叫び、嘆き」（出エジプト 2：23、24）一つひとつを聴かれ、天からくだられ、民と共におられ、その「うめき、叫び、嘆き」を顧（かえり）み、み心にとめられる神のあわれみそのものです。

「死の陰の谷」（23:4）の意味が「命の危険」であることを考えると、前は葦（あし）の海、後ろはファラオの精鋭部隊という絶対絶命状況にあって、葦の海の奇跡（出エジプト 14：19～31）を起こされて、ご自分の民を救われた主を賛美しています。

「鞭」（23:4）を直訳すると「棒」です。「棒」は羊を狼から守るためのものです。「杖」は羊を導くためのものです。羊は大きくなると百キロを超えることもあるそうです。その羊が窪みに落ち込むと自分では上がれません。羊飼いはその羊を先の曲がった杖で、窪みから引き上げます。このように羊は弱く、狼など獣に対して無力で近視眼的で非常に迷いやすい動物です。まるで誘惑に迷う私たちそのものです。

敵を前にした主の歓待と逆転

もてなしの為に客の頭に「香油」（23：5）を注ぐことは、パレスチナの習慣です。この「香油」は歓待の喜びを表します（詩編 133 編）。「杯」は主人から客に回されるもので歓迎と親密さを示しますから、主人と客の饗宴（きょうえん）の場が、生きる喜びに「溢れ」（23：5）ています。「わたしを苦しめる者」（23：5）とは、私の命を狙う迫害者のことであり、「食卓」のもともとの意味は「食事の時に地面に広げられる筵（むしろ）」のことですから、命を狙われ、迫害され苦しめられている人を主が保護し、歓待される様子が生き生きと描かれています。

「わたしの杯を溢れさせてくださる」（23:5）とは、もう飲めないほど十分に飲んだ、ということですから、自分の命を狙う迫害者である敵を前にした主なる神による身に余るほどの歓待を表しています。

「追う」（23：6）とは猟犬が獲物を追いかける追跡という意味がありますから、わたしの命ある限り、主なる神の「恵みと慈しみ」が、猟犬が獲物を追いかけるように追いかけ続けます。迫害者である敵に「命」を狙われていた「わたし」は、ある時、主によって「恵みと慈しみ」、「さいわいと友愛」（『リーフ・バイブルコメンタリーシリーズ　詩編』勝村弘也著／日本キリスト教団出版局）に囲まれる身となったのです。主による逆転が歌われています。出エジプトの後、絶対絶命の状況にあった民が、海が二つに割れて乾いた土地を渡れた奇跡のように、主なる神は「わたし」の人生に逆転を与え、今や、生涯の最後まで主のみ守りの中にある、という主に対する深い信頼が歌われています。

準備のための聖書日課			
4日	㊊	出エジプト記 2:23～25	人々のうめき、叫び、 嘆き
5日	㊋	出エジプト記 3:11～12	わたしは必ず あなたと共にいる
6日	㊌	出エジプト記 12:1～11	主の過越の食事
7日	㊍	出エジプト記 14:19～31	大いなる御業を 前にして
8日	㊎	出エジプト記 15:6～13	慈しみをもって 導かれる主
9日	㊏	詩編133:1～3	注がれた かぐわしい油

成人科

- 山あり谷ありの人生において、この詩人である「わたし」は平安そのものです。何をして「わたし」に平安を与えているのでしょうか？ それを考える上で参考になるのが、動物園などで見ることができる羊の性格と羊飼いが羊飼いである理由です。「聖書の学び」や「みんなで聴く聖書のおはなし」を参考にして話し合ってみましょう。

- 「死の陰の谷」（23：4）のもともとの意味は、出エジプト記 14 章における葦の海の奇跡に基づく「命の危険」です。今までのお互いの人生において、お互いの「死の陰の谷」から主によって救いだされた証しを分かち合ってみましょう。

- 主の晩餐に与る時、私たちは十字架の主イエス・キリストによって贖われた者として、自分がどうであれ、神の目から見てかけがえのない自分を再発見させられます。6 節が語るように、そういう主による歓待の「恵みと慈しみ」に生涯通して与る私たちです。一方、この時代において「死の陰」におびえ、明日に対して不安と恐れの中で過ごす方が少なくありません。そういう、いと小さくさせられた方々を私たちが歓待するにはどうしたらよいでしょうか？

いつもわたしを

聖書 詩編23編1〜6節

暗唱聖句 命のある限り　恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
詩編 23：6

羊飼いが羊飼いである理由は何でしょうか？ それは、羊飼いがいつも羊たちのそばにいて、危険な狼や獣たちから守り、青草の原へ導き、世話をすることです。

羊は大きくなると百キロを超えるのだそうです。そのうえ近眼です。もし、そんな羊が羊飼いの言うことを聴かず、迷い出て、深いくぼみに落ち込んだとしたら、どうなるでしょうか？ ある日、勝手に草を見つけに行った羊がくぼみに落ちてしまいました。

どんなにもがいても自分では上がれません。このままだと、危険な動物がやって来て、羊を襲うかもしれません。羊が助けを求める「メエー、メエー」と叫ぶ声も段々、弱くなっていきました。

夕方になって、羊飼いは、柵の中へ羊たちを導きながら、羊たちを数えていました。「おや、一匹たりないぞ。さては、また、食いしん坊のあいつだな」。

羊飼いは、他の羊たちを安全な場所に置いて、いなくなった羊を探しまわります。そしてついに、羊の弱々しい鳴き声を聴き当てて、くぼみに落ちた羊を見つけ出しました。羊飼いは、持っていた先の曲がった杖で、その羊をくぼみからなんとか引き上げます。その羊は足を痛めていました。足を痛めた羊をかつぐのは、大変なことです。でも、羊飼いは見失った一匹が見つかったことを喜び、その重さを忘れ、肩にかついで連れて帰りました。柵の中へその羊を降

ろしながら、「やれやれ、やっと見つかった。狼に襲われる前に見つけることができてよかった」。「みんなが揃ったから、これから夕食だ。おいしい水に、新鮮な青草、特に、みつかった羊には、ごちそうをしなければな、体力を回復してもらわねば」と思うのでした。

一方、助けられた羊は、どう思ったでしょうか？「つい、また、ひとりでフラフラと迷い出でしまった。ひとりでおいしい草を食べていたら、くぼみにはまってしまった。もう『しない』と思うのだけれど、また、同じ失敗をしてしまった。でも、私の主人（羊飼い）は、いつも探して救い出してくれるんだからな。しかも、真っ先にごちそうとは、本当に幸せだな。この主人からもう離れるのはよそう！」と思いながら、ゆったりと眠りにつくのでした。

「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ憩いの水のほとりに伴い　魂を生き返らせてくださる」。

いつもわたしを

聖書 詩編23編1〜6節

暗唱聖句 命のある限り　恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
詩編 23：6

聖書から…

この詩編の冒頭には「賛歌。ダビデの詩」とあります。他にいくつもこのような歌がありますが、ダビデが実際に歌った歌というよりも、この歌にダビデという名を冠して王の歌であることを強調します。必ずしもダビデが歌ったのではなく、今回は「ある王が歌った歌」として読んでみましょう。

ここには権威ある言葉というよりも信頼の言葉が編まれています。たとえ王であれ人が生きる時、それは山あり谷あり、晴れた日もあれば雨の日も曇りの日もある、迷いもあれば悩みもある、そして成功も失敗もあります。もうダメだと思った時にこそ、神さまに祈ったり、側にいる人から励まされたりするものではないでしょうか。今日の詩編の歌い手も、きっとそんな日常の中で今日の歌を歌っていました。

「死の陰の谷を行くときも　わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」（23：4）。死の陰の谷、そこは暗黒が支配する谷底です。また命の危険にさらされるような時にも、主が共にいてくださることを信じて告白しています。それだけではなく、「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける」（同）。鞭とは棒のこと（聖書の学び参照）で羊を狼から守るもの、杖とはくぼみに落ちた羊を引き上げるものです。この歌い手はそれがわたしを力づけるものだとも告白するのです。人生は順風満帆とは行きませんが、逆風に煽られる時も、順風に揚々としている時にも、主は私たちと共におられます。

分かち合おう

- ６節でこの歌は終わっています。聖書の学びにあるように「迫害者である『敵』に命を狙われていた『わたし』はある時、主によって『恵みと慈しみ』…に囲まれる身となった」主による逆転が歌われています。この逆転とは、もしかしたら自分は何も変わっていないのに、信仰を与えられ、視点が変えられたことで見え方が変わったということかもしれません。『どんなかんじかなあ』（中山千夏・文、和田誠・絵、2005 年、自由国民社）という絵本をご紹介します。読んで感じたことなど、話し合ってみましょう。

- 主が共におられる。敵に囲まれている時も、また解放された時も、同じように主が共にいてくださるのです。私の好きな賛美歌にこんな詩があります。インマヌエルとはただ親しい人との間に主が共におられるというものではなく、自分が傷つけてしまったり、自分を傷つけてしまったりする人との間にもあるのだ、と（参考：村上浩康『大地の詩』2001 年、いのちの園・音楽部）。インマヌエル（神、我らと共に）の意味をもう一度味わってみましょう。

幼小科

いつもわたしを

聖書　詩編23編1〜6節

暗唱聖句　命のある限り　恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
詩編 23：6

28課

10月10日

聖書から…

羊は羊飼いがいなければ生きられません。近眼なので、群れから離れて迷ってしまうと崖などに落ちてしまったり怖い獣に襲われてしまったりします。羊飼いはそのような羊を自分の命と同じように大切に世話をします。

神さまもこの羊飼いのように、私たちの命を大切に育ててくださいます。しかも、独り子であるイエスさまの命を惜しまないほどに。

私たちは神さまがいつもいっしょにいて養ってくださることを信じるからこそ、恐れることなく歩むことができるのです。

活動①

「メエメエ　わたしをさがして」

●準備●シーツ人数分（メンバーの家から持ってきてもらいましょう）

①羊飼い役は、目をつぶるか目隠しをします。

②羊役は、体をすっぽりと覆うようにシーツを被ります。

③羊役は「メエメエ」と鳴きましょう。

④羊飼いは鳴き声を聞いて、その羊の名前を呼びます。

⑤名前を当てられた羊は、シーツの中から出てきて羊飼いに抱っこしてもらいましょう。

活動②　ワークシート

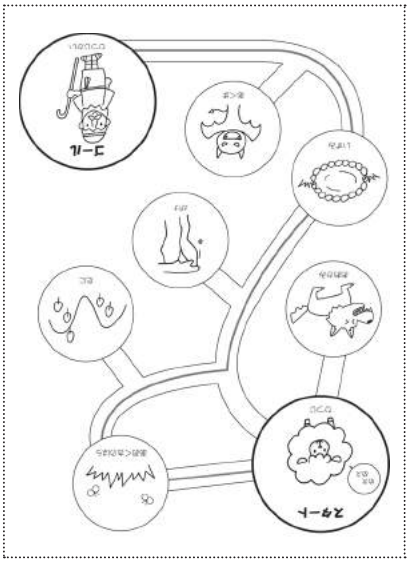
「メエメエ めいろ」

下記のように声かけしながらワークシートをすすめましょう。

羊が羊飼いのところに行けるかな？

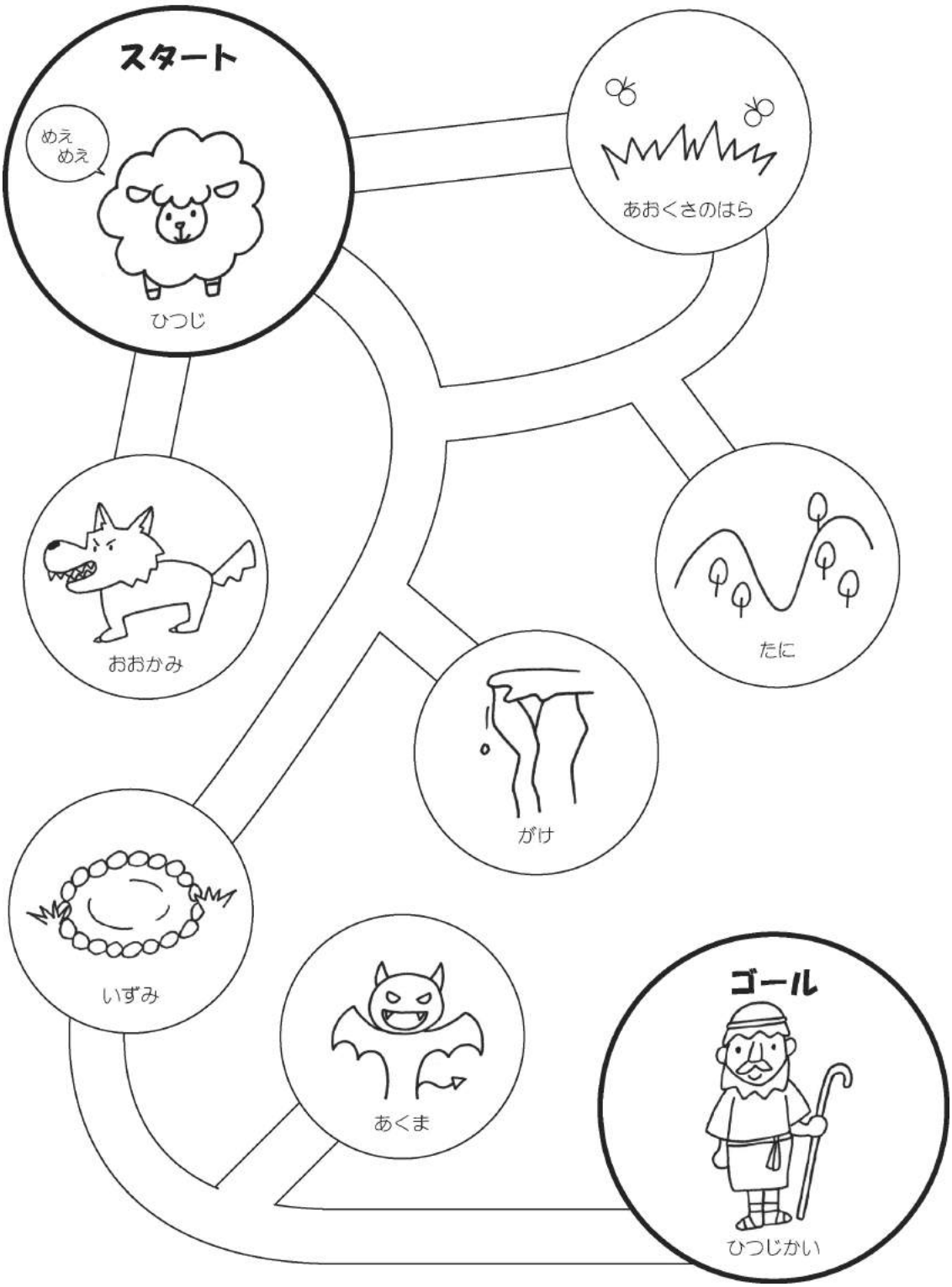
途中、怖い「がけ」や「くらやみ」、「おおかみ」や「悪魔」などがありますよ。気をつけて！

28 課ワークシートの答え



ワークシート

メエメエ めいろ



聖書の学び

すべては主のもの

29課

10月17日

聖書　詩編24編1～10節

暗唱聖句　地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。
詩編 24：1

全体の構成

詩編 24 編もダビデに由来する詩であり、15 編と並んで王国時代にエルサレム神殿の「城門」（24：7、9）前で行われていた入城する際に祭司と巡礼者代表者の間で、問答形式で読まれた典礼詩編という説があります。内容としては、次のように三つに分けられます。1 ～ 2 節：天地を創造された神への賛美、3 ～ 6 節：エルサレム神殿への入城に際しての祭司と巡礼者の問答、7 ～ 10 節：民（巡礼者）と共に神殿へ入っていく栄光の神への賛美。

内容

1 ～ 2 節は、エルサレム神殿に集う礼拝者によって歌われた賛美です。「地とそこに満ちるもの」（24：1）は、神によって造られたすべての被造物と被造世界を指します。「世界」とは「地」よりは文化的な意味をもっている言葉です。それ故、「そこに住むもの」とは、主に人間を指します。神が創造された天地、自然も人間が営む現実世界や文化もすべてが主の支配下にある、という告白です。たとえ、目に見える現実が悲惨で、神不在ともいえる混沌であろうとも、神の愛と正義によって必ず整えてくださるという信仰告白です。

その創造世界の中心は、なんと言ってもシオンの「山」（詩編 2：6、イザヤ 2：3）にあるエルサレム神殿です。ここでは、どのような人が、その主の山シオンに上り、「聖所」即ち、エルサレム神殿に立つことができるのか（24：3）と巡礼者が問い、祭司がそれに対して応えています（24：4、5、6）。ここで祭司が巡礼者たちに問うているのは、まず「潔白な手と清い心をもつ人」（24：4）です。「手」とは行いを（一テモテ 2:8）、「心」は思いを表します（詩編 51：12）。そのどちらもが「潔白」で「清い」とは、その信仰生活が倫理的に完璧であるというのではありません。そうであれば、誰ひとり神のみ前に進み出ることはできません。義人は一人もいないのですから。

むしろ、神に出会うためには、行いにおいても思いにおいても襟（えり）を正して、ということです。精一杯の悔い改めと誠実を抱いて、神の前に進み出ることでしょう（参照：ヨハネ 4：23 ～ 24）。

「むなしいもの」（24：4）はモーセの十戒において「みだりに」（出エジプト 20：7）と訳されています。偶像という意味です。「魂を奪われることなく」ですから信仰者の偶像礼拝、すなわち、自分の利益のため、神の名を利用してはならない、自分の目的達成の為、祈ってはならない、となります。神の民は、目的をかなえる為、神の名を利用したり、祈ったりしてはならないのです。

祭司が巡礼者たちに問うている条件が続きます。それは「欺くものによって誓うことをしない人」です。直訳すると「うそによって誓わない人」です。真理を誠実に問いながら生きる人のことでしょう（参照：レビ 19：12、ヨブ 28：28）。

祭司は「そのような人」（24:5）、すなわち、

行いにおいても思いにおいても襟を正して神の前に立つ人、自分の為に神を利用せず、真理を問う誠実な人を祝福しています（24：5）。旧約において「祝福」（ベラカー）とは、神が「御顔」（24：6）を向けてくださる神の臨在（民数 6:23 ～ 26）とその結果として、「平凡」な日常生活の中で礼拝ができること、その日常そのものが神さまからの「祝福」と捉えています。

主を求めて、生きよ

「主を求める人」「御顔を尋ね求める人」とは、「主を求めよ、そして生きよ」とアモス 5：6a が語りかけているように、神を尋ね、「聖所」すなわち、神の前に進み出て礼拝する者のことです。その者を神はご自分に近づけ、神の臨在を楽しみとする恵みに与らせるのです。ですから、6 節は「そのような神を求める世代の人たち、神のみ顔を求める人たちが、あなたの恵みに与るのです。ヤコブの神よ」と訳することができます。

準備のための聖書日課			
11日	㊊	詩編50:8～15	すべては主のもの
12日	㊋	ヨハネ4:23～24	まことの礼拝を求めて
13日	㊌	出エジプト記 20:1～7	みだりに主の御名を唱えるな
14日	㊍	ヨブ記28:20～28	主を畏れ敬うこと、それが知恵
15日	㊎	民数記6:22～26	主の御顔による祝福
16日	㊏	アモス5:4～6	主を求めよ、そして生きよ

成人科

● 当時の混沌とは、偶像礼拝によってもたらされたバビロンによるエルサレム神殿などに火を放たれ、バラバラに砕かれたありさまのことでしょう。今の時代は、日々目に見え、聞こえてくるニュースが悲惨であり、「神などいるのかしら？」と思う混沌です。それでも主が神の愛と正義によって必ず、今の世界を整えてくださるという信仰告白が 1 節、2 節です。先週、私たちの心を痛めた出来事やニュースの中にでも、働いておられる主の愛と正義のみわざがあれば分かち合います。

● 偶像礼拝は、私たち信仰者の祈りと形骸化（けいがいか）した礼拝において現れます。それは、自分たちの目的達成のため、祈り、礼拝するということです。具体的には、子孫が続き、自分たちの名が途絶えることなく、財産である家畜が更に増え、豊作であることを願うことです。そのため、イスラエルの民は、バアルなど神々を拝み、バビロン捕囚という混沌を招き、民の精神的な柱であったエルサレム神殿はバラバラに砕かれました。今の時代を生かされている私たちは、何の為に祈り、主日礼拝へ出席、あるいはオンラインで繋がろうとしているのでしょう。私たちにとって、何を目的に襟を正すのか、話し合ってもよいでしょう。

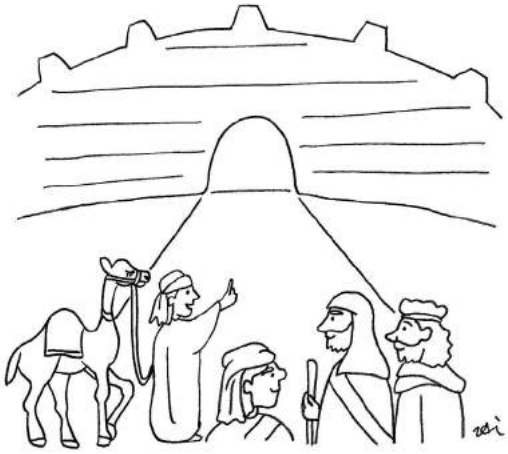
すべては主のもの

聖書 詩編24編1～10節

暗唱聖句 地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。
詩編 24：1

29課

10月17日



巡礼者たちは、命がけで険しい山を越え、谷を渡り、舟に乗って海を越え、やっとエルサレムへ辿り着きました。丘の上に立つソロモンが造った壮麗（そうれい）なエルサレム神殿が見えてきました。「神殿へ行けば、主なる神に出会うことができる！ 祝福してくれる！」ひたすら、そんな思いで旅をして来た今までの重い足取りも軽くなり、その思いは賛美となりました。「地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。主は、大海の上に地の基を置き潮の流れの上に世界を築かれた」。

いよいよ、ソロモンの神殿の門が見えてきました。巡礼者たちの一団に気付いた祭司たちが、門の外へ出てきます。巡礼者たちは叫びます。「どのような人が、主の山に上り　聖所に立つことができるのか」。祭司たちは、間違いなく、この巡礼者たちは「ヤコブの神」の祝福を求めて来た巡礼者であることを確信し、答えます。「それは、潔白な手と清い心を持つ人。むなしいものに魂を奪われることなく　欺くものによって誓うことをしない人。主はそのような人を祝福し　救いの神は恵みをお与えになる。それは主を求める人　ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人」。

祭司たちの応答を聞いた時、巡礼者たちは改めて思うのでした。「自分たちは、ヤコブの神であるイスラエルの神に出会うため、長年働き、貯金を蓄え、準備し、命がけで旅をしてきた。途中、盗賊に襲われそうになることもあった。嵐に襲われて、大変な思いをしたこともあった。そして、やっとエルサレム神殿にたどり着いた。振り返ってみると『自分たちほど、信仰深い者はいない』という思いが苦しい巡礼の旅を支えた。エルサレム神殿で神が自分たちに出会ってくれれば、帰りの旅も守られるし、なによりも、その後、子孫が続き、自分たちの名が途絶えることもなく、家畜が更に増え、畑も豊作であることを期待していた。でも、それが一体なんだというのか。ただただ、ヤコブの神が自分たちに出会ってくれたんだから、ヤコブの神が一緒にいてくださるんだから、それでもう十分ではないか！」と。

祭司たちは、行いにおいても思いにおいても、ごまかしたり、だましたりしないで、神に心開いて神殿へ入る巡礼者たちの背中を見守りながら、歌い続けます。主はそのような人を祝福し　救いの神は恵みをお与えになる。

すべては主のもの

聖書 詩編24編1〜10節

暗唱聖句 地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。
詩編 24：1

聖書から…

聖地に向かって歩くことを「巡礼」と呼びます。この歌は、そんな巡礼の道々で歌われた歌でした。エルサレム神殿を目指して歩く時に、自ら踏み締めるその地がどんな場所であるのかを確かめながら、また自分とは何者であるのかを問いつつ歩いたのです。「主の山」とは、神さまに祈り、捧げものを捧げる場所、つまりエルサレム神殿のことです。神殿を目指して歩くその一歩一歩が巡礼の旅そのものでした。

そこで、自分の歩みを振り返ると、決して聖所に立てるような器ではないが、神の祝福と恵みによって今こそ、そこに立てるという信仰を、その巡礼の旅を通して与えられたとこの歌い手は歌います。自分の利益や目的達成のために祈ることは、みだりに神の名を唱えることだからです。巡礼という旅の中で出会う様々な出来事の中で、なおこの歌い手は告白するのです。すべては主のものである、と。襟を正して神の前に立つ時、平凡な日常の中で神さまを礼拝することができること、その日常そのものが神さまからの祝福なのです。

分かち合おう

- 「人生ゲーム」というゲームをしたことがあるでしょうか？ まず、お金が配られて、それをどのように用いていくか、サイコロの運とそれぞれの判断によって全く違う結末になります。実際の人生とは、かけ離れているので面白く感じるのかもしれません。人生はよく旅に例えられます。どのように歩むのか、毎日の生活の中でする小さな決断が大きな分かれ目となることもあります。よく考えて大いに悩みましょう。そして、一番大切なのはそのプロセスにあると思います。結論にたどり着くまでのことを大切に胸に抱きながら、小さな一歩を踏み出してみましょう。

- クリスチャンは悩んだり、迷ったりしないのかな？ そんなふうに思ったことはありませんか？ いえ、もちろんクリスチャンも悩みます。もっと言えば、クリスチャンだからこそ迷うこともあるはずです。部活で教会に行けない、大会が日曜日だったらどうするの？ 神さま本当にいるのかな？ などなど。その悩みもその迷いも、かつて悩み迷ってきた人たちが教会の中にいませんか？ こっそり相談してみてはどうでしょう。答えは返ってこないかもしれないけれど、一緒にお祈りしてくれる信仰の先輩がいるかもしれません。

幼小科

すべては主のもの

聖書　詩編24編1～10節

暗唱聖句　地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。
詩編 24：1

29課

10月17日

聖書から…

命がけの旅をして、エルサレム神殿に集まった人たちは、神さまによって造られたものを「すべては主のもの」と賛美します。

私たちは、「すべては主のもの」と賛美することができますか？ 私たちは、自分が苦労して得たものや勝ち得たものは、自分自身の努力の結果、自分自身のものと考えます。「すべては主のもの」と賛美できるのは、自分が神さまによって造られて、今ここにあることを感謝しなければできません。

聖書の言葉で「へりくだる」という言葉がありますが、イエスさまが神さまの子でありながら、人として生まれ、歩まれ、神さまのみこころである十字架への道に従われたことによって、私たちに本当の「へりくだり」を示されました。

活動①

「主のものはどれ？」

27 課の活動①を参考に、「♪神さまのみ手の業によって、造られたもの言ってごらん。よく見てごらん、考えてごらん」（「♪やおやのおみせ」の曲で）をやってみましょう！

①メンバーは、一人ずつ神さまが造られたものを一つひとつ言っていき、もし、人が作ったものを言ったら、「主のものじゃない」と言います。

②リーダーが一つずつ言っていき、わざと人が作ったものを言ったら、手をたたかないようにします。手をたたいたメンバーがいたら「主のものじゃない」と言います。

活動②　ワークシート

「すべては主のもの」絵合わせゲーム

●ゲーム１●

①ワークシートを画用紙などに２枚ずつコピーして、線で切り取りカードにします。

②絵合わせゲームの要領で、絵を下にして並べます。

③メンバーは順番を決めて、順番通りにひっくり返して、当たったら自分のものにできます。

●ゲーム２●

①ワークシートを画用紙などに複数枚コピーしてカードにします。

②ルールを決めます。カードがいっぱいの人、またはカードが全くない人、どちらを「勝ち」にするのかを決めましょう。

③カードを裏向きでまとめて山にします。メンバーが１枚ずつカードをめくり、前の人と同じカードがでたら、今まで出たカードを自分のものにします。

＊メンバーが自由に書くコーナーがあるので、自由に書いてカードにしてください。

ワークシート

「すべては主のもの」絵合わせゲーム

たいよう	つき	さかな
とり	はな	くさ
いぬ	ねこ	ひと
てんとうむし	だんごむし	へび

聖書の学び

豊かな平和に

聖書 詩編72編1〜14節

暗唱聖句 王が助けを求めて叫ぶ乏しい人を
助けるものもない貧しい人を救いますように。詩編 72：12

30課

10月24日

内容

この詩は、ユダ王国の王に対するとりなしと祝福の祈りです（参照：サムエル記下 7：1 〜 16）。内容としては「裁き」と「恵みの御業」を打ち立て、平和をもたらすメシア的王の姿が繰り返し描かれています。10 節に「タルシシュや島々の王が献げ物をシェバやセバの王が貢ぎ物を納めますように」とあるところから、絶頂期のソロモン王にこのメシア的王の姿をイメージしています。なお、聖書協会共同訳は「裁き」を「公正」、「恵みの御業」を「正義」と訳しています。

裁き・恵みの御業・平和

1 〜 3 節において特徴的なのは、公正とも訳される「裁き」（ミシュパート）と「正義」とも訳される「恵みの御業」（ツェダカー）が繰り返され、3 節では「平和」（シャローム）が、調和という意味で使用されていることです。そしてそれらは神から王に与えられるものとみなされていました。それゆえ、王の職務とは、まず神を畏れ、この神の掟を忠実に守ることであり、それが大切な姿勢なのです。

民から油を注がれ、王に立てられた者は、神の掟が記されている律法を自分の傍（かたわ）らに置き、生きている限り読み返し、神なる主を畏れることを学び、この律法のすべての言葉とこれらの掟を忠実に守る必要がありました。そうすることによって、王もその子らもイスラエルの中で王位を長く保つことができたのでした（参照：申命記 17：18 〜 20）。

「平和」の基本的意味は、個人が健康で幸福であることや共同体の生活に分裂がなく、全体がうまく調和していることです。飢餓（きが）や疫病、病気が支配している社会はシャロームではありません。また、見かけ上、繁栄していても歴史上の深い過ちを神と人の前に放置し、その結果、内外に分断をもたらしている社会も、シャロームと言えません。王は、この「平和」を自ら率先して造り出す責務がありました。「裁き」あるいは「裁く」とは「貧しい人（人）」（72：4、12）を救うこと、よるべのない社会的弱者の立場を擁護（ようご）すること、内外に渡る分断を和解の使者として繕（つくろ）うことです。そして、この点が、2、4、12、13、14 節と強調されているところから、王による社会的弱者の擁護が詩編 72 編の主なテーマと言えるでしょう。詩人は、このメシア的王に「国と力と栄え」とが限りなくあるように、と賛美しているのです。

王が王たるゆえん

詩編 72 編で特徴的なのは、4 節の「乏しい人の子ら」が旧約聖書ではここしか使用されていないという点です。ダビデ、ソロモン王朝においても「虐げる者」と「乏しい人の子ら」すなわち、貧困が子孫へ連鎖する貧民階級があったと思われます。「虐げる者」は、今も「貧しい人々」や「乏しい人の子ら」を容赦なく、収奪し、抑圧し続けています。王はその状態を見過ごさず、むしろ、「乏しい人の子ら」や「貧しい人々」の叫びに耳を澄まして聴き、その人々のもとへ駆けつけ、そ

の「虐げる者」を砕くからこそ「恵みの御業」（正義）なのです。詩人はそのような姿にメシア的王の姿を見ました。「平和　シャローム」を求める民は、5～7節のように賛美を献げています。さらに、8～11節では、内政的なシャロームに合わせて、外敵さえもが平定され、「平和」が全地にもたらされるように祈っています。

メシア的王を待ち望む

13節の「弱い人」（ダル）とは、助けを必要とする貧しい病人や、日々の糧に困窮（こんきゅう）している人です。「憐み」とは、そういう「社会的弱者」の悲しみを共にすることを意味します。やがて来るメシア的王はそのような「弱い人たち」の命を贖（あがな）います。王の目から見ると「弱い人」「乏しい人」の命こそが高価で尊いのです。そこに豊かな平和の礎（いしずえ）があります。

準備のための聖書日課			
18日	㊊	サムエル記下 7:1～16	主はあなたと共におられます
19日	㊋	申命記17:14～20	神なる王を畏れることを学ぶ
20日	㊌	エレミヤ22:1～5	正義と恵みの業を行え
21日	㊍	列王記上11:1～13	ソロモンの心の迷い
22日	㊎	イザヤ9:1～6	平和は絶えることがない
23日	㊏	ヨハネ20:19～23	安かれ、平安があるように

成人科

- 旧約聖書が語る理想的な王の役割は何だったのでしょうか？「聖書の学び」と申命記17章18～20節を参考に話し合ってみましょう。詩編72編ではソロモンを社会的な弱者を擁護する理想的な王、メシア的な王のひな型ととらえています。確かに、ソロモンは即位当初、弱い人や貧しい人を憐れみ、その命を救うための知恵を神に求めましたが、晩年の失態の数々を思うと、果たしてソロモンは理想的な王だったでしょうか？

- イスラエルでは、今も日常の挨拶はシャローム（平和）だそうです。私たちが抱いている「平和」（シャローム）についてのイメージを分かち合ってみましょう。また、「平和」（シャローム）の基本的な意味を「聖書の学び」から確認してみましょう。

- 私たちが今の社会に目を向けると、格差から階級社会となったこの世界の厳しい現実や分断が見えてきます。それは、かろうじて「調和」しているかのように見えるかもしれません。この現実の中にあって、私たちは、また私たち教会は、「豊かな平和」を創り出すためにどのようなことができるのでしょうか。話し合ってみましょう。

豊かな平和に

聖書 詩編72編1～14節

暗唱聖句 王が助けを求めて叫ぶ乏しい人を
助けるものもない貧しい人を救いますように。詩編 72：12

30課

10月24日

心からの礼拝をささげるソロモン王の夢に、神さまが現れて言いました。「あなたの願うことは何でも叶えてあげましょう」。ソロモンは神さまにお願いします。「神さま、私は無力です。イスラエルの王として、どうしたらよいかも分かりません。どうか、王として神さまの言葉をよく聞いて、正しいことと、間違ったこととをしっかりと見極めることができる知恵と心を与えてください」。神さまは、イスラエルの人たちのためを思ってお願いするソロモンのことをとても喜び、その願いを聞き入れました。

ある日こんなことがありました。二人の女性がやってきて訴えました。「王様、私はこの人と同じ家に住んでいて、同じ時に赤ちゃんを産みました。ある晩、この人の赤ちゃんが死んでしまいました。すると、この人は私の眠っている間に私の赤ちゃんを取って自分のふところに寝かせ、死んだ子を私のふところに寝かせたのです」。もう一人が言いました。「いいえ、生きているのが私の子で、死んだのがあなたの子です」最初の女性が言いました。「いいえ、死んだのはあなたの子で、生きているのが私の子です」。争っている二人を前に、ソロモンは家臣に言いました。剣で「生きている子を二つに裂き、一人に半分を、もう一人に他の半分を与えよ」と命じました。すると、生きている子の母は、その子を思うばかりに「王様、この子を生かしたまま、この人にあげてください。この子を絶対に殺さないでください」と言いました。一方、死んでしまった子の母は、「この子を私のものにも、この人のものにもしないで、裂いて分けてください」と言いました。ソロモンは、「この子を生かしたまま、さきの女性に与えよ。この子を殺してはならない」と裁きました。

もしもあなたが神さまから「なんでも願いを叶えてあげよう」と言われたら、何をお願いしますか？ 王さまだったソロモンは、なんでも願いを叶えると神さまに言われた時、目に見える形で国が栄えることを願うこともできましたが、ソロモンが願ったのは、弱い人や貧しい人を憐み、命を救うための知恵でした。しかし、子どもが死んでしまった母の嘆きは癒されないままでした。彼女もまた、助けるものもない貧しい人なのでした。更に、一緒に住んでいた二人の母親は、死の陰の谷によって分断されてしまったままです。ソロモンの時代には叶わなかった嘆きの癒しと分断の和解は、やがて来る王によって実現するのです。

豊かな平和に

聖書 詩編72編1〜14節

暗唱聖句 王が助けを求めて叫ぶ乏しい人を
助けるものもない貧しい人を救いますように。詩編 72：12

聖書から…

詩編の中には今日のような歌もあります。今日は「王のためにとりなし、祝福を祈る」歌です。聖書の時代、王の仕事は人びとの間を裁くことでした。「裁く」というと断罪するようなイメージですが、言葉本来の意味は「神さまのものさしで計(はか)る」という意味です。神さまの基準に照らして考える、ということです。人間の心の中には様々な考え方や、自分のものさしもあります。でもそれらを一旦脇に置いて、王が神さまの基準で考えることができますように、そのようにこの歌い手は王を祝福し祈ったのです。

その神さまの基準とは、例えば 4 節の「乏しい子らを救い　虐げる者を砕きますように」とあるように、虐げる者たちが搾取(さくしゅ)し抑圧し続ける乏しい子らの叫びに耳を傾け、その人たちに寄り添い、その虐げる者たちを砕くことでした。王がその正義を行うことができるように、その祈りこそ恵みのみ業(わざ)であると信じてとりなしたのです。

「神さまのものさしで計る」ということについて、どのようなことを感じるでしょうか？王でなくとも、誰にとっても「自分のものさし」を一旦脇に置いて、神さまのものさしで物事を考えることは簡単なことではないと思います。いかに自分のものさしが大きいかを知らされます。だからこそ「とりなし」が必要なのでしょう。神さまのものさしで計ることができるように、と。

分かち合おう

- 沢知恵さんの『The　Line』という歌を聞いたことがありますか？ インターネットで検索すると動画が観られます。歌詞は英語ですが、私なりに訳してみると「この世界には見えない線がある。愛と憎しみの間の線はどこにあるの？ 北と南を分ける線はどこにあるの？ あなたとわたしの間にある線は？ …その線を越えゆくのはあなた自身」という内容です。分断させているのは私たちではないか。この問いについて話し合ってみましょう。

- 13 節に「弱い人、乏しい人」という言い方が出てきます。教会の中でも「社会的弱者」という言葉が使われたりします。この社会で小さく弱くされている人たち、そのような意味で使われますが、その社会を作っているのは誰なのでしょうか。私たちが目指すべき本当の社会とはどのようなものでしょうか。例えば少年少女隣人に出会う旅というプログラム（日本バプテスト連盟宣教部主催）が行われてきました。出会いというのは用意されたものではなく、出かけて行ってそこで隣人となってゆく取り組みです。各教会にはその報告書もあると思います。報告の証しの言葉を聞いてみましょう。

幼小科

豊かな平和に

聖書　詩編72編1～14節

暗唱聖句　王が助けを求めて叫ぶ乏しい人を
助けるものもない貧しい人を救いますように。詩編 72：12

30課

10月24日

聖書から…

ソロモン王は神さまから物事を正しく見る知恵をいただきました。彼はその知恵を用いて、イスラエルの人々を豊かな平和に導こうとしました。

「みんなで聴く聖書のおはなし」には、二人の女性が出てきます。子を失った女性はどんなに悲しかったでしょう。その悲しみを神さまに訴えるのではなく、自分で、同居していた女性の子を奪うという仕方を取りました。子を奪われた女性は、神さまに知恵をあたえられたソロモン王に訴え出ました。

子を失った悲しみを、自分の力で何とかしようとしてしまいましたが、子を失った女性の悲しみを共にできたら、もっと豊かな平和になると思いませんか？

活動①

「劇ごっこ遊び」

今日の「みんなで聴く聖書のおはなし」を演じてみましょう。

●**役**●二人の女性、赤ちゃん（人形）、ソロモン王

・二人の女性の気持ちはどんなでしょう。想像してみましょう。

・自分の命と同じくらい大切なものをなくしたとき、私たちはどんな気持ちになるでしょう？

・私たちの気持ちが平和になるためにどんなことが必要でしょう？ 何ができるでしょうか？

＊時間があれば役を交替してみましょう。それぞれの立場の気持ちが感じられるかもしれませんね。

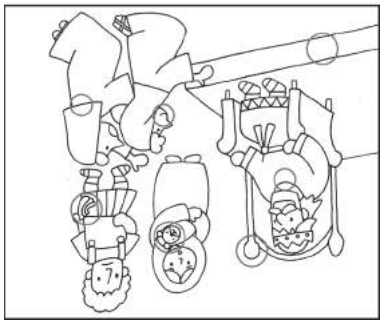
活動②　ワークシート

「どこがちがう？」

ワークシートの上と下の絵を見比べてどこが違うか見つけられますか？

間違いは全部で７つです。探してみましょう。

30 課ワークシートの答え



ワークシート

どこがちがう?

聖書の学び

希望に生きる

31課

10月31日

聖書　詩編92編1～16節

暗唱聖句　神に従う人はなつめやしのように茂り
レバノンの杉のようにそびえます。詩編 92：13

内容・背景

この詩は、人生の晩年を迎えた詩人が、自らの人生を振り返って信仰の歩みを支えてくださった主に対して、ほがらかに明るく感謝をささげた「賛美の歌」と言えるでしょう。1 節にあるように安息日にささげられた礼拝が背景にあります。その礼拝の場所は 14 節に「主の家に植えられ　わたしたちの神の庭に茂ります」とあるところから、エルサレム神殿です。その礼拝は複数の楽器を伴う礼拝であったことが 4 節から推測できます。

人生の晩年を迎えた詩人は、自分の人生を振り返って語ります。神の力を知らない「神に逆らう者」「悪を行う者」の人生は、一時的に「野の草のように茂り」「花を咲かせるように見えても」結局は不幸な人生だと語ります（92：8）。これに対して、人生にわたって「神に従」って来た人に対して、主は最後まで真実で忠実であった（92：3、13 以降参照）と賛美しています。

神の慈しみとまこと

聖書協会共同訳は、1 節の「安息日に」を「安息日のために」と原文に即して訳しています。創世記 2 章 2、3 節にある通り、安息日の精神は、神が創造の七日目にすべての創造の業を離れて安息なさったので、私たちもすべての仕事、務めから離れ、神を礼拝し、賛美するのです。

安息日の朝ごとに神の「慈しみ」を、夜ごとに神の「まこと」を述べ伝えることはいかに楽しいことでしょう、と賛美しています。「慈しみ」は、「恵み」とも訳されます。人に対するいつまでも変わらぬ神の誠実な想い、忠実とさえ思える愛をあらわす言葉です。「まこと」とは、人に対する神の真実さを示し、「忠誠」とも訳されます。この二つの言葉は、最後の晩餐において弟子たちの足を洗われて最後まで弟子たちを愛し抜かれた主イエス・キリストの姿を連想させてくれます。罪赦された人にとって、神の「慈しみ」と「まこと」が、唯一の生きる上での支えです。

御手の業

安息日礼拝において主に感謝をささげた詩人は、主の「御手の業」をも喜び歌います（92:5）。「御業」あるいは「御手の業」とは、「救済のみわざ」という立場もあります（『新聖書注解』いのちのことば社）が、ここでは、詩編 8 編 7 節に「御手によって造られたものをすべて治めるようにその足もとに置かれました」とあるように、神の創造の業を示している、と受け取りたいと思います（参照：第 27 課）。

詩人はエルサレム神殿で、朝行われた安息日の礼拝から帰る途中、空を見上げ、不条理に満ちた現実の中でも世界のすべてをつくられた主に礼拝をささげて賛美ができる喜びに満たされるのでした。

人生の晩年を迎えて

人生の晩年を迎えた詩人は、安息日ごとに主なる神を礼拝して来た、これまでの人生を振り返っています。時には「信仰の歩みをしていて何の利益があろう、無駄だ」と思うこ

ともありました。しかし、人生の晩年を迎えた今、信仰をいただき、「神に従って」歩んできて、幸いを心に刻みながら、主は私に必ず油を注いでくださると期待をも抱いています。たしかに「神に逆らう者」「敵対する者」は、今なお「野の草のように茂り」「花を咲かせるように見えて」いる。しかし、それらもまた、散らされていくのだと。

13節に「なつめやし」と「レバノン杉」が登場しています。ナツメヤシは常緑樹で、丈が高く30メートルほどにもなり、樹齢80年にも及びます。レバノン杉はさらに、30～50メートルに達するほどで、樹齢千年にも及びます。それぞれ威厳、繁栄、勝利の象徴です。

主なる神は今や老木となった私を、なつめやしのように、レバノンの杉のように、あわれみと慈しみをもって豊かに祝福されたと賛美しているのです。

準備のための聖書日課			
25日	㊊	創世記2:1～3	神の安息の日
26日	㊋	ヨハネ13:1～11	弟子たちの足を洗われる主イエス
27日	㊌	イザヤ46:1～4	白髪になるまで
28日	㊍	ホセア14:2～8	レバノン杉のように香る
29日	㊎	詩編143:1～6	御手の業を思い巡らす
30日	㊏	詩編146:1～10	ハレルヤ、主を賛美せよ

成人科

●生涯を通して主なる神を神として安息日の礼拝を守り続けてきた者に対して、主はいかに慈しみとまことを示してくださるかを語っているのが、この詩編92編です。今までの自分の人生を振り返って、理不尽や不条理が満ちるこの時代でなお、主イエス・キリストの復活を祝う主日礼拝を中心とする信仰の歩みを支えてくださった主に対する証しを分かち合いましょう。

●主なる神は、私たちの前に常に「神に逆らう者」を置かれます。また、「悪を行う者」が皆花を咲かせるように人生を謳歌しているように見えます。それに対して、自分の働きが全く周囲から理解されなくて「神などおられない」と感じて落胆しがちです。しかし、この詩人はたとえそうであっても、あなたの「御計らいはいかに深いことでしょう」と主を賛美しています。今の苦しみをも神のみ手にあると賛美する詩人の神に対する深い信頼は、どこから生まれてきたのでしょうか？話し合ってみましょう。

●詩人は、今まで数えきれない罪を犯した自分に対して、主はどこまでも「慈しみ」深く、「まこと」を尽くしてくださったと賛美しています。私たちにとって、礼拝と賛美が唯一の喜びであり、生きる支えである意味を改めて考えてみましょう。

希望に生きる

聖書 詩編92編1～16節

暗唱聖句 神に従う人はなつめやしのように茂り
レバノンの杉のようにそびえます。詩編 92：13

人生の晩年を迎えた詩人は、自らの人生を振り返って信仰の歩みを支えてくださった主に心から感謝をささげています。

「神に逆らう者、悪を行う者の人生は、野の草のように茂り、花を咲かせるように見えていた。でも、結局は不幸な人生だった。これに対して、神に従って来たわたしに主は最後まで真実で忠実であった」。

人生の真理を悟った詩人は、安息日の朝ごとにエルサレム神殿へ集い、神の「慈しみ」を賛美し、夜ごとに自宅で神の「まこと」を賛美するのでした。神の私に対するいつまでも変わらぬ誠実な想い、忠実とさえ思える「慈しみ」を思うと自然に賛美が口から出てくるのでした。

「いかに楽しいことでしょう　主に感謝をささげることは　いと高き神よ、御名をほめ歌い　朝ごとに、あなたの慈しみを　夜ごとに、あなたのまことを述べ伝えることは」。

詩人は、今までの人生において犯した罪の数々に対して、いかに主が、裁きとともに愛をもって赦してくれたか、感謝の思いがこみ上げるのでした。詩人が、罪を思いめぐらすように、私たちも、自分の働きが理解されない時や、この世の不条理にさらされた時「神などおられない」と感じて落胆します。しかし、詩人は歌うのです。「あなたの御計らいは、いかに深いことでしょう」と。それは、神の救いが自分にとって良いことを感謝し、賛美するというのではなく、苦しみをも神のみ手の中にあるという、神の計画に対する深い信頼です。

今や、詩人にとって、「慈しみ」と「まこと」の神が、生きる支えとなりました。「慈しみ」と「まこと」の神に安息日毎に感謝をささげる詩人は、主の創造の業をも喜び歌います。頭上に広がる青い空や夜空に光る無数の星、広大な海やそびえたつ山々を前に、美しく咲く花々、空を飛ぶ鳥や地上に生きるすべての命ある生き物に、神の創造のみ業の大きさを感じて希望をいただくのでした。そして、どんな時でも救いのみ業をなしてくださったからこそと神に立ち返り、感謝するのです。どんな木でも枯れていく時がありますが、なつめやしには実が実ります。実の中にある種には命があり、ふたたびそこで実を結びます。レバノンの杉は切られても、神殿の材料として生かされます。

詩人はこう思うのでした。主なる神は老木となった私を、あわれみと慈しみをもって、なつめやしのように、レバノンの杉のように豊かに祝福された、感謝に堪えない。これからも命ある限り、主を賛美してゆこう、と。

希望に生きる

聖書 **詩編92編1〜16節**

暗唱聖句 **神に従う人はなつめやしのように茂り
レバノンの杉のようにそびえます。詩編 92：13**

聖書から…

今日の詩編は、安息日に歌っていたようです（92：1 参照）。安息日はユダヤの人たちにとって大切な日です。それは創世記にあるように、神さまが七日目にすべての創造の業（わざ）を離れ安息なさったので、人びともその安息にあずかる日として今なお続いています。神さまは七日目にこの安息日を創造されました。その日にはみ手の業を喜び歌い、感謝をささげます。時には楽器を用います。ここにも十弦の琴や竪琴の調べに合わせて、夜ごと朝ごとに主のみ名をほめ歌うとあります。賑やかに、そして心からあふれるほどの賛美を歌ったのです。

安息日とは、たとえ歳を重ねて「白髪になってもなお実を結び、命に溢れ、いきいきと」（92：15）するようにと、み言葉を与えられるものです。主のみ手の業は私たちを日々新しくし、肉体は衰えたとしてもなお希望に生きるようにと招くものです。私たちは礼拝を、そんな希望の出来事としてささげているでしょうか。

分かち合おう

- 今日は宗教改革日です。1517 年、マルティン・ルターがヴィッテンベルク城教会の扉に「95 ヶ条の論題」を張り出したことが有名です。歴史の教科書で学びましたか？ でも、この宗教改革はこれで終わりではありませんでした。聖書はそれまで特定の人しか持てませんでしたが、ドイツ語に翻訳、そして印刷技術が発展し誰もがいつでも読めるようになります。賛美歌はそれまでラテン語の詩編歌しかありませんでしたが、会衆も歌うことができるように賛美歌集もできます。この宗教改革がなければ現在の私たちのような礼拝もできなかったでしょう。そしてさらに改革は続きます。それは日々新しく礼拝をささげてゆく私たち自身なのかもしれません。週報にある礼拝のプログラムの一つひとつについて、その意味を確かめてみましょう。そして、一緒に礼拝を形作る者として、どのように礼拝を作っているでしょうか？ 話し合ってみましょう。

- 「罪赦された人にとって、神の「慈しみ」と「まこと」が、唯一の生きる上での支えです」（**「聖書の学び」**より）とあります。皆さんにとっての「生きる上での支え」は何でしょうか？ 人間関係で悩んだり、落ち込んだり、先が見えない不安の中で、自分を底から持ち上げ、立たせ、歩みを起こさせるものがありますか？ 話し合ってみましょう。

幼小科

希望に生きる

聖書　詩編92編1～16節

暗唱聖句　神に従う人はなつめやしのように茂り
レバノンの杉のようにそびえます。詩編 92：13

31課

10月31日

聖書から…

天地創造物語の中で神さまは、第１の日から第６の日まで創造の業を行い、第７の日に安息なさいました。その第７の日をイスラエルの人々は安息日として会堂や神殿で神さまを礼拝してきました。

詩人は安息日ごとに礼拝をささげる度に、神さまから命が与えられて支えられていることを感謝し、喜び、賛美しました。

現代に生きる私たちも、毎週日曜日（イエスさまの復活を覚えるとき）に礼拝を守っています。私たちも礼拝をささげる度に、神さまから復活の命に与り、新たにされていることを覚えて賛美しましょう。

活動①

「賛美しよう！」

27 課で賛美した「あの空はどうして青い」（『友よ歌おう』いのちのことば社）を賛美しましょう。神さまのみ業によって私たちも含めて、すべてが造られたこと、7日目に安息されて、私たちは礼拝を守ることができることを覚えて心から賛美しましょう。

27 課で作った紙芝居やペープサート、パネルシアターなども一緒に用いましょう。

礼拝の中で特別聖歌隊として賛美してもいいですね。

活動②　ワークシート

「わたしたちの教会の礼拝、おともだちの教会の礼拝くらべ」

新型コロナウィルス感染症の流行のために、感染拡大予防のため、今まで行っていた礼拝と違う形で礼拝を守っていた（いる）教会がたくさんあります。そこで、私たちの礼拝がどのように変わったか、今までのものと比べたり、友だちの教会の礼拝と比べたり、引越し等で行く教会が変わっているメンバーは、以前の教会と今の教会と比べてみてはいかがでしょう。

それぞれの教会で大切にしているものが見えてくるかもしれませんね。比べた後に、同じ部分や違う部分、また自分だったらこんな風にしたいなどの意見を出し合いましょう。

●例えば●

Ⓐ○○教会の礼拝プログラム
Ⓑ◆◆教会の礼拝プログラム

Ⓐ緊急事態宣言前の教会の礼拝プログラム
Ⓑ緊急事態宣言中の教会の礼拝プログラム

Ⓐ引っ越す前にいっていた教会の礼拝プログラム
Ⓑ引っ越した後に通っている教会の礼拝プログラム

などなど

ワークシート

わたしたちの教会の礼拝、おともだちの教会の礼拝くらべ

A ＿＿＿＿＿＿＿＿ 教会の礼拝プログラム	B ＿＿＿＿＿＿＿＿ 教会の礼拝プログラム

同じなところ…

ちがうところ…

自分だったら…

聖書の学び

光が射すと

聖書 詩編119編129〜136節

暗唱聖句 御顔の光をあなたの僕（しもべ）の上に輝かせてください。
あなたの掟を教えてください。詩編 119：135

32課

11月7日

構成・内容・年代

詩編 119 編は、いわゆるヘブライ語のいろは歌であり、一段落を成す 8 つの節がヘブライ語のアルファベット順で構成されている「アルファベット詩編」です。ヘブライ語のアルファベットが 22 字ですから全体で 8 × 22 ＝ 176 節という、詩編で最も長い詩です。内容は、詩人による「主」（ヤハウェ）への祈りであり、人は日々の生活において律法に従って歩むべきだと歌っています。また、各段落、各節の間の連続性や展開はほとんどみられません（岩波訳聖書：脚注）が、全体を通して共通しているのは、1 節、3 節、15 節、37 節に登場する「道」という言葉が含んでいる、神のいつくしみ、救い、忠実さです。この主なる神に対して、人は、主がくださったその「道」を歩み、心を尽くして主の定めを守ることの幸いを歌います。（参照 119：1、9 など）。

詩編 119 編の作成年代は、紀元前 6 世紀のバビロン捕囚のころ、あるいはその後とされています。詩人が若者の人生に深く注目していることは、9 節、99 節、100 節、141 節からわかります。

御言葉の光・御顔の光

詩編 119 編 129 ～ 136 節は、ヘブライ語アルファベット 17 番目の子音「ペー」が先頭に来る名詞「ペラオート」（驚くべきもの）から始まる「ペー段落」です。

この「ペラオート」を死海写本は「蜂蜜の流れ」と訳しています（岩波訳：注解）。つまり、主の「定め」は「蜂蜜の流れ」のように麗（うるわ）しいもの、口に甘く、霊肉ともに回復させるものです。それゆえに「わたしの魂はそれを守」ることが喜びそのものなのです。

130 節の「無知な者」とは「わきまえのない者」（新改訳）とも訳せますが、「未熟者」（岩波訳）であり、「純朴な者」（フランシスコ会訳）とも訳せます。まるで、真っ白なキャンバスに絵筆を入れるように「無知な者」にみことばのドアが開き、光が差し込むと「理解」に導かれます。では「理解」とは何を知ることなのでしょう。例えばヨブ記 28：28 にあるように「主を畏れ敬うこと、それが知恵　悪を遠ざけること、それが分別」という人生の知恵が与えられる、ということでしょう。

それゆえに、詩人はまた主の「戒め」を「口を大きく開き、渇望しています」（131 節）。「戒め」とは、主の慈しみに満ちた民に対する神の言葉のことです。神の民は、主なる神とモーセを通して契約を交わしたのですから、十戒をはじめとする「戒め」を守ることによって、すべての人々が光の道を歩み、人生の道を確かにしていくことができるのです。「御顔をわたしに向け」の「向け」は、命令形です。今、「虐げる者」たちの存在に、現実にあえいでいます。それゆえに、叫ぶのです。「御顔をわたしに向け、憐みを施せ！主の裁きに従って」と。

詩人は、この世の現実にあって、具体的な虐げに取り囲まれています。さらに、内面には「悪」（偶像礼拝の誘惑）が襲いかかって

くるのです。それらは涙が川のように流れ出るほど苦しめているのです。だからこそ詩人は、定めを、みことばを、戒めを求めているのです。

この世に対して「無知な者」であり、「わきまえのない者」であり、「未熟者」であり、「純朴な者」でもある詩人は、今、人生のどん底に落ちました。そのどん底は、信仰者すらも蜂蜜の流れのように甘く、心身を回復させる主の律法をまもらないことに加えて、自分の内面にある偶像礼拝への誘惑です。そのような外面的、内面的な人生の危機のどん底から詩人は叫ぶのです。

「御顔の光をあなたの僕の上に輝かせて」再び、わたしを蜂蜜の流れのような主の「定め」と「戒め」で活かしてください、と。

準備のための聖書日課			
1日	㊊	詩編119:1〜8	主の道を歩む
2日	㊋	詩編119:9〜16	若者の歩むべき清き道とは
3日	㊌	詩編111:1〜10	主を畏れることは知恵の初め
4日	㊍	箴言1:1〜7	未熟な者に熟慮を教える
5日	㊎	エゼキエル2:7〜3:3	御言葉は蜜のように甘い
6日	㊏	テサロニケ一5:16〜22	絶えず祈りなさい

成人科

● 詩編 119 編によると主の「定め」は「驚くべきもの」すなわち、蜂蜜の流れのように麗しいもの、口に甘く、霊肉ともに回復させるものです（参考：箴言 24：13、エゼキエル 3：1 ～ 3）。日々の聖書通読の恵みを分かち合ってみましょう。

● 今の時代は情報が事実に基づくのか、それとも偽りなのか、まず判断する必要がある時代です。この世に溢れる事実と偽りが混在する情報を私たちはどんな手段で取り入れているでしょうか？ スマホ、テレビ、新聞、ラジオ、インターネットからでしょうか。分かち合います。次に、私たちはそれらの情報に対して何を基準に信頼しているでしょうか？ 自分自身と愛する家族たちの命と健康を守る上で大事なことを話し合ってみましょう。

● 「聖書の学び」によると真っ白なキャンバスに絵筆を入れるような「無知な者」という自覚をもつ詩人は、自分の内面における様々な偶像礼拝という「悪」と蜂蜜のように甘く、心身を回復させる主の律法を守らないことで人生の危機を迎えています。「生きることは祈ること、祈ることは生きること」という言葉があります。シンプルで、ストレートで、蜂蜜のようにごまかしがない命のみことばによってお互いが心身ともに生かされるように祈りの時を持ちましょう。

みんなで聴く聖書のおはなし

光が射すと

聖書 詩編119編129〜136節

暗唱聖句 御顔の光をあなたの僕（しもべ）の上に輝かせてください。
あなたの掟を教えてください。詩編 119：135

32課

11月7日

ダニエルという青年がいました。彼が生まれた時、祖父が昔の預言者の名前を付けたのです。ダニエルの周りには、いつも友だちがいっぱい。それも遊び友だちが。今日もダニエルは友だちと一緒に贅沢ざんまい。支払いは決まってダニエル。友だちの一人が言いました。「いつも、すまないね」。ダニエルは言います。「いいってことよ」。

ある日、ダニエルに「父が、病気で倒れた」という知らせが届きました。今まで「お小遣い頂戴！」とダニエルが言うと、ダニエルがかわいくてならない父は黙って小遣いをくれました。あれほど「ダニエル、ダニエル」とまとわりついていた友だちみんな、去っていきました。ダニエルはつぶやきます。「お金がなくなるとみんな去っていった。むなしいなぁ」。その時、なぜか、幼い頃に両親に連れて行かれた会堂の礼拝を思い出しました。「みんな、一生懸命、律法を朗読していたな」。懐かしくなり、次の安息日に礼拝へ行くと詩編をみんなで朗読していました。

「み言葉が開かれると光が射し出で　無知な者にも理解を与えます」。ダニエルの全身に、雷に打たれたような衝撃が走ります。「『無知な者』って、まさに俺だ。父のお金で遊び暮らしていた。友だちに『いいってことよ』っていい顔をするのが生きがいだった。何て未熟者だろう。今まで人がどう自分を思うか、ということに囚われていた。

これから、安息日は礼拝へ行こう」。

やがて、ダニエルのうわさが村中に広まりました。「あのダニエルが、礼拝をまもるようになったってよ」。うわさを聞いた昔の友だちがやって来ました。「ダニエルよ、お父さんが亡くなったってね。景気よくまた、パーッといこう。気が晴れるよ」。ダニエルが「いいってことよ」と言った時の快感を一瞬思い浮かべた時、会堂で聴いた「虐げる者からわたしを解き放ってください。わたしはあなたの命令を守ります」とのみことばを思い出しました。ダニエルの心の中に、ある光が射しこみます。

ダニエルは、友だちに言いました。「ごめんよ。もう、ぜいたくはしない」。友だちは怒って去って行きました。その背中を見ながら、ダニエルの目から涙があふれます。「自分もちょっと前までは彼のようだった。どうか、人々が悔い改めてあなたの命の律法を守るように」。

光が射すと

聖書 詩編119編129〜136節

暗唱聖句 御顔の光をあなたの僕(しもべ)の上に輝かせてください。
あなたの掟を教えてください。詩編 119：135

聖書から…

今日の詩編 119 篇は聖書の中で一番長く 176 節もあります。ここには昔の「いろは歌」(あいうえお作文のような)、最初の文字をアルファベットのひとつの文字から始めるという技法で書かれています。なぜそんなことをして書いたのでしょうか。おそらく言葉を覚えたての人にもよく分かるように、簡単な短いフレーズを繰り返し歌うことで歌い継いでいったのでしょう。小さな子どもたちと一緒に神さまの言葉を分かち合おうとしたのかもしれません。当時、私たちが手にしているような製本された聖書は誰も持っていませんでした。ですから「読む」というより、神さまの言葉をみんなで聞いていたのです。そのように想像してみると、聞くことは味わうことであり、聞いた者の体を通して立ち上がってゆくものでもあったでしょう。

読んでいくと、まず「わたし」「あなた」という言い方に目が止まります。「わたし」とは読み手、「あなた」とは神さまのことです。そして「〜ください」という言葉にも注目したいと思います。つまり、読み手が神さまに願う祈りの言葉が編まれています。「わたし」と「あなた」というような近い関係の中で「主よ」とこの詩人も祈っています。誰にも言えない悩みを神さまに打ち明けるような、そんな祈りをしたことがありますか？ きっとこの詩人も神さまへの信頼があるからこそ、そんな近い関係で祈ったのでしょう。信頼して祈る時、たとえ答えは出なくとも、そのように祈ることができる相手がいることが私たちにとって福音ではないでしょうか。

分かち合おう

- 今日の詩編もぜひ音読してみましょう。短い文章が折り重なっているのがよく分かると思います。聖書の学びにあるように、主の「定め」とは言い換えれば「蜂蜜の流れ」でもあるそうです。口に甘く、心も体も回復させるものです。神さまの言葉を蜂蜜のように甘いと感じたことはありますか？ もしあれば、それはどんな時でしょうか。また逆に、辛(から)いと感じたこともあるでしょう。み言葉の味について、話し合ってみましょう。

- 「御言葉が開かれると光が射し出で」「御顔の光をあなたの僕(しもべ)の上に輝かせてください」など、「光」も大切なキーワードとして出ています。実際に私たちが暮らす中にもたくさんの光があります。電気やレーザーなど生活にはなくてはならないものです。光があふれている世の中で、本当に照らしてくれる光、輝く光とは何でしょうか。この詩人が求めていた光はどのようなものか、話し合ってみましょう。

幼小科

光が射すと

聖書　詩編119編129〜136節

暗唱聖句　御顔の光をあなたの僕（しもべ）の上に輝かせてください。
あなたの掟を教えてください。詩編 119：135

32課　11月7日

聖書から…

「みんなで聴く聖書のおはなし」に出てくるダニエルはお友だちと一緒に家のお金で贅沢三昧していました。しかも、それが悪いことだと全然思ってもみませんでした。しかし、お父さんが病気になったことをきっかけに、幼い頃に両親と行っていた礼拝を思い出しました。安息日に礼拝に行き、神さまのみ言葉に出会い、悔い改め、それまでとは全く正反対の生き方を始めました。

神さまのみ言葉が私たちの心に届くとき、光が射し出て、自分中心の生き方から神さま中心の生き方へと、そして、友のために祈る命へと変えられていきます。

活動①

「あいうえお作文」

詩編 119 編はヘブライ語のいろは歌「アルファベット詩編」です。

私たちも皆であいうえお作文を作ってみませんか。ア行だけでなく、いろいろな行に挑戦してみましょう。

例あいしてくださる
　イエスさま
　うつむいているわたしを
　えがおにかえる
　おともだち

活動②

「ランタン作り」

●準備●空き缶（スチール缶、アルミ缶、どちらでも扱いやすいもの）、穴をあける道具（キリやくぎ、かなづちなど取扱い注意）、ロウソクや小さなランプ、その他（黒の布ガムテープ、模様の型紙など）

空き缶を使ってランタンを作ってみましょう。

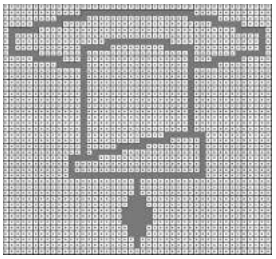
①空き缶に、模様に沿って穴をあけます。
②①をろうそくや小さなランプの上から被せましょう。空き缶から光が射し出しますよ。

活動③　ワークシート

「なんのかたちだろう？」

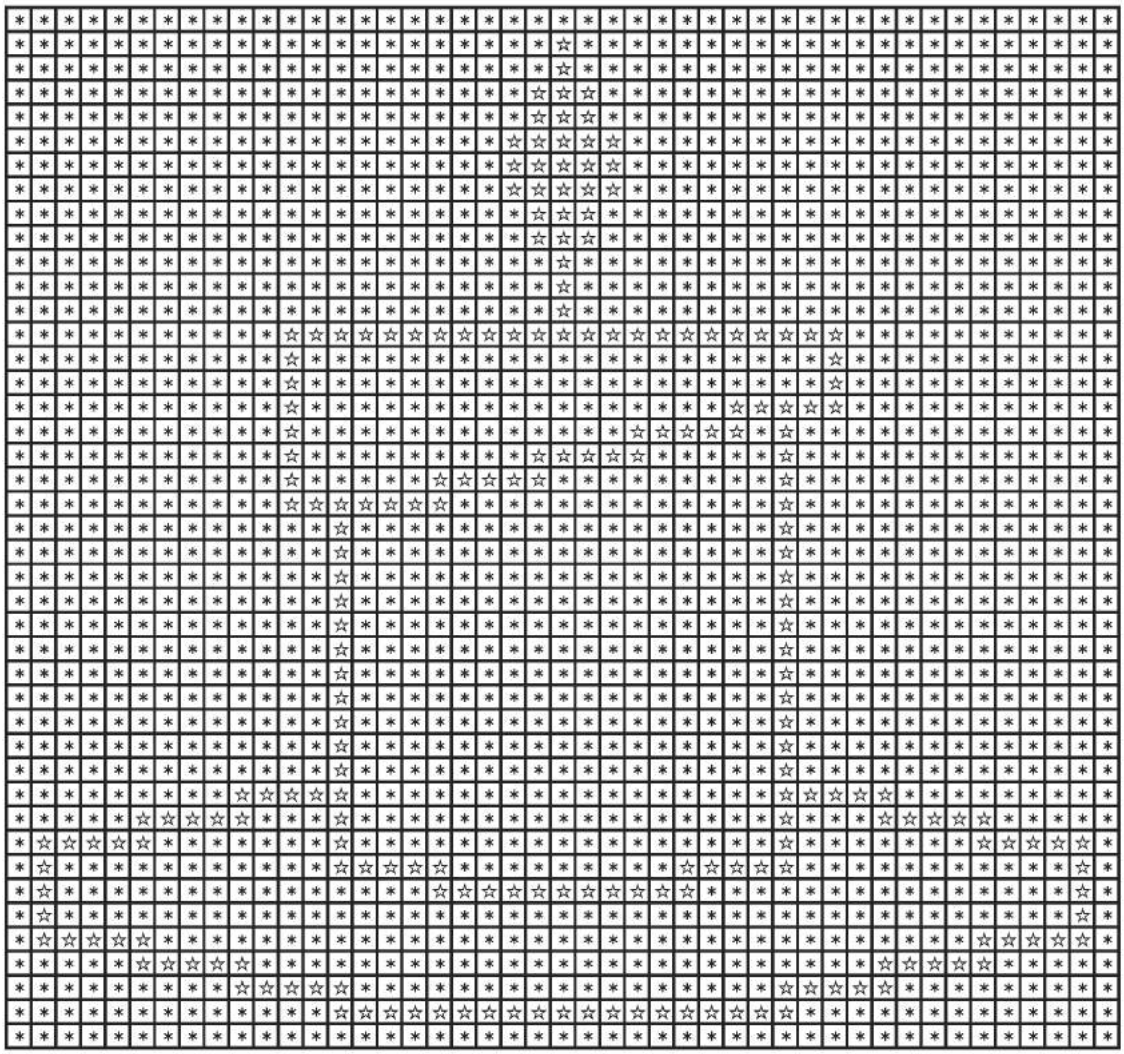
☆のところを黒く塗ると何かの形が出てきますよ。

32 課ワークシートの答え



ワークシート

なんのかたちだろう?



聖書の学び

都もうでの歌

聖書　詩編131編1〜3節

暗唱聖句　主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。
詩編 131：3

33課

11月14日

背景

詩編 131 編は、「ダビデの詩」と冠されていますが、再建されたエルサレム神殿に入るに際し、主（ヤハウェ）のみに頼る幼子のような信頼をあらわした巡礼者たちの詩とも読めます。幼子は、母を心から信頼し、母と一緒にいるだけで完全に満足します。この幼子がもつ信頼の雛型（ひながた）としてダビデが連想されるのでしょう。

3 節の「イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに」から、この詩人はイスラエルの民全体に呼びかけていることが分かります。紀元前 6 世紀後半におけるバビロン捕囚から帰還後のイスラエルの民は、エジプトなどの大国に依存せず、カナンの偶像礼拝を捨てて、ひたすら、主に信頼する幼子のようになりました。かつて、イスラエルの民は、頑（かたく）なで他国への依存や偶像礼拝を止めず、それ故に隣人性を欠き、物の所有、富にとらわれて亡国を迎えたのでした。

1 節の「驕（おご）る」「高くを見る」は、それぞれ、人間が自己絶対化することを現します。「目が高い」という表現は、高慢不遜（こうまんふそん）となって偶像礼拝へ走るイスラエルの民を戒める預言者の慣用句でした。

「追い求めません」とは、「歩まない、進まない」という意味で、しかも強調形です。つまり大国間でウロウロとして、迷いの深みに落ち込むことを繰り返しませんと言っているのでしょう。

「大き過ぎること」「驚くべきこと」とは、いったい何を意味するのでしょうか。それは、大げさなことやドラマティックなことに心を向けようとすることです。今、再建されたエルサレム神殿へ入ろうとするにあたって、巡礼者たちは、何を求めるべきなのか、誰に頼るべきなのかを据え直しています。ここに悔い改めを抱く砕かれた姿と幼子の姿が深く重なっています。巡礼者たちは、かつてダビデが預言者ナタンによって叱責された時、神の前に告白した「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれた悔いる心を神よ、あなたは侮られません」（詩編 51：19）を想い起こしながら、「大き過ぎることを　わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません」と謳（うた）ったのでしょう。

魂を沈黙させる

2 節で繰り返されている、命そのものである「魂」（ネフェシュ）のもともとの意味は、「のど」です。たとえば「のどから手が出るほど欲しい」と表現するように、「のど」は「貪欲」と訳されることもあります（岩波訳：用語解説）。

貪欲に関して、主イエス・キリストは「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。…ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる」（ルカ 12：15、31）とおっしゃいました。貪欲は魂を「思い悩」（ルカ 12：22）みの虜（とりこ）とするということでしょう。

この「魂」を今は沈黙させ、手放すことが

できたと詩人は言います。幼子が満足し、安心して母の胸に頭を寄せているような心境に至り、いよいよ神を賛美することに立ち返った想いを一歩一歩、都へ上る「巡礼」という礼拝行為に重ねて詩人は謳うのです。

主を待ち望め

巡礼者たちは、バビロン捕囚に至るいきさつを自分たちの祖父母や両親によって幼い頃から語り聞かされていたのでしょう。「自分たちは、預言者たちの『主を求めて、生きよ』という叫びを聴き従わなかった。その結果、ソロモンが建てた神殿は粉々になった。自分たちも神の都エルサレムから散らされた。イスラエルよ、主を求めて生きること、主を待ち望むことが命の道なのだよ」と。

準備のための聖書日課			
8日	㊊	箴言6:16〜19	主のいとわれる 驕り高ぶる目
9日	㊋	イザヤ2:6〜11	高ぶる目は 低くされる
10日	㊌	詩編51:15〜19	打ち砕かれた 悔いる心
11日	㊍	ルカ12:13〜21	どんな貪欲にも 注意せよ
12日	㊎	ルカ12:22〜34	ただ神の国を求めよ
13日	㊏	詩編130:1〜8	主に望みをおく

父祖たちの苦難の体験を踏まえて、巡礼者たちは謳うのでした。「イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに」と。

成人科

- かつてイスラエルの民は、目に見えるエジプトなどの超大国やカナンの偶像を頼り、隣人性を欠き、物の所有、富にとらわれてその結果、バビロン捕囚という亡国を体験しました。その後、民は悔い改めて、ひたすら、主に信頼する幼子のようになりました。今、この時代に信仰者である私たちにとっても、見えるものは誘惑に満ちています。どういう誘惑を目に見えるものに感じるか、そして、それらから解放されるには何が必要なのか、話し合ってみましょう。
- 2節で繰り返されている「魂」のもともとの意味は、「貪欲」とも訳される「のど」という言葉です。人間の魂を捕らえ、自己絶対化という偶像礼拝へ誘う「貪欲」を、詩人は沈黙させ、手放すことができました。それは、主を待ち望むことこそが、命の道であることを自覚したからでした。様々な情報やモノがあふれ、日曜日も仕事や様々な事情により礼拝へ出席しにくいこの時代です。また、新型コロナウィルス感染対策によって、共に集うことがかなわず、画面越しの集会という制約された社会に生かされている私たちにとって、主を待ち望むこととは、具体的にどういう生き方なのか、今までの自分自身の信仰の歩みをふりかえってみましょう。

みんなで聴く聖書のおはなし

都もうでの歌

聖書 **詩編131編1〜3節**

暗唱聖句 **主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。**
詩編 131：3

33課

11月14日

デボラは、テントのなかで目を覚ましました。「ああ、やっと朝が来た。ラクダに水をやらなければ。きっと今日はエルサレムに着く」。ここは、エルサレム郊外のオアシス。デボラはバビロンからエルサレム神殿へ旅する巡礼団の一人です。

昔、デボラのおじいさんとおばあさんは、エルサレムに住んでいました。けれども、バビロンによる補囚でバビロンの地へ連れて行かれました。数か月かかって着いたバビロンには大きな川が流れていて、その川の近くに住むようになりました。バビロンの人々は辛くあたりませんでした。土地も与えられました。でも、おじいさんは毎日、川のほとりに出て、エルサレムに向かって泣き続けます。そんなおじいさんたちを見て、バビロンの人たちはあざけりました。

ある日、エルサレムにいる預言者から手紙が届きました。「今回の事柄は神が起こしたこと。あなたがたとあなたがたの先祖が、『主に立ちかえれ』と言われつづけていたのに、平和をもたらす主なる神を退け、偶像を拝み、貧しい同胞を奴隷とした。あなたがたは、バビロンの地に住み着き、その地の民を愛し、その町の平安のために主に祈りなさい」。手紙をもらった人たちは、バビロンの地に住み着き、バビロンの民を愛そうと努力しました。やがて、バビロンの地で生まれた男女が結婚し、デボラが生れました。

ある日、エルサレムの壊れた神殿が建て直された、との噂が届きました。お父さんとお母さんが話し合います。「再建されたエルサレム神殿を訪ねたいものだね」。デボラは言いました。「私も行きたい」。そうして、デボラたちはエルサレム神殿への巡礼団に加わりました。

その日、日が昇るころ、オアシスを出てラクダに揺られながらゆっくり旅するデボラたち巡礼団の目に、夢にまで見たエルサレムの城壁が見えてきました。途中、いろいろな高台がありました。ある高台はバアルのための祭壇、ある高台はアシュタロテのための祭壇でした。今も綺麗な花が飾られています。「わぁ、きれい！」と思わず、寄りたくなる魅力的な祭壇の数々です。そんな高台を眺めながら、親たちは言いました。「私たちの先祖は、これらの偶像を拝み、同胞を奴隷にしてしまった。同じ過ちをしてはならない。ただ、主なる神さまに出会うことさえできれば、十分だ」。

ラクダの背にゆられるデボラの口から自然に賛美が生まれました。「イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに」。

都もうでの歌

聖書 **詩編131編1〜3節**

暗唱聖句 **主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。**
詩編 131：3

聖書から…

120 編から 134 編まで「都へ上る歌」が続きます。都とはエルサレム、礼拝するその場所へと人びとは集まります。「巡礼」の歌です。ある人は巡礼について、このように言いました。「巡礼とは、その都を目指して歩く一歩一歩である」と。目指すべきものがあることもそうですが、祈りつつ歩く、その道行そのものが巡礼であると言うのです。目指すべきところへと向かうまでにはいろんなことを経験するでしょう。時には我を忘れるほど喜び、時には歩く力も無くなってしまうほどの悲しみに打ちひしがれたり、時には誰かの肩を抱きながら一緒に涙し、時にはこの世に自分ひとりではないかと思うほどの孤独感も味わいます。礼拝に向かう旅において、いろんな感情を持ちながら、なおその場所を目指すその一歩一歩、そのすべてが巡礼なのです。

今日の短い詩編は、力強い言い方をしながら自分に言い聞かせているような歌に聞こえてきます。心が高ぶり、身の丈に合わないようなものに心奪われ、魂も揺さぶられている。そんな出来事の前に右往左往している読み手の姿が見えてきます。だからこそ、この詩人は「魂を沈黙させ」（131：2）たのでしょう。そして最後には、主を待ち望めと歌います。きっとこう歌いながら、静かに大切な希望を胸に刻んでいたのです。

分かち合おう

- 神さまによって礼拝から遣わされ、また礼拝へと受け止められる。礼拝から礼拝への一週間の歩みは、巡礼の旅であるということもできるでしょう。今日までの一週間の歩みはいかがでしたか？ 神さまに祈りつつ歩いた旅路だったでしょうか。祈りつつ歩くとは神さまと対話をしながら、その対話の中で自らを振り返ることでもあると思います。私たちの生活の中で、ゆっくり自分自身を省みることはとても大切なことです。嵐のように言葉が飛び交うようなやり取りの中で、本当に必要な言葉はそれほど多くはないでしょう。沈黙も時には必要です。静かにしないと聞こえてこない声を聞いてみましょう。

- 「母の胸にいる幼子のように」という言葉が出てきますが、別に「母親」でなくてもいいのではないかとも思います。すべての人は幼子でした。自分を安らかな居場所に導いてくれる存在、それがこの詩編の様子を表しています。自分にとってそんな存在はあるでしょうか？ 自分が自分でいられるような場所、そんな場所に教会がなっているでしょうか。話し合ってみましょう。

幼小科

都もうでの歌

聖書 詩編131編1〜3節

暗唱聖句 主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。
詩編 131：3

33課 11月14日

聖書から…

バビロンに捕囚された人々もユダに残された人々も、神さまから離れたことを反省し、幼子が母親を慕うように、神さまに全幅の信頼を寄せます。バビロン捕囚のいきさつや、主を求めて生きる生き方を子へ孫へと語り継ぐことによって、二度と神さまから離れないようにと自分たちを戒め、自分たちの信仰を継承していきました。

その一つの態度のあらわれとして、捕囚からの帰還後、人々はエルサレム神殿を再建し、神殿を詣でることに望みを置きました。神殿が再建され、共に礼拝を守ることができた時の喜びはこの上ないものでした。

活動①

「みやこもうで」

「だるまさんがころんだ」の要領です。

①ひとりのメンバーがオニとなり基点を決めます（壁など）。
②他のメンバーはオニから離れたところに立ちます（スタートライン）。
③オニは他のメンバーを背中にして「みやこもうで」と言います。
④「みやこもうで」のことばに合わせて、他のメンバーはオニに向かって近づいていきます。
⑤オニが振り向いた時に動いていたメンバーは、そのゲームから外れます。
⑥最初のメンバーがオニの背中にタッチできたら、そのゲームは終了です。オニ役もメンバーも、一緒にみやこもうでができたことを喜びましょう。
⑦オニを交替します。

活動②

「家から教会までの地図を作ろう！」

メンバーの皆さんはいろいろな所から教会に通ってきていると思います。家から教会まで、どのように来ているか（徒歩、自転車、車、など）、誰と、どのくらい離れているか、来る途中にどんなものがあるか（公園、お店、など）、地図を作ってみませんか。皆さんがどこから来ているか知るのは発見ですね。皆さんの地図を合わせてみるとおもしろいかも知れませんね。

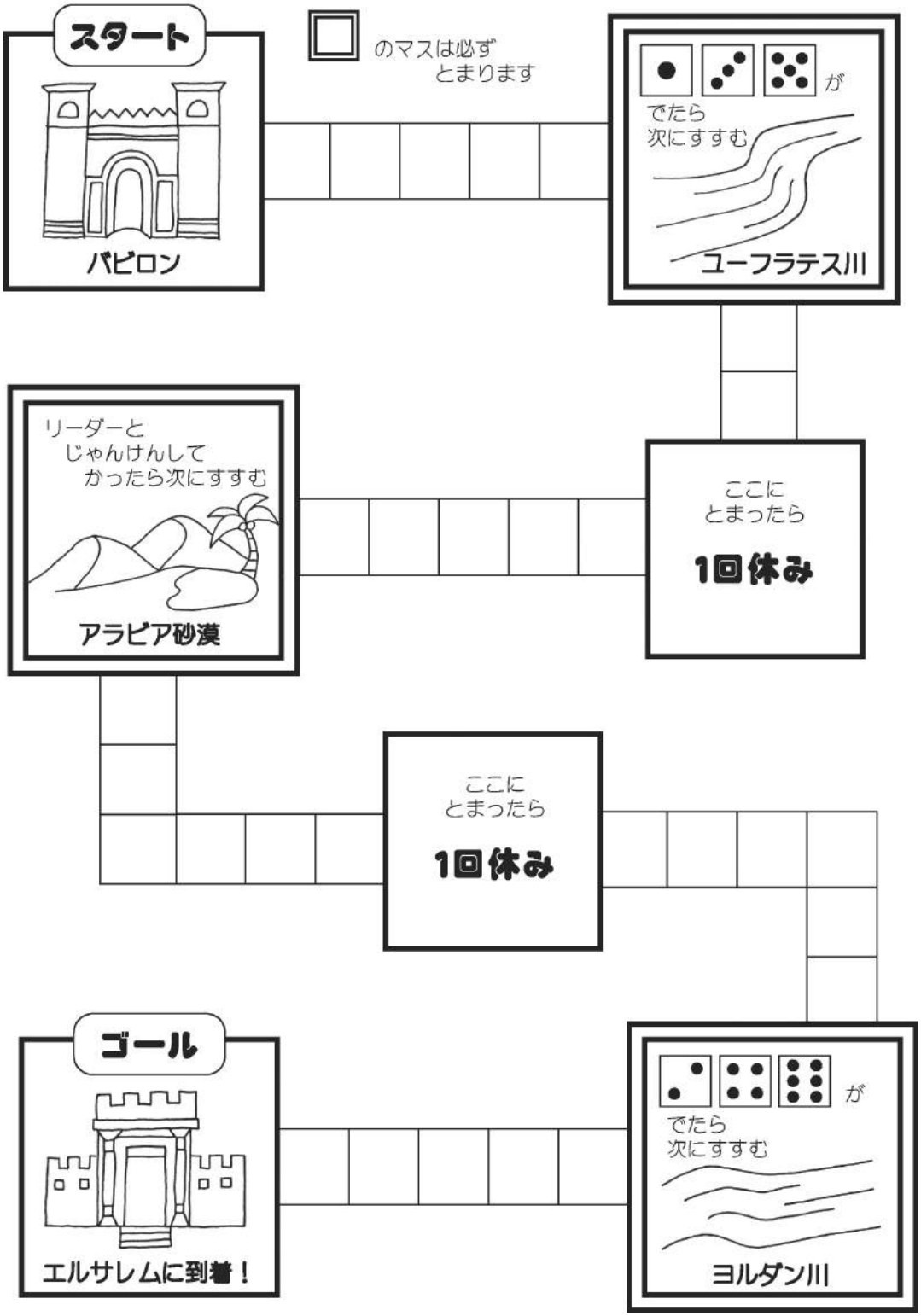
活動③　ワークシート

「さあ！エルサレムへ行こう！」すごろく

①人数分のコマとサイコロを用意します。
②メンバーで順番を決めてサイコロを振ってこまを進めます。
③スタート「バビロン」からゴール「エルサレム」を目指しましょう。
二重のマスは必ず一回止まります。マスの指示に従います（指定の目が出たら次に進みます。リーダーとジャンケンして勝ったら次に進みます）。
コマが「1 回休み」のマスに止まったら、次はお休みになります。

ワークシート

「さあ! エルサレムへ行こう!」すごろく



聖書の学び

主が望まれるのは

聖書　詩編147編1～20節

暗唱聖句　主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。
詩編 147：15

34課

11月21日

歴史的背景・構成

詩編 147 編は、2 節 3 節から推察するに、エルサレム城壁再建後に読まれたものと思われます。エルサレムが再建され、城門のかんぬきが堅固とされ、帰還の民に平和が確保された頃でした。

構成としては、1 ～ 6 節、7 ～ 11 節、12 ～ 20 節の三部に分かれています。それぞれ、まず主をたたえ、続いて賛美の理由が記されます。全体のテーマは、神がイスラエルを救い、注がれた数々の祝福をおぼえて感謝した主を賛美する詩です。具体的には捕囚の地バビロンからの救出とその後の豊作です。星をも支配なさる神が、星の数ほどのイスラエルの民を、一人ひとり名を呼んで集めるように捕囚から帰還させ（147：2 ～ 6）、雲を支配なさる神が豊作を与えてくださる（147:8 ～ 11）。災害をもたらす雪や霜、氷塊は、イスラエル（シオン）に対する懲らしめ、それらを溶かす温かい風は、あわれみ深い神のゆるし（147：18）に、それぞれ結びつけられています。イスラエルに対する神の最終的な祝福は、どの国に対しても与えられない主の「掟」と「裁き」です（参考：フランシスコ会聖書　注）。

内容

紀元前 6 世紀前半からの三度に亘るバビロン捕囚によって火を放たれたエルサレムを再建したのはエズラ、ネヘミヤでした。その背後には主のみ手がありました。紀元前 538 年のペルシャ王キュロスによる帰還と神殿再建の勅令（ちょくれい）によって、それまで追いやられていた神の民イスラエルは、エルサレムへ帰還しました。バビロンの地で地元の民からあざけりを受けながら、「エルサレムよ」と嘆き続けてきたイスラエルの打ち砕かれた心は癒され、その深い傷は包まれました。その背後には、歴史に働く主の深いみ旨がありました。主は、捕囚の地バビロンにおいて世代を超えた長年の民の祈りに応えられたのでした。その時、それまで、偶像礼拝の誘惑に負け続け、亡国と追放を体験したイスラエルの民は、自分たちの「打ち砕かれた心」の叫びを聞いてくださった、あわれみの主の前にひれ伏し、悔い改め、主（ヤハウェ）こそが神であることを知ったのでした。それゆえ、6 節の「貧しい人々」とは、アッシリアによって追放されて以来、離散と捕囚の苦しみを味わい続けたイスラエルの民そのものと言えるでしょう。その「貧しさ」から救い出され、今、感謝の献げ物と竪琴をもって主なる神を賛美せよ、と勧めているのです。主なる神は、自らの罪ゆえに懲らしめを受けたにもかかわらず、打ち砕かれて立ち帰った民の祈りを聞かれる神なのです。

主が望まれるのは

かつて、ソロモン王は、どの国にも負けぬ戦車用の「馬」と騎兵を沢山持ち、誇っていました。その結果、歴史的に主の懲らしめによってイスラエルは亡国の憂（う）き目にあいました。そのどん底で打ち砕かれ、主から裁かれ

るのは当然であると悔い改め、ひたすら、主を畏れ、慈しみをひざまずいて待ち望む民を主は見捨てられないのです。主が望まれるのは、自らの罪を自覚し、悔いた砕けた魂をもつ人なのです。

掟と裁き（147：19、20）

「裁き」とは「『貧しい人（人）』を救うこと、よるべのない社会的弱者の立場を擁護（ようご）すること」（第30課　聖書の学び）です。「掟」とは、神と人に対する諸々の「戒め」のことです。イスラエルにとって、その「戒め」を守ることが「命」（申命記30：15～20）です。主は、イスラエルにバビロン捕囚という苦難を与えて民の心を「打ち砕かれた心」（147：3）へ造り替えられました。その時、初めてイスラエルは、主の「掟と裁き」を告げられるみ言葉こそ、命の支えであることを知り、賛美するのでした。

準備のための聖書日課			
15日	㊊	詩編102：13～23	シオンの再建
16日	㊋	イザヤ57：14～21	打ち砕かれた心の人
17日	㊌	詩編33：16～22	馬は勝利をもたらさない
18日	㊍	申命記30：15～20	主の戒めと掟と法を守れ
19日	㊎	詩編78：1～8	後の世代に語り継ごう
20日	㊏	哀歌2：11～12	息絶える幼子と乳飲み子

成人科

●バビロン捕囚からエズラ、ネヘミヤによる第二神殿完成まで約70年の月日がかかりました。エルサレムの城壁も再建され、城門のかんぬきが堅固とされ、帰還の民に平和が確保されたころ、この詩編147編が生まれました。それまでバビロンでは、捕囚の民が犯した偶像礼拝という歴史的な罪を悔い改める祈りが、世代を超えて見事に継承（けいしょう）されてきました。その世代を超えた悔い改めの祈りを主が聞かれたのでした。「希望はどこにあるのか」と思えるような今の時代において、私たちの信仰が、次の世代の人々へ、また、私たちの子や孫らに継承されてゆくようにクラスで祈りの時を共に持ってみましょう。

●いつの時代でも戦争や内乱などが起きると真っ先に犠牲となって命を失うのは子どもたちです（哀歌2：19）。世界では戦争や内戦などで、国内では貧困による飢餓（きが）や虐待によって子どもたちが声なき声をあげつつ、日々、命を失っています。しかし、「わたしたちの神」である主は、その地上において失われた命の一つひとつを星となった子どもとして数えられています（147：4）。
この秋、召天者記念礼拝を守られた教会・伝道所も多いと思います。既に召された愛する方が、生前、私たちに遺（のこ）してくださった信仰の証しを分かち合い、感謝の祈りを共にささげましょう。

みんなで聴く聖書のおはなし

主が望まれるのは

聖書　詩編147編1～20節

暗唱聖句　主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。
詩編 147：15

34課

11月21日

ハンナは、今年、80 歳になる女性です。お父さんはエルサレムから数キロメートル離れたオリーブ畑の小作人でした。ハンナが 10 才の時、オリーブ畑でお父さんの手伝いをしていると、見しらぬ兵士たちが大勢やってきました。それは、バビロンの王が率いる軍隊でした。ハンナたちが見ていると彼らは、エルサレムを包囲しました。エルサレムの中にいたユダの王はじめ、みんな一年以上、たてこもりました。しかし、食べ物がなくなって、ついに落城してしまいました。バビロンの王は、ユダの王や役人たちをみんな、はるか遠いバビロンへ連れて行きました。ハンナのお父さんは貧しい小作人だったので「今までの生活をしてもよろしい」と言われ、その地に留まりました。

お父さんは、ハンナに言います。「あれほど、預言者たちが何年も『主を求めて、生きよ』。『バビロンへ降れば、あなたたちは助かる』と預言し続けたのに、わしらは、主の言葉を聞かなかった。助かった、とは言え、わしらは真剣に悔い改めなければな」と。

一方、バビロンへ連れて行かれた人たちはどんな生活をしたことでしょう。人々は、「ああ、エルサレム、ああ、エルサレム」と嘆いていました。自分の胸を打ち叩きながら「自分たちが悪かったんだ」と泣きながら、何年も祈り続けました。やがて、そのエルサレムを想い、自分たちの罪を悔いる祈りは、その地で生まれた子どもたちや孫たちに継承されていきました。

月日がたち、ペルシャの王が、エルサレムへ帰ることとエルサレム神殿を再建することを許可しました。エルサレムへ帰って行った者たちは、早速、神殿再建にとりかかります。一時は、それをよく思わない者たちの激しい妨害にあい、工事が中断したこともありました。けれども、皆で力を合わせてとりかかり、ついに神殿を再建したのです。喜びの声は賛美の歌となって響き渡ります。

「ハレルヤ。わたしたちの神をほめ歌うのはいかに喜ばしく　神への賛美はいかに美しく快いことか」。

しばらくの時をへて、エルサレムの城壁も何とか再建できました。城壁再建を祝う礼拝においては、聖歌隊が賛美の歌を歌います。この 70 年間の歴史を見て来たハンナは、杖をつきながら礼拝に参加しました。

「感謝の献げ物をささげて主に歌え。竪琴に合わせてわたしたちの神にほめ歌をうたえ」。

主が望まれるのは

聖書 詩編147編1～20節

暗唱聖句 主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。
詩編 147：15

聖書から…

今日の詩編を読んでみると「わたしたち」という一人称複数形が使われています。「わたし」ではなく「わたしたち」という言い方に、共同体の歌ということができます。わたしたちの神を（147：1）、わたしたちの主は（147：4）、という語を使いながら、大勢の人たちと一緒に告白する賛美でもあったのでしょう。それは、この世の価値観とは全く違う神さまの視座にありました。馬の勇ましさや足の速さを望まれるのではなく、主を畏れ、主の慈しみを待ち望む人のことです（147：10～11）。つまり、力の強さや速さ、それが一番とされる世にあって、なおそれらではなく神さまの前に謙虚になることでした。それは、あのエルサレム入城の場面で、小さな子ロバに乗ったイエスさまの姿に重なります（マタイ 21：1～5 参照）。

私たちの周りには、力や速さに価値観を置くことが何と多いことでしょうか。残念ながら私たちが知ろうと知るまいと、聖書が語る価値観とは全く違うものが、支配しようとぐんぐんと手を伸ばしてきます。だからこそ私たちは、私たち自身を解放しようと語られる神さまの声に耳を傾けるのです。主を畏れる人とは、どのような人のことでしょうか。

分かち合おう

- ４節に「主は星に数を定め／それぞれに呼び名をお与えになる」とあります。何か自分の身の周りのものに名前を付けたことがありますか？ 自分で名前をつけると愛着もわくものです。創世記にもこんな言葉があります、「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった」（創世記 2：19）。名をつけるとは大きな責任を伴うことかもしれません。でも、そのような関係に生きるものとされるのです。自分の周りに、名前を呼び合う関係があるでしょうか？そのことはどんな意味があるのでしょうか。

- 聖書の学びに「主は、捕囚の地バビロンにおいて世代を超えた長年の祈りに応えられたのでした」とあります。この「捕囚」という出来事は実に 50 年ほど続きます。解放の出来事とは、捕らえられていた人びとが帰還をゆるされるのと同時に、バビロンもまた捕らえたその手を離すということでしょう。東アジアの歴史の中にも行われた強制連行と解放の出来事があります。特に日本と韓国の間にあるものをどう表現するのか、それは歴史をどこに立って見るのかということです。例えば同じ 8 月 15 日のことを日本と韓国で呼び名がどう違うのか、など自分なりに調べてみましょう。

幼小科

主が望まれるのは

聖書　詩編147編1～20節

暗唱聖句　主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。
詩編 147：15

34課

11月21日

聖書から…

バビロン捕囚は捕囚された人々にとっても、残された人々にとっても、心に大きな傷を残すものでした。しかし、神さまはそのような傷ついた人々を、一人ひとり名を呼んでご自身の元へ集めてくださり、心の傷をいやし、包んでくださいました。招いてくださって集まって行われた礼拝への喜びは人々にとって、この上ないものでした。

神さまと私たちは、名前を呼び合う関係です。私たちは礼拝で、神さまの名を呼んで祈り、賛美をささげます。神さまは私たちの名を呼んで礼拝へと招いてくださり、み言葉と聖霊をお与えくださいます。信頼と安心とで結ばれた礼拝は集められた人々に喜びを与えます。

活動①

「一人ひとりの名をよんで」

①さんびか「ひとりひとりのなをよんで」（『幼児さんびかⅡ』キリスト教保育連盟）を賛美しましょう。

②私たち一人ひとりに名前が与えられています。事前に家族から聴いてきたメンバー一人ひとりの名前の由来を聴き合いましょう。家族から聴くことが難しい場合は、無理せず配慮しましょう。

③聖書に出てくる登場人物にも名前があり、その由来が記されています。調べてみましょう。

㋮イサク⇒彼は笑う（創世記 17：19）等

④さんびか「そのかずいくつ」（『幼児さんびか』21 番　キリスト教保育連盟）を賛美しましょう。さんびかの歌詞をかみしめて、神さまの愛を分かち合いましょう。

活動②　ワークシート

聖書に出てくる人物はみんな神さまから愛され選ばれた人たちです。

いくつ名前がわかるかな？

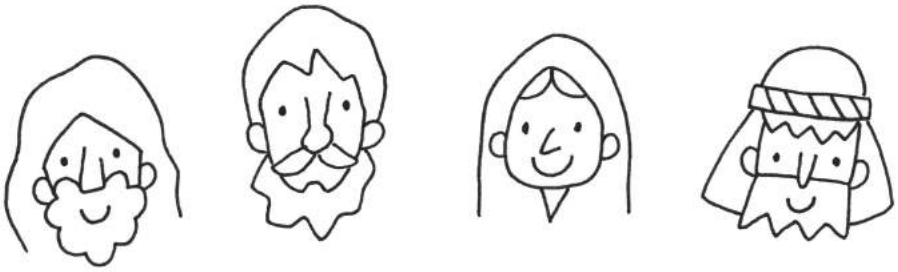
たて、よこ、ななめ、まっすぐ、上からも下からも、右からも左からもあります。

34 課ワークシートの答え

ワークシート

いくつ名前がわかるかな?

ア	イ	サ	ク	ナ	イ	エ	ス	テ	ラ
ン	サ	ム	エ	オ	ザ	リ	テ	ケ	ツ
サ	ム	エ	レ	ミ	ヤ	ア	ル	キ	コ
ム	ハ	ル	ツ	キ	リ	リ	カ	イ	ー
サ	ラ	カ	ペ	サ	エ	ブ	ヨ	イ	ス
ン	ブ	ナ	ウ	テ	イ	ナ	ハ	セ	テ
ユ	ア	ル	パ	ウ	ロ	ン	ネ	ー	フ
ダ	ビ	デ	ウ	ロ	ナ	マ	リ	モ	ア
ニ	レ	ボ	ア	ズ	ロ	リ	レ	ア	ノ
エ	ズ	ラ	ポ	イ	ツ	ア	ロ	ン	ム



聖書の学び

平和の主よ来てください、この世界に

聖書　イザヤ書11章1～10節

暗唱聖句　わたしの聖なる山においては何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
イザヤ 11：9

35課

11月28日

時代背景・状況

預言者イザヤは、主(おも)に紀元前８世紀半ばから後半の「アハズ、ヒゼキヤ王時代」に活動した預言者です。彼は南王国ユダの王に対しても発言力のある社会的地位の高い預言者でした。イザヤが預言者として活動していた紀元前 722 年から 721 年にかけて、アッシリアによって北王国イスラエルは滅びます。ユダ王国もアッシリアの前に存亡の危機を迎えます。イザヤは、そうした戦乱の絶えない時代にあって、エルサレムの民とユダ王国の王や高官たちに預言したのでした。

歴史的破局の中で

11 章の預言がなされた時代状況は、いわば歴史的破局の時であり、政治の有様と統治者たちへの不信が極まった時でした。そこで語られたのが、やがてエッサイの株から萌え出る新しい王による平和です。イザヤは、神のみ心を実現するにふさわしい新しい王、しかも決定的な「メシア的王」を待ち望みました。「エッサイの株」（11：1）から、それまでの古く悪いものを引きずってきた体制を断ち切る、新しい価値観への体現として若々しい新芽が生まれようとしています。「エッサイ」には、ダビデ王が名もないエッサイという小さい家系からおこされたように、新しい王もまた、最も小さな切り株から起こされることが示唆(しさ)されているのでしょう（サムエル上 20：27）。主は、新しい王に三つの霊、即ち、「知恵と識別の霊」「思慮と勇気の霊」「主を知り、畏れ敬う霊」を注がれ、その霊が彼の上にとどまります。「知恵」とは、その時々の状況に応じて適切に判断し、裁きを行う霊性のことです。「識別」とは「目に見えるところ」や「耳にするところ」（11：3）に惑わされず、物事の真実を見抜く霊性のこと、「思慮と勇気」とは、見定めた真実に堅く立って行動に現わす力のこと、「主を知り、畏れ敬う」とは、神を信頼し謙遜を忘れない態度を意味します。

これら主の霊がとどまるメシア的王は、権利を奪われた「弱い人」（11：4）と、搾取(さくしゅ)され苦しめられている「貧しい人」の為に律法に即して正義と公平を行うのです。

みことばによる平和の確立

新しい王は、神と人、人と人とが平和に結ばれ、さらには人と動物（すべての生き物）が共に和して憩う、まさしく神の目にすべてが「極めて良かった」（創世記 1：31）天地創造時の世界を、再び地の上に確立します。そこでは、それまで全地を支配していたあらゆる暴力は静まり、全世界は「主を知る知識」（11：9）に満たされます。

「主」のみこころは、国々が「剣を打ち直して鋤とし　槍を打ち直して鎌と」して「戦うことを学ばない」（2：4）非戦無兵の恒久平和にあるからです。

「若獅子」（11：6）、「獅子」（11：7）とある通り、当時ライオンが生息しており、よちよち歩きの「幼子」（11：8）が親の目がとどかぬ隙に、マムシや毒蛇によって命を落

とすことも日常だったことでしょう。そういう緊張に満ちた日常から解放される平和が樹立されます。

ところで「根」（11：1、10）という言葉から連想するのは、イザヤ 53 章の「苦難の僕（しもべ）」の預言です。ここでは「乾いた地に埋もれた『根』から生え出た『若枝』のように」と記されています（53：2）。ただしその若枝は、決して華々しい姿の王ではなく、周囲から軽蔑され、見るべき面影はなく、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている姿です。それゆえ、この王が、暴力や不法をただし、平和を確立する手段は、軍事力によるのではなく、その口と唇（11：4）から出るみことばです（参照：黙示録 1：16）。これらイザヤの預言は、まさしく飼い葉おけに寝かされ、十字架に死なれ、三日目によみがえさせられた救い主イエス・キリストを指し示しています。

準備のための聖書日課			
22日	㊊	イザヤ1:1〜9	天よ聞け、 地よ耳を傾けよ
23日	㊋	サムエル記上 16:1〜13	油を注がれたダビデ
24日	㊌	イザヤ2:1〜5	主の光の中を歩もう
25日	㊍	イザヤ53:1〜12	この人を見よ
26日	㊎	ヤコブ3:13〜18	平和を実現する 人たちの働き
27日	㊏	ヨハネ黙示録 22:16〜20	アーメン、主イエスよ、 来てください

成人科

● イザヤが預言し、イスラエルの民が待ち望んだメシア的王とはどんな王でしょうか？ イザヤ書 53 章を読み、「みんなで聴く聖書のおはなし」を参考に話し合ってみましょう。

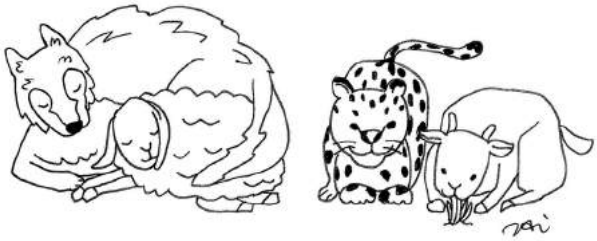
● 2015 年 7 月、時の政権は「積極的平和」と称して衆議院特別委員会にて安保関連法案を可決しました。その結果、今、軍隊放棄を旨とする現行の平和憲法から見ると違憲と考えられる自衛隊と米軍の一体化が進んでいます。それに対して、メシア的王が民のために造り出す「平和」とはどのような平和でしょうか？ いつその「平和」は実現するのでしょうか？ 6 〜 9 節や「聖書の学び」の「みことばによる平和の確立」を参考に考えてみましょう。主のみこころは非戦無兵の恒久平和にありますから「平和を実現する人々」（マタイ 5：9）として、私たちが主に用いていただけるように祈りの時を持ちましょう。

● 本日は、キリストの平和と和解の福音をたずさえて、アジアとアフリカの人びとと共に生きる日本バプテスト連盟派遣 4 組の世界宣教の働き人とそれぞれの宣教地のために祈る「世界バプテスト祈祷週間」初日です。派遣されたそれぞれの働き人とご家族へクリスマスカードを書いたり、現地の人びとと共に祝福の祈りを合わせましょう（各世界宣教の働き人の住所は、日本バプテスト女性連合『世の光』誌参考）。

平和の主よ来てください、この世界に

聖書 イザヤ書11章1～10節

暗唱聖句 わたしの聖なる山においては何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
イザヤ 11：9



預言者のイザヤに主の言葉が降(くだ)りました。その言葉は、平和の王がやがて戦乱たえないこの地にやってくる、という預言でした。

ユダ王国のアハズ王の時代、北イスラエルは、アッシリアに対抗するために、アハズ王に軍事同盟を結ぼうと誘ってきました。アハズ王が、その軍事同盟を断ったところ、北イスラエルは、アラムと一緒になってユダ王国を襲ってきました。その時、アハズ王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺しました。イザヤは主の言葉をアハブ王に伝えました。「落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない」。そのみことばの通り、北イスラエルとアラムは、アッシリアによって滅びました。やがて、歴史の流れの中で、無敵と思われたアッシリアも新興国バビロンによって滅ぼされてゆきます。

イザヤが預言した平和の王は、みんなが待ち望んでいたダビデのような圧倒的な軍事力をもって敵をやっつける王ではありません。むしろ、みんなから軽蔑(けいべつ)され、見るべき面影もなく、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている、弱々しい王です。でも、その王には、現実に即して物事の真実を見抜き、裁き、その為に大胆に行動する神の霊がとどまっています。彼は、主なる神との、まるで幼子が母親や父親をどこまでも信頼するような、いきいきとした関係をもっているのです。

王に、色々な人が、色々な事を訴えてきます。この王は、物事の良し悪しを表面的な目に見えるところや耳にするところによってさばきません。手もとにある主の律法を繰り返し、繰り返し読み、主なる神に徹底的に祈ります。その上で判決を下します。特に、権利を奪われた無力な弱い人と、脅(おど)され、何かとむしりとられて苦しめられている貧しい人の立場を弁護します。だから、この王の口から出る判決は、弱い人と貧しい人を苦しめている人、主の律法に逆らう者にとっては、有罪宣告です。

この平和の王が支配する世界は、ライオンも牛のように干し草を食べます。肉食獣が草食獣に変わっています。まるで、その世界は、神と人、人と人とが平和であり、神の目にすべてが、極めて良かった。そんな風に言われている「神さまが世界を造られた時」を想像させるような、平和な世界です。

このイザヤが語った預言は、やがて、イエス・キリストの再臨によって実現してゆくのです。「平和の主よ　来てください　この世界に」。

平和の主よ来てください、この世界に

青少年科

聖書 **イザヤ書11章1〜10節**

暗唱聖句 **わたしの聖なる山においては何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。**
イザヤ 11：9

聖書から…

いよいよアドヴェントに入りました。まずはイザヤの言葉を分かち合います。聖書の預言とは、先に起こることをあらかじめ語るという意味ではなく、神さまの言葉を預かるという意味です。イザヤも神さまの言葉を預かり語りました。その語った相手は一般の人たちではなく、王たち（アハズ、ヒゼキヤ）でした。王たちに「平和の王」の到来を語ったのです。王たちの現実(戦乱の絶えない時代)の只中で、神さまの現実（正義と公平を行う王）を語りました。王たちはきっとおもしろくなかったでしょう。でも預言の言葉は耳障りの良いものでは決してありません。時に耳を塞ぎたくなるような厳しさもあったでしょう。しかし、王たちにそれを語るイザヤは誰より神さまの言葉を聞いていた人であるともいえます。エッサイの株から一つの芽が萌え出る、ダビデの出現になぞらえて新しい王の登場を語ります。

イザヤだけではなく、実は私たちも神さまの言葉を預かり、語るようにと召されています。聖書の言葉をどのように聞いているでしょうか。自分の好きな箇所もあるでしょうし、鋭い問いかけをもって私たちに迫ってくることもあるでしょう。読む度に違う角度から私たちを養ってくれます。そのようにみ言葉との対話をしたことがあるでしょうか。

分かち合おう

- これから４週間にわたって、待降節を過ごして行きます。ろうそくに一つずつ火を灯しながらゆっくりと救い主の到来を待ち望みます。でも、救い主が早く来て欲しいと願っている人たちもいます。それはこの世界には不正が満ち、貧富の差が激しく、失った権利は回復されないという正義とは程遠い現実があるからです。そんな現実にある叫びのような祈りを、私たちはどのように自分の祈りにしたらよいでしょうか。その世界の嘆きの言葉をどう共感できるでしょうか。

- アドヴェントと同時に、世界バプテスト祈祷週間も始まっています。世界宣教のために祈り献げる時です。私たちは宣教師たち、IMV（インターナショナル・ミッション・ボランティア）、AMC（アジア・ミッション・コーディネーター）を派遣しています。派遣する国はどんな国でしょうか？ 中には紛争を経験し、民衆が分断され、深い傷を負い今も癒えない人たちもいます。世界宣教とは、語るだけではなく聞くことでもあるでしょう。イザヤが聞く人であったように、私たちが今あるところで、この時代の中で聞き取る神さまの言葉は何であるか、聖書に耳を傾け、分かち合いましょう。

幼小科

平和の主よ来てください、この世界に

聖書　イザヤ書11章1～10節

暗唱聖句　わたしの聖なる山においては何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
イザヤ 11：9

35課　11月28日

聖書から…

国と国との争いによって、神さまが造られた世界は破壊され、人々の心も打ち砕かれ、疲れ果ててしまいます。何もかも無くなったように見えた世界で、争いによって切り倒された切り株から芽が生え出でます。その芽を見た時、人々は未来への希望を抱くと同時に、回復をあたえてくださる神さまへの信頼と希望を見出したことでしょう。さらに人々はその芽を見て、将来自分たちを真の平和へと導いてくださる救い主を見出しました。その救い主こそ、私たちと共に生き、私たちのために十字架におかかりになられ、３日目に復活されたイエスさまにほかなりません。

活動①

「へいわとせんそう」

『へいわとせんそう』（たにかわしゅんたろう・ぶん、Noritake・え、ブロンズ新社）という本があります。最初のほうは「へいわの○○」と「せんそうの○○」の絵の違いがありますが、最後のほうは同じ絵が描かれています。平和と戦争は全く違うものですが、平和の下に生きる人も戦争の下に生きる人も同じ命をもつ人間であることに気づかされる本です。本を読んでメンバーと分かち合ってみませんか。

活動②　ワークシート

「エッサイの根」クリスマスカード

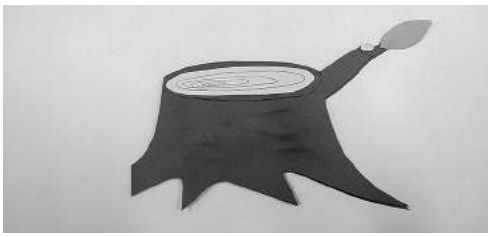
●準備●画用紙、はさみ、のり、鉛筆や色鉛筆など

①ワークシートをコピーして、形を切り取り、カードのパーツとして使用します。

②好きな色画用紙を台紙にして、①のパーツを貼り、クリスマスカードを作ります。

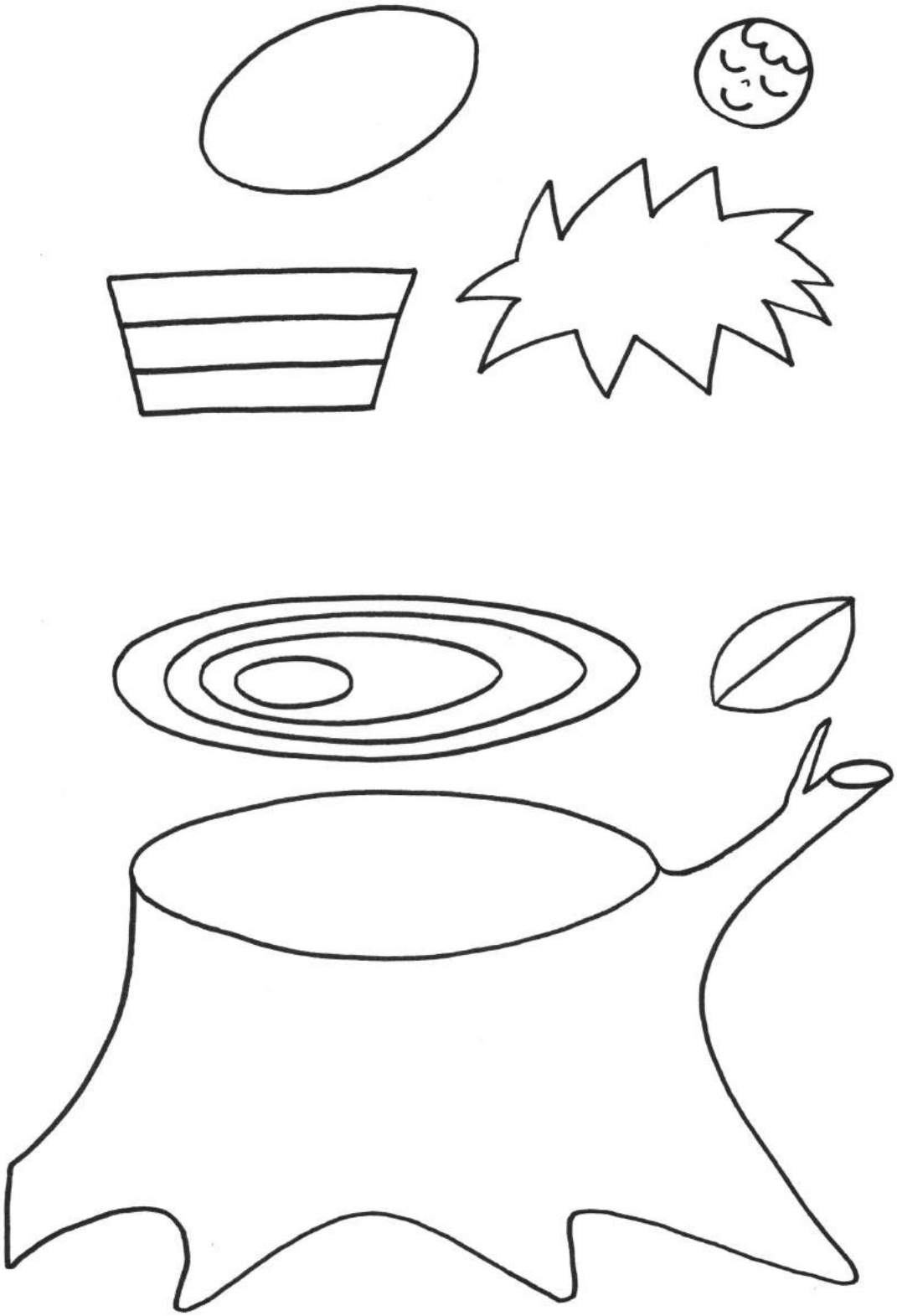
③切り株パーツは開くようにしても楽しいですね。左側を輪にした二重の紙の上に切り株イラストを置きます。その際、イラスト左下の切り株の直線部分を輪に重ねて、イラスト通りに切り取ってみましょう。切り株が開いたり閉じたりするように重なって切り取ることができます。

④自分の分だけではなく、カードを差し上げたい人の分も作り、クリスマスカードを送りましょう。



ワークシート

「エッサイの根」クリスマスカード



聖書の学び

もはや戦うことを学ばない

聖書 ミカ書4章1〜4節

暗唱聖句 国は国に向かって剣を上げず　もはや戦うことを学ばない。
ミカ４：３

36課 12月5日

預言者ミカと時代背景

ミカとは「誰がヤハウェのようであろうか」という意味の名で、紀元前８世紀半ばから７世紀前半のユダ王朝におけるヨタム、アハズ、ヒゼキヤ王の時代に活動した預言者です。彼はエルサレム南西約30キロのペリシテ国境近くの田舎町「モレシェト」出身で、アモスより後、ホセアの後期、イザヤと同じ時代の預言者です。

彼はサマリアに対する神の裁きを預言しています（１：１〜７）が、サマリアはアッシリアによって紀元前722年に陥落していますので、その後は、ユダ王国で活動しました。「終わりの日」についての預言である４章１〜３節は、イザヤ書２章２〜４節と似ているところから、イザヤと交流があったことが推測できます。イザヤは、当時の王をはじめ、政治的指導者へ預言したのに対し、ミカは偽善的な信仰生活を送る民に向けて預言しました。

裁きと救いの預言

ミカは、３章まで民の中の富める者と彼らにへつらう宗教家の罪を批判しました（２：２、３：２、３、５）。ミカの預言は、裁きの警告（１：２〜２：11）と救いの希望（２：12〜13）、裁きの警告（３：１〜12）と救いの希望（４：１〜５：14）という具合に、語ることに葛藤し揺れるミカの心が現れています。ミカは３章において、富める地主階級の貪欲を警告しています。彼らはミカの警告を嫌い、隣人の土地を搾取（さくしゅ）することを止めません。偽善的な宗教家たちは、二枚舌で虚偽（きょぎ）に満ちた言葉で民を惑わしています。「それゆえ、お前たちのゆえに　シオンは耕されて畑となり　エルサレムは石塚に変わ」ってしまうという厳しい結末を予告しているのです（３：12）。この預言は約100年後のバビロン捕囚によって現実となりました（４：６）。

ミカは、この滅びの予告を語った直後に、「終わりの日」（４：１）の預言をします。「終わりの日」とは、世の終末を指します。「その日」には、主なる神がエルサレムから全世界を統治され、平和と祝福に満ちた時代がもたらされます。主なる神は、ミカを通して厳しい審判を語られますが、決して民が滅びることを望まれてはいません。むしろ、「終わりの日」の預言によって、これからアッシリアおよびバビロンによる亡国の道を歩む民にあらかじめ希望を与えられました。信じる者が、なおも悔い改め立ち帰って生きることができるように。

唯一の希望

アッシリアの脅威（きょうい）に対して北王国イスラエルとダマスコは、軍事同盟を強要してユダ王国に侵入しました。ユダ王国アハズ王はアッシリアに助けを求め、北王国イスラエルはアッシリアによって滅亡します。まさに、戦乱の絶えない時代でした。主なる神は、延々と続く流血の時代状況を見据え、「剣を打ち直して鋤とし　槍を打ち直して鎌とする」（４：３）という対立暴力から解き放たれた平和を

宣言されます。「残りの民」（4：7）は、このミカの預言を唯一の希望として、亡国という試練を乗り越えてゆくのです。

戦うことを学ばない

「平和」とは、多くの場合、詩編 23 編 5 節に「わたしを苦しめる者を前にしても　あなたはわたしに食卓を整えてくださる」とある通り、戦争・紛争のただなかにおける主の臨在と祝福を示します。しかし、ミカは、終末（「その日」4：6）における「平和」を預言しています。その時、かつてのアッシリアやバビロンなどの超大国をはじめ、世界の国々は「もはや戦うことを学ばない」（4：3）のです。国々は自らの意思で武装を放棄し、それまで戦争によって深く傷ついた国民同士が、和解の業に仕えて無核・無兵の世界となるのです。

準備のための聖書日課			
29日	㊊	ミカ1:1〜7	サマリアは 瓦礫と化す
30日	㊋	ミカ2:1〜5	貪欲と強奪の罪
1日	㊌	ミカ3:1〜12	御顔を隠される主
2日	㊍	ミカ4:5〜8	シオンの山の 残りの民
3日	㊎	詩編23:1〜6	主の臨在と祝福
4日	㊏	エフェソ2:14〜22	十字架による 平和の福音

ミカは、終末においてこの「平和」を実現される主のみに希望をおいて、和解の道を歩むようにとイスラエルの「残りの者」（5：6, 7）に語りかけたのです。

成人科

● ミカ書が語る、当時の戦乱が絶えない流血の時代において主が選ばれた「残りの民」とは、いかなる存在であったのか、「みんなで聴く聖書のおはなし」を参考に話し合ってみましょう。故マルチン・ルーサー・キング・ジュニア牧師によって歌われた「勝利をのぞみ」（『日本基督教団讃美歌第二編』164 番　日本基督教団讃美歌委員会）を賛美してもよいでしょう。

● 12 月 8 日は、アジア太平洋戦争の開戦から 80 年です。敗戦後、悲惨な戦争の反省から現在の平和憲法が公布、施行されました。戦前、外務大臣として幣原喜重郎（しではらきじゅうろう）は国際協調、不干渉政策、共存共栄の理念にもとづく「幣原外交」を展開しましたが、満州事変以降は、左遷（させん）されて敗戦まで忘れ去られた存在でした。彼は、一切の戦争を放棄する平和憲法を連合軍総司令部（GHQ）と交渉し、成立させました。平和憲法、特に、9 条を骨抜きにして戦争ができる法体系を整えた「今」、主イエス・キリストの「平和の福音」（エフェソ 2：17）の使者として選ばれた「残りの民」（5：6）である私たちは、神と人、人と人との「和解」のため、自分が置かれているところで何ができるか話し合ってみましょう。

もはや戦うことを学ばない

聖書 ミカ書4章1〜4節

暗唱聖句 国は国に向かって剣を上げず　もはや戦うことを学ばない。
ミカ４：３

ペリシテ国境近くのモレシェトで、ミカは小さい頃から大人たちが鉄の鋤（すき）や鎌（かま）をペリシテ人から買うのを見かけていました。

ミカが大きくなって預言者となってすぐ、北イスラエルに行って預言をしました。それは、偶像礼拝によって北イスラエルの首都サマリアは野原となるという厳しい預言でした。残念ながら、その預言は紀元前722年に成就してしまいます。ミカは悲しみながら、南ユダに対して預言をはじめます。

その預言の対象は、寝床の上で悪をたくらみ、律法で禁止されている同胞の土地と家を貪欲に奪う金持ちでした。彼らは、小さな農夫の土地を奪っています。たよりにできる人や助けてくれる人のいない女性たち、そして、その幼子たちを家から追い出しています。政治的指導者たちは、自分の支配下にある人たちをエルサレムの城壁などの修理に追い立てています。給料はほんのわずかです。それら骨の髄（ずい）までしぼり取られた民が、自分が受けた悪を正す機会となる法廷は、わいろの巣です。正しい裁判を受けることができずにいます。偽りの預言者たちは、謝礼をくれる人には平和を語り、くれない人には戦争を預言しています。彼らは、ミカに「たわごとを語るな」と言います。

ミカはいつも孤独でした。でも、そんな時に限って神の霊に励まされて政治的指導者と貪欲な金持ち、偽りの預言者に彼らの咎（とが）と罪を告げ続けるのでした。

ある日、ミカに神の言葉が降（くだ）りました。それは、終わりの日の約束でした。「主は多くの民の争いを裁き　はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし　槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず　もはや戦うことを学ばない」。

ミカからのこの預言に唯一耳を傾けて聴いたのは、主を心から畏れ、家族と共に主の慈しみに生きた「残りの者」たちでした。「残りの者」たちは思うのでした。「偶像礼拝に走り、アッシリアに対抗するため、軍事同盟を断ったわが国を攻めてきた北イスラエルの都サマリアは、今、野原となった。国が武器を放棄して平和外交に徹するにはどうしたらよいか？ その為に自分ができることはなにか？ そうだ！王様に訴えてみよう。『王様、バビロンに頼らず、武器を捨て、兵隊には家に帰り、家族と共に過ごし畑を耕すように命令を出してください。そして、王様は、ただ主なる神に頼るように』」。

この勇気を伴った行動は、「終わりの日」に希望を置いた国と国との和解への第一歩となりました。

もはや戦うことを学ばない

聖書 ミカ書4章1〜4節

暗唱聖句 国は国に向かって剣を上げず　もはや戦うことを学ばない。
ミカ４：３

聖書から…

神さまの言葉を語るために、神さまによって選ばれた預言者たちは、同じ時代の中で、同じ言葉を、様々な人びとに語るために、それぞれ立たされました。イザヤはユダとエルサレムの王たちに向かって、そしてこのミカは民に向かって語ります。

ミカが立たされたその時代は、戦争が絶え間なく続き、それによって貧富の格差は激しくなり、社会は混乱していました。そんな激動の社会の中で、主の裁きと約束の言葉を語ります。「裁き」とは「神さまのものさし」のことで、「断罪する」というのは本来の意味ではありません。事柄が「神さまのものさし」に照らし合わせるとどうなのか、それだけではなく、「自分のものさし」を振りかざしていないか、ということをも問われるのです。

ミカは「終わりの日に」という言い方で、厳しい現実から目を背けることなく、先にある希望を語りました。対立ではなく、共に生きるための言葉を。剣や槍は戦いの道具ですが、鋤や鎌は農機具です。つまり、生きることの象徴でした。「もはや戦うことを学ばない」とは、平和のために自分は何ができるかを学んでゆく積極的なものです。しかも、独りではなく「わたしたち」として向かうべき将来の希望です。

分かち合おう

- 12月8日を迎えます。1941年のこの日、日本はアジア・太平洋戦争を始めました。そして多くの被害を内外に与えてしまいます。今年はちょうど80年となります。そしてこのような様々な戦争経験から、私たちはもう二度と戦争はしない、武力による解決は放棄するという画期的な憲法（第九条）を制定しました。憲法第九条を読んだことはありますか？ 率直に思ったことを分かち合ってみましょう。『かみさまのゆめ』（デスモンド・ツツ大主教、ダグラス・カールトン・アブラムス文、ファム・レ＝ウィエン絵、村松泰隆訳、ドン・ボスコ社、2009年）という絵本をご紹介します。私たちが学ぶべき平和について、考えたことを話し合ってみましょう。

- アドヴェントの２週目を迎えました。クランツに二つの灯がともります。なぜアドヴェントにろうそくを灯すか知っていますか？ 目の眩（くら）むような光ではなく、風が吹けばすぐ消えてしまうほんの小さな光に、私たちは希望を見出すからです。ろうそくについて、興味深く語っている賛美歌の歌詞を見つけました。『しお、せっけん、ろうそく』」で検索し、「これもさんびかネットワーク」の賛美を聞いて感じたことを分かち合いましょう。

幼小科

もはや戦うことを学ばない

聖書　ミカ書4章1〜4節

暗唱聖句　国は国に向かって剣を上げず　もはや戦うことを学ばない。
ミカ４：３

聖書から…

昔から今に至るまで、人間は戦うことをやめません。どうしてでしょうか。それは、人間が自己中心であるからです。自分が欲しいものは他の人がどう思おうとも何が何でも手に入れようとし、それがかなわなければ、人を蹴落としてでも（相手の命を奪ってでも）手に入れようとします。それが戦争です。そのような人々に対し、昔から預言者たちが「このまま神さまから離れると滅びますよ」と呼びかけますが、なかなかその言葉を受け入れられません。なぜなら、その言葉を受け入れると今までの自分が壊れてしまうから、それが怖いのです。預言者たちは、自分たちが人々から疎まれても、命の危険にさらされても、人々が神さまに立ち返って、人々と共に生きることができるように、「平和」を語り続けるのです。それが神さまから言葉を与えられた預言者たちの使命なのです。

活動①

「へいわってどんなこと」

『へいわってどんなこと』（浜田桂子・作　童心社）という本があります。この本は、日本と中国と韓国の絵本作家が共同して出版された本です。この本の帯には「わたしたちは戦争がだいきらいです」と書かれています。絵本の中にも「せんそうをしない」と書かれています。誰でも戦争は嫌いです。しかし、残念なことに世界中で今でも戦争が起こっています。悲しいことです。絵本を読みながら、「平和」について考えてみませんか。

活動②

「平和の道具」

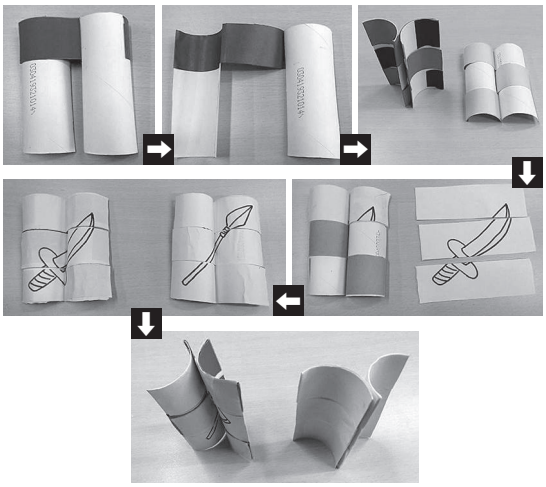
ミカ書では、「剣を打ち直して鋤とし　槍を打ち直して鎌とする」とあります。剣と槍は戦争の道具です。鋤と鎌は農具で、平和を象徴する道具です。私たちの周りにも平和の道具があります。どんなものがあるでしょうか。みんなで出し合ってみましょう。

活動③　ワークシート

「筒返し」

●**準備**●トイレットペーパーの芯、紙、はさみ、のり、鉛筆や色鉛筆

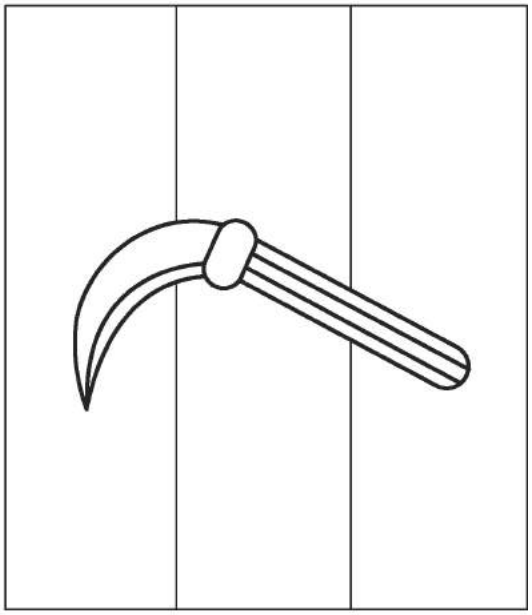
①ワークシートをトイレットペーパー大にコピーして、切り取り線で切ります。
②トイレットペーパー芯を半分に切ります。
③トイレットペーパー芯に筒返しのもとになる紙を交互に貼ります。
④③に①をのりで貼り付けます。



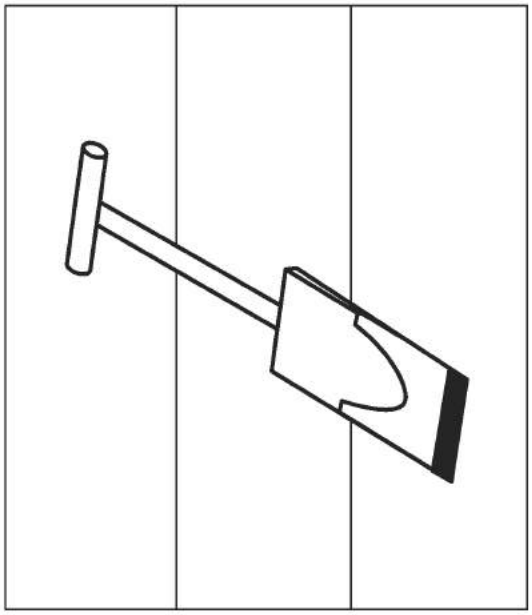
ワークシート

筒返し

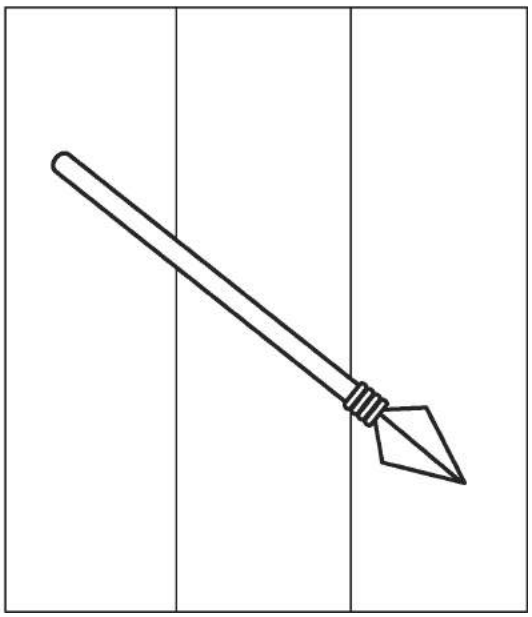
鎌



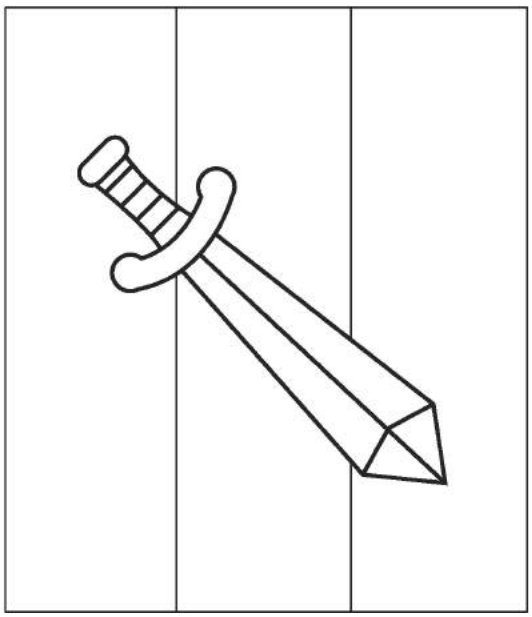
鋤



槍



剣



聖書の学び

彼こそ、まさしく平和

聖書　ミカ書5章1〜5節

暗唱聖句　彼は立って、群れを養う　主の力…をもって。彼らは安らかに住まう。
ミカ５：３

時代状況と平和

ミカ書５章の時代状況は、４章 14 節の「敵は我々を包囲した」及び５章４〜５節で敵としてのアッシリアの脅威（きょうい）が語られているところから、紀元前 701 年のアッシリアによるエルサレム包囲の頃と思われます。既にアッシリアによって北王国は滅ぼされており（紀元前 721 年）、残った南王国ユダも軍事的脅威に直面していました。そのような危機が迫る中、ユダ王国の王ヒゼキヤは主なる神に信頼して難局に対応しようとせず、エジプトの軍事力に頼りました。その結果、アッシリアがエルサレムへ押し寄せ包囲したのでした。こうした成り行きの背後に「神の裁き」をミカは見ています。４章 14 節の「頬を杖で打つ」とは、杖による公然な侮辱（ぶじょく）です。包囲下にある民の前で、ヒゼキヤ王は完全に面目を失ってしまいました。民の上に横柄に君臨し、社会的弱者や貧困者を生み出し、放置し、政治的混乱の結果としての危機的事態に、他国の軍事力にすり寄る指導者は失格であり、民衆の前でその信頼性が失われてしまうのです。

来るべきメシア

イスラエルにおいて、王に即位した者は民からメシア（油そそがれた者）としての働きを期待されました。メシアは、正義と公平を持って治め、平和をもたらし、神の憐（あわ）れみを持ち運ぶように貧困者など社会的弱者を守る保護者・支援者でした。民は常にこの望みを即位する王に期待しました。しかし、列王記、歴代誌が語るように、歴代の王たちはことごとく民にとって期待外れでした。さらにその王たちは神の期待にも沿う王ではありませんでした。やがて、民の目は未来の新しいメシアへ向けられていったのです。しかし、その民が抱くメシア像は、神の与えるものとは違いました。来るべきメシアのイメージは、新しいダビデであり、ダビデがそうであったように、群れを養う羊飼いのような人物です（５：３）。民衆が水場や草場に導かれ、野の獣から守られ、安らかに住んでいる風景。群れにそのような命の時をもたらす羊飼い。それこそが、ミカが見た新しく治める者の姿であり、それこそが平和・シャローム（５：４）だったのです。

神の選び

ミカによると、その新しいメシアは、「エフラタのベツレヘム」から出現します。エフラタはダビデの出身地ベツレヘムの地域に生活していたユダ族の中でも最も小さい氏族でした。神は、新しい指導者を「いと小さき者」（５：１）、最も取るに足らない者の中から選ばれます。エフラタ族の一株であるエッサイ。このエッサイの末っ子として生まれたダビデが主に選ばれました。やがて、「最も小さき者、最も取るに足らない者からの選び」という神のみこころは、飼い葉桶の幼子（ルカ２：７、12）という、メシアのしるしとなって成就してゆきます。

この新しいメシア（キリスト）がナザレの

イエスとして現れたことを新約聖書は証言しています。マタイが「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で　決していちばん小さいものではない」（マタイ２：６前半）と語るベツレヘムにおけるイエスの誕生は、ミカ書５章１節の成就です。

預言者ミカのメシア預言が、今こそイエスにおいて実現したのでした。メシア（キリスト）は、きらびやかな王宮ではなく、ダビデの出身地であるベツレヘムでお生まれになりました。しかも、ユダ族の中で最も小さな氏族であるエフラタ族として。その誕生をヤコブの星（民数記 24：17）を通して真っ先に知らされ、東方からやって来て、心から祝い、ひれ伏し、礼拝し、贈り物をささげたのは、ユダヤ人から見て、汚れた異邦人であり、律法が禁止する占いをなりわいとする占星術の学者たちでした。メシアは、国籍や人種を超えた、あらゆる民を結んでいく救い主なのです。

準備のための聖書日課			
6日	㊊	創世記35:16～20	エフラタ近くの ラケルの記念碑
7日	㊋	サムエル記上 17:12～16	エフラタ人のダビデ
8日	㊌	民数記24:15～19	ヤコブのひとつの星
9日	㊍	マタイ2:1～6	メシア誕生の地 ベツレヘム
10日	㊎	ルカ2:1～20	飼い葉桶の中の メシア
11日	㊏	ミカ4:14	敵は我々を包囲した

成人科

● 王に即位した者は民からメシアとしての働きを期待されましたが、歴代の王は期待外れでした。民が王に期待したメシアとはどんな姿であったか、また、主なる神の示す「来るべきメシア」とはどんな姿か、「聖書の学び」「来るべきメシア」から話し合ってみましょう。

● 主なる神が民に用意される平和・シャロームをもたらす新しいメシアは、どのようなしるしを帯びて、エフラタでお生まれになるでしょうか？ そのしるしは、社会的弱者や貧困者が放置され、意図的に孤立と分断が進められている今の時代に、キリスト者として生きようとする私たちに、どのような希望と励ましがあるのでしょうか？

● マタイはミカの預言「いと小さき者」（5：1）を「決していちばん小さいものではない」（マタイ２：6）と変えています。なぜ、マタイは訳し変えたのでしょうか？「マタイはユダヤ人を読者として福音書を書いた」ことをヒントに話し合いましょう。そして、今年もクリスマスがやって来る喜びをもって一緒に祈って終わってもよいでしょう。

彼こそ、まさしく平和

聖書 ミカ書5章1～5節

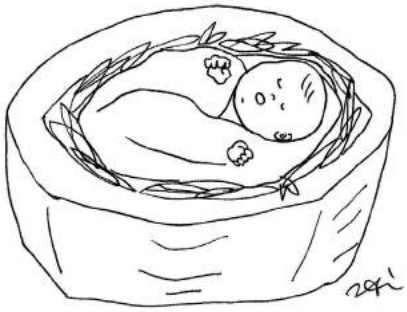
暗唱聖句 彼は立って、群れを養う　主の力…をもって。彼らは安らかに住まう。
ミカ５：３

ミカは、主なる神の正義を語ったアモス、慈しみを語ったホセア、そして、へりくだって神と共に歩むことこそ、主なる神が求められる歩みと語ったイザヤを継ぐ預言者でした。ミカが預言者として召されてしばらくすると北王国の都サマリアは、アッシリアによって滅ぼされます。その後、彼は、貧しい人たちから何かとしぼりとり、形ばかりの信仰生活をしている地主や金持ちなどへ厳しく神の言葉を伝えました。

そんなミカの出身地は、ペリシテ人の町ガテに近く、北方からエジプトへ通じる幹線に近い村モレシェトでした。貧しい農家出身であったミカは、幼い頃から度重なる戦乱とアッシリア軍の猛威（もうい）を目の当たりにして育ったのでしょう。ミカは、その背後に、貧しい人たちを追い詰めておきながら、「わたしたちは神さまを心から礼拝している」と胸を張り、主なる神に頼らず、軍備に走る北王国と南王国に対する主なる神の激しい怒りを見たのです。「その日が来れば、と主は言われる。わたしはお前の中から軍馬を絶ち　砦をことごとく打ち壊す」と。

彼は、夜、寝床で「いかにして貧しい仲間から畑や家々を取り上げるか」をたくらむ金持ちの地主たちへ神の審判を語り続けました。その度に、誰が主なる神の言葉を取り次ぐことに耐えることができるであろうか、と苦悩したのではないでしょうか？

しかし、ミカは神の霊に励まされて語ります。大きな国が、どんな道を選ぶのか、その様子にいちいち動揺し、指導者たちが仲間の命をむさぼり、追い詰めることが絶えない時代において、主なる神の言葉のみを唯一の武器として、誠実に語り続けます。そして、新しいメシアによる平和・シャロームを預言したのでした。



ミカにとって、平和・シャロームとは、やがてイスラエルの地に現れるメシア（キリスト）ご自身です。彼は、傷ついた葦（あし）を折らず、くすぶる灯心を消さない柔和な人物です。その新しいメシアは、ダビデの出身地ベツレヘムの地域に生活していた民の中でも最も小さい氏族エフラタから出現します。彼は「最も小さき者、最も取るに足らない者からの選び」という神のみこころを現わす飼い葉桶の幼子というメシアのしるしを帯びてお生まれになります。

そして、その誕生を真っ先にお祝いしたのは、東の方からやって来た占星術の学者たちでした。メシアは、国籍や人種を超えた、あらゆる民を結んでいく救い主なのです。

彼こそ、まさしく平和

青少年科

聖書　ミカ書5章1～5節

暗唱聖句　彼は立って、群れを養う　主の力…をもって。彼らは安らかに住まう。
ミカ５：３

聖書から…

預言者たちの時代に、王が王として選ばれ即位した者は民からメシアとしての働きを期待されていました（**「聖書の学び」**より）。民全体の王には、困難な状況にある人たちを助け、支援し「なぜ人びとがそのような状況で暮らさなければならないのか」をよく考えて必要な策を講じる責任がありました。次の王はきっとこの暮らしを良くしてくれる、そう期待しながら待っていても、状況が全く変わらないと気づいた時、民の心は王から離れてしまいます。そのような中で預言者ミカは語ります、「彼こそ、まさしく平和である」と。平和に程遠い状況だからこそ、来るべき平和を希望として語ったのです。

イエス誕生の物語でこの箇所が引用されています。それはこの預言者の言葉を知る者たちに語りかけるためでした。そしてその誕生の知らせを最初に聞いたのは、異邦人である東方の学者たちでした。彼らは幼子に会うとひれ伏し、礼拝し、贈り物をささげました。預言者ミカの言葉はこのように実現したのです。

分かち合おう

- 人びとは王に期待していました。なんとかこの暮らしが良くなってほしい、小さくされた人たちに正義が現れてほしい、分断されることのない世界になってほしい…。私たちが暮らす社会とどこが違うでしょうか。貧富の格差は広がり、小さくされている人たちはますます生きにくい状況となり、いつの間にか壁を作ってしまうような世界の状況があります。混乱と断絶の世界にあって、私たちが平和の王を待ち望むという時、聖書の語る平和と世界が語る平和という言葉にかなりのズレを感じませんか。私たちが望んでいる平和の王とはどのような王でしょう、話し合ってみましょう。

- 預言者ミカの言葉と、福音書記者マタイが引用した言葉は少し違っています。マタイは「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決して一番小さいものではない」と紹介しています。イエスさまの誕生物語の中で、エフラタという民は決して小さなものではないんだぞと言いたくなってしまったのでしょうか。でも、ユダヤの民が選ばれた理由は、「あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった」からであると聖書は語ります（申命記７：７）。ユダヤ自身がいと小さきものでした。だからこそユダヤ自身が開かれねばならなかったのです。私たちは開かれているでしょうか？クリスマスの出来事は、私自身を開くことから始まります。イエスさまを迎える意味をもう一度考えてみましょう。

幼小科

彼こそ、まさしく平和

聖書　ミカ書5章1～5節

暗唱聖句　彼は立って、群れを養う　主の力…をもって。彼らは安らかに住まう。
ミカ５：３

聖書から…

繰り返される争いの中で、苦しみの中にある人々は、自分たちに平和をもたらしてくれる救世主・メシアを待ち望みます。人々が抱いていた救世主のイメージはどんなものだったでしょうか。おそらく、すぐにでも自分たちをアッシリアのような大国から守ってくれる王様、代々語り伝えられているダビデ王のような王様をイメージしたでしょう。しかし、預言者ミカは「エフラタのベツレヘムよ　お前はユダの氏族の中でいと小さき者　お前の中から、わたしのために　イスラエルを治める者が出る…」と、人々が抱く救世主とは違う形で、小さき所から現れることを示されました。そして、「最も小さき者、最もとるに足らないものからの選び」であるイエスさまこそが救世主・メシアであるのです。

37課

12月12日

活動①

「せんそうとへいわ」

今まで聖書のお話や絵本などを通して、戦争と平和について見てきました。メンバー一人ひとりが思い描く戦争と平和のイメージを絵に表してみましょう。

活動②

「へいわってすてきだね」

『へいわってすてきだね』（安里有生・詩、長谷川義史・画　ブロンズ新社）というこの本は、2013年沖縄の６歳の男の子の詩をもとに作られた絵本です。「へいわってなにかな。ぼくはかんがえたよ」という言葉からはじまり、「これからも、ずっとへいわが　つづくように　ぼくも、ぼくのできることから　がんばるよ」で終わります。私たちが平和のためにできることを一緒に考えてみましょう。

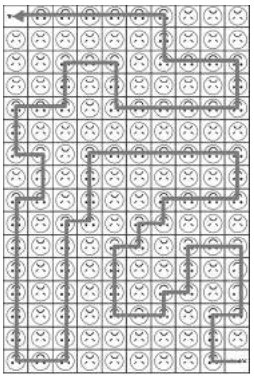
「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイによる福音書５章９節）

活動③　ワークシート

「へいわへの道」

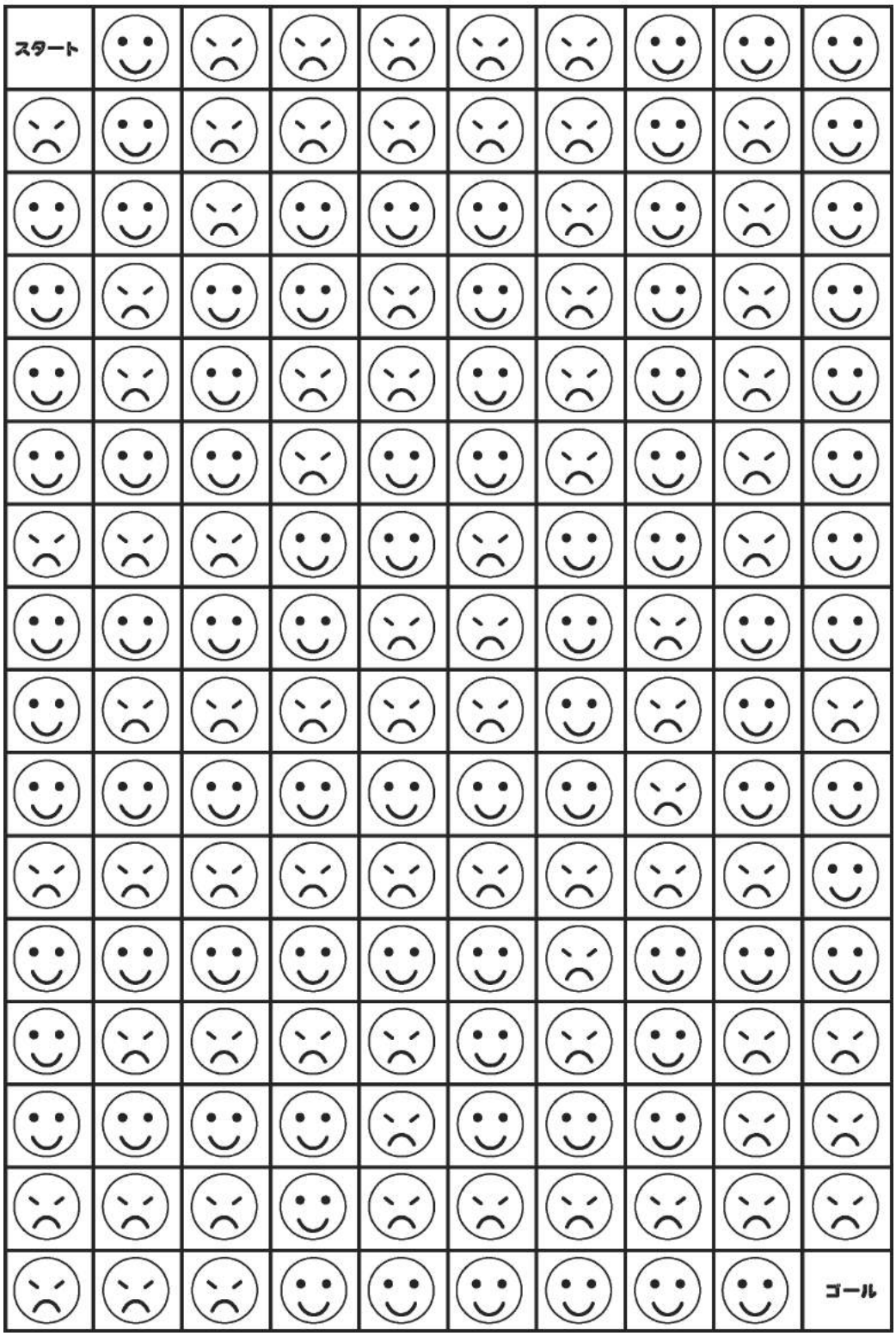
（ニコニコえがお）をたどって、へいわの道を進みましょう。

37課ワークシートの答え



ワークシート

へいわへの道



聖書の学び

すべての人を照らすいのちの光

聖書 ヨハネによる福音書1章1〜18節

暗唱聖句 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
ヨハネ 1：4

執筆の目的と背景

ヨハネ福音書は、他の共観福音書とは趣が異なり、冒頭に壮大な序文が付いています（1：1 〜 18）。この序文こそ、ヨハネ福音書の総括的なテーマが記されており、イエスがどのような存在であるのかという宣言がなされています。それは同時に、この福音書が記された紀元 100 年頃にヨハネと共に生きていた共同体が置かれていた状況と深い関わりがあります。ローマによるキリスト者迫害、ユダヤ教からの異端排除、そしてグノーシス主義のはびこりでした。

イエスこそが、すべての生命の創造主の初めからの真理、命とすべての出来事の意味の源である言（ロゴス）が肉体となってこの世に来られたのだということ。そして、そのイエスをキリストとして信じる者の今こそが（やがてではなく）、すでに永遠の救いと結ばれているのだ、ということを宣言しようとしています。

著者ヨハネは、キリストが人として世に来られた受肉の真理を否定し、それ故、罪人の一人として十字架につかれた贖罪を否定した仮現論とたたかい、実際の人間として十字架の苦難を背負われた意味を大切にしました（1：14、19：28、34）。また、当時、バプテスマのヨハネをメシアあるいは、世の終わりに登場するエリヤと過大評価する運動がありましたが、著者ヨハネは、バプテスマのヨハネが、「イエスこそがメシア（キリスト）であること」の証言者だということを序文の中に明確に記すことによって、それらの運動を訂正する役割をも担いました（1：6 〜 8、15、27）。

クリスマスの喜び

イエス・キリストがこの世に遣わされた意味を証しする。それがこの序文にあたる部分の主題ですから、まさしくクリスマスにこの箇所を読むことはたいへんふさわしいと思います。

ヨハネは「言」「命」「光」「暗闇」「世」「肉」「宿られた」「栄光」「恵み」「真理」「豊かさ」という表現を通して、天地創造前から「父のふところにいる独り子である神」（1：18）が、人となられた受肉の恵みと真理を語りかけています。それまでの律法によるあらゆる規則ずくめの信仰深さと「恵み」と「真理」は、対立します。それらは、行いをともなったクリスチャンでなければならないという縛りから私たちを解き放ちます。ヨハネは「恵み」と「真理」という表現を通して、ただ、限りなく慰め深いこと、真の助けに満ちたこと、自分に罪はないと自らを欺く暗闇から解き放つクリスマスの喜びを語っています。乏しく、罪人としての今のありのままの私たちの現実の上に、この恵みが成立しています。それゆえ、わたしたちが罪人であること自体が、神が恵み深い方であることをかえって、はっきりさせます。「光は暗闇の中で輝いている」（1：5）。

闇は光に勝たなかった

5節後半の「暗闇は光を理解しなかった。」を聖書協会共同訳聖書は「闇は光に勝たなかった」、口語訳聖書も「やみはこれに勝たなかった」と訳しています。

闇が深まれば深まるほど、光は輝きます。闇が主人公のように振る舞う今の時代だからこそ、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（8:12）とおっしゃるイエス・キリストの言が輝きます。私たちと共にいるために、肉になりきられたイエス・キリストの言は、私たちにいきいきと生きる希望と私たちが仕えている教会に未来を与えてくださいます。神の言が受肉したイエス・キリストの言を分かち合う時、私たちは既に永遠の命に生かされていること、闇から守られていることに気づきます（ヨハネの手紙一5章18～20）。闇が支配しているかのような今の時代だからこそ、イエスをキリストと証している聖書の言葉に共により頼んで参りましょう。

準備のための聖書日課			
13日	㊊	ヨハネ8:12～20	世の光に従いつつ生きる
14日	㊋	ヨハネ19:28～37	渇く
15日	㊌	ヘブライ2:10～18	血と肉を備えて
16日	㊍	ヨハネ一4:1～6	肉となって来られたキリスト
17日	㊎	ヨハネ一4:7～12	独り子の派遣
18日	㊏	ヨハネ一5:18～21	主イエスこそ永遠の命

成人科

● 2020年以来、世界が新型コロナウィルスという闇に覆われ、多くの尊い命が失われました。日本も2020年3月以来、感染拡大の恐怖で先が見通せない不安、世代間の断絶、医療の逼迫（ひっぱく）という闇に覆われました。CO_2の発生で大気は汚染され、地球温暖化による気候変動は人類にとって危機的状況です。しかし、各国の政治経済の指導者たちは新自由主義というグローバル化のもと、自国民を始めとする搾取（さくしゅ）を止めようとしません。インターネットの世界ではフェイクニュースが一般化し、利用者一人ひとりがその真偽を確かめるしかすべがありません。こういう時代のクリスマスに、ヨハネによる福音書1章1～18節を読む理由を考えてみます。

● 福音書の著者ヨハネは、何のために初代教会に流行した仮現論と戦ったのでしょうか？「聖書の学び」を参考に話し合ってみましょう。24日（金）に燭火礼拝を予定する教会・伝道所も多いと思います。闇に打ち勝たれた光そのものであるイエスさまのご降誕を象徴する灯（ともしび）を掲げる礼拝を通して喜びと希望が与えられるように、その準備のために一緒に祈って終わってもよいでしょう。

すべての人を照らすいのちの光

聖書 ヨハネによる福音書1章1～18節

暗唱聖句 言(ことば)の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
ヨハネ１：４

ヨハネは歳を重ねました。迫害で指導者がいなくなった教会では、信徒たちは何が真理か、わからなくなりました。エルサレムに生れて、ようやく２世紀目を迎えようとするキリスト教会は、早くもどこにも希望がない暗闇に覆われてしまいました。

しかし、この世の闇が深まれば深まるほど、ヨハネの心の中に命の光が差し込むのでした。その光は、ヨハネの心の中に宿り、「もう、私は歳です。早く召してください！」と叫ぶ彼に「信徒たちを慰めなさい」と語りかけるのです。老ヨハネは励まされて講壇に立ち続けます。そして、希望を失った信徒たちにぼそぼそと、しかし、力強く命の言(ことば)を語りかけるのです。

話しながらヨハネは手もとにある、細々と、しかし力強く光を放つランプにふと目をやり、改めて「わたしたちは、光に包まれているんだなぁ！」と思いました。そして、会衆席では、いつのまにか、小さな会堂一杯に一心に老牧師の話を聴く信徒たちや子どもたちが、喜びと希望に満たされてローソクの灯を大事に大事に掲げているはありませんか。

「今の世の中は、まるで暗闇に覆い尽くされているようです。しかも、年々、その闇は深まっていきます。でも、真っ暗闇となればなるほど、ランプを灯すと光が輝くように、既に光は暗闇で輝いています。暗闇がどんなに深くても光には勝てません。むしろ、暗闇は光に照らされれば、光となるのです。

約 100 年前、主イエスがベツレヘムの家畜小屋でお生まれになった時も闇が支配していた。しかし、主イエスがお生まれになったおかげで、私たちは既に永遠の命に生かされています。これから、私たちを巡る現実は悪化してゆくだろう。人々の心もますます、すさんでゆくでしょう。地震や台風、大雨、いなごの害、流行りの病も次々と起きるでしょう。しかし、『父のふところにいる独り子である神』は、私たちをありのまま愛されており、いついかなる時も、既に光で包んでくれているのです。私たちは光の子なのです」。

薄暗がりの中、礼拝している信徒たちやその子どもたちのローソクで照らされた顔を見ながら、ヨハネは喜びに満ちあふれて思うのでした。「ああ、わたしたちは光に包まれているのだ。新しい年、私たちはみな、キリストの光に包まれて希望をもって生きることができるのだ。何が起きようとも感謝して歩もう」と。

「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」

すべての人を照らすいのちの光

青少年科

聖書 **ヨハネによる福音書1章1〜18節**

暗唱聖句 **言（ことば）の内に命があった。命は人間を照らす光であった。**
ヨハネ１：４

聖書から…

この世界が創造された時の言葉を思い出してみましょう。創世記の冒頭はどんな言葉で始まっていたでしょうか？「初めに神は天と地を創造された」。今日の聖書の箇所と似ていませんか？ このヨハネによる福音書が書かれた背景と創世記のそれは実によく似ています。自分たちのルーツを紐解き、私たちはどこから来て、どこへ行こうとしているのかを表しています。この世は神さまの「光あれ」という言葉からすべては始まりました。一方で、言（ことば）によって成ったこの世で、私たちは光であるイエスさまと共に歩みます。

イエスさまの到来によって、新しい時代が始まりました。ヨハネによる福音書はイエスさまを「まことの光」と言い表しています。世に来てすべての人を照らす、と。しかし人びとはこの光を認めなかった、民は受け入れなかった（1：10〜11）、とはまるでイエスさまの十字架について言っているようです。救い主の到来は、その十字架の出来事までを語ることだとヨハネ福音書は証しをしています。

すべての人を照らす光を迎える準備はできているでしょうか？ いや、こちらの準備ができていようといまいと、イエスさまは来られます。アドヴェントの意味は「待ち望む」ことです。闇の中にいるようなこの私をも照らしてくださる主をお迎えしましょう。

分かち合おう

- 私たちは実に多くの光に囲まれています。自然の光だけでなく、夜も真昼のように照らす光がなんと多いことでしょうか。真っ暗闇を経験したことがあるでしょうか？ あらゆる光が遮断された空間は少ないことに気がつきます。暗闇の中にいると、自分がどこにいるのか、そして誰かいるのかさえも分かりません。そのような中で輝く光は心強く、自分も相手も照らし出されるのです。そこで、自らが輝くのではなく、光が光として輝き、照らされることをただ知ります。光が溢れている現実の中で、私たちの暗闇とは何でしょうか。また照らされる喜びがあることをも話し合ってみましょう。

- いよいよクリスマスの礼拝をささげる教会も多いと思います。このヨハネによる福音書には劇的なイエス誕生物語はありません。ちょっと観念的な言葉が多いですね。でもこれはヨハネなりの誕生物語の表現です。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」、私たちの間とはどこでしょうか？ 私たちとは一体誰のことでしょう？ 私と誰の間に主は宿られたのでしょうか？ 私たちのクリスマスの出来事の意味を、み言葉を味わいつつ話し合ってみましょう。

幼小科

すべての人を照らすいのちの光

聖書 ヨハネによる福音書1章1〜18節

暗唱聖句 言(ことば)の内に命があった。命は人間を照らす光であった。
ヨハネ１：４

聖書から…

暗闇の中で生まれたイエスさまは、すべての人を照らす命の光です。イエスさまは、神さまと等しい方ですが、一人の人間として小さな赤ちゃんとしてお生まれになりました。イエスさまが人としてお生まれになったのは、神さまのぬくもりを私たちが手に触れてわかるようにしてくださったのです。私たちがイエスさまに出会うとき、神さまが私たちをどんなに愛してくださっているかがわかります。神さまの愛は、イエスさまの十字架と復活によってあらわされ、それが神さまの栄光であると聖書は私たちに伝えています。

38課

12月19日

活動①

「ひかり・ひかり」

「ひかり」をイメージするのはなんですか？「明るい」「暖かい」「まぶしい」「ライト」「ランプ」…。どれだけの言葉が出てくるかな？みんなであげてみましょう。

活動②

「ろうそく作り」

●準備●ろうそく（前年度キャンドルサービスや、アドベントクランツなどで使用されたもの）、好きな色のクレパス、ろうそくの芯、ジャムやヨーグルトのガラスビン、ろうそくを溶かすための空き缶、鍋（お湯）、カセットコンロ、軍手、カッターナイフ、新聞紙、等

①ろうそくをカッターナイフなどで細かく刻みます（取扱い注意）。
②クレパスもカッターナイフなどで細かく刻みます（ろうそくが白い場合）。
③空き缶に①と②を入れ、なべにお湯を入れて、ろうを入れた空き缶を湯煎にかけてろうを溶かします。
④③をガラス瓶に入れ、ろうそくの芯をさしましょう。
⑤ろうが固まったらでき上がりです。
※やけどや怪我をしないように、気をつけてください。

活動③　ワークシート

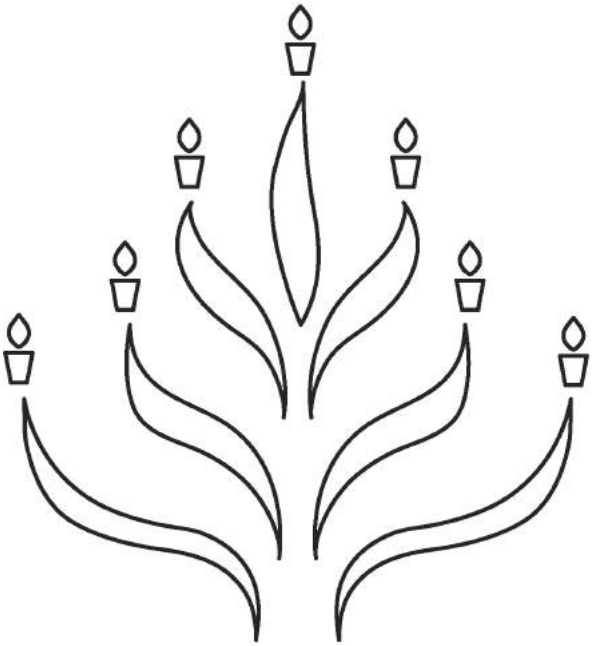
「暗闇の光（ステンドグラス風）」

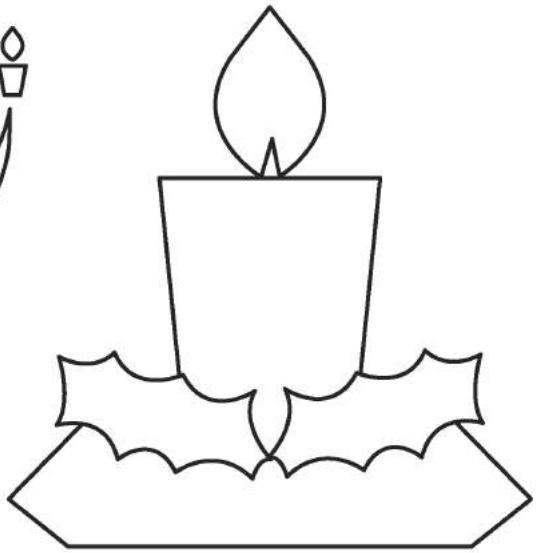
●準備●黒の画用紙、セロファン紙、カッターナイフ、のり

①拡大コピーしたワークシートを台紙にして、画用紙に形を書き写し、カッターナイフで切り取ります。
②セロファン紙を①の切り取ったところに貼ります。でき上がったら窓ガラスに飾ってみましょう。

ワークシート

暗闇の光（ステンドグラス風）





聖書の学び

この方こそ神の子

聖書 ヨハネによる福音書1章29〜34節

暗唱聖句 わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。ヨハネ 1：34

39課 12月26日

神の小羊

「その翌日」（1：29）とありますが、その前日の描写と密接に結びついています。前日には何が起こったのでしょう。バプテスマのヨハネがバプテスマを授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアにエルサレムの祭司やレビ人たちがやって来て、「あなたは何者なのか」と質問していたのです。その問いに対し、ヨハネはきっぱりと自分はメシアでもエリヤの再来でもないことを断言します。ところが、その翌日、自分のほうへイエスが来られるのを見たヨハネは、彼らに向かって「この方を見なさい。この方こそが、世の罪を取り除く神の子羊だ」とイエスを紹介したのでした。

「小羊」と聞くとユダヤ人たちは、ただちに犠牲の小羊の血を鴨居に塗り、主が通り越していかれた過越の小羊（出エジプト 12：3 〜 7 参照）を思い起こしたことでしょう。ユダヤ人にとってそれは民の救いを成し遂げるメシアであることを連想させたに違いありません。

苦難の僕（しもべ）

ヨハネ福音書は、イエスにイザヤが預言した苦難の僕の姿を重ねています。「そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。苦役に課せられて、かがみ込み　彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように」（イザヤ 53：6b 〜 7）。ユダヤ人たちが様々なイメージでメシア像を追い求め、探していますが、この苦難の僕（後に十字架に苦しまれた）イエスこそが、真のメシアであることをバプテスマのヨハネを通して指示したのです。

イエスは苦難の僕であるからこそ「世の罪を取り除く神の小羊」であり、メシアなのです。「世の罪」の「罪」は単数形です。人間が背負っている根源的な罪を示しています。イエスは、その罪を一身に背負い、その罪の力を根底から贖（あがな）われます。贖いとは、旧約では「家畜や人間の初子を神にささげる代わりに、いけにえをささげること」であり、新約では「キリストの死によって、人間の罪が赦され、神との正しい関係に入ること」（『新共同訳聖書』用語解説）です。従って、ヨハネが語った「世の罪を取り除く神の小羊」とは、明らかに十字架の死を示しています。バプテスマのヨハネは、これから十字架という苦難の道に向かうイエスの姿に、旧約以来の「神の小羊」の姿を見ていたのです。

その方はわたしにまさる

「わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである」（1：30）は、福音書の序文である 15 節の繰り返しです。前述したように、当時バプテスマのヨハネをメシア、あるいは、世の終わりに来るエリヤと見る運動（1：19 〜 21）を訂正するために、「イエスはヨハネに『まさる』」と強調しています。

バプテスマのヨハネはイエスについて「わたしよりも先におられた」（1：30）と語り、「わたしはこの方を知らなかった」（1：31,

33）と繰り返します。ここに、イエスとヨハネの存在性が決して入れ替えることができない程に決定的であること、すなわちイエスこそが、自分より先に存在し、自分が知る以前よりイエスがすべてを知っておられる方であることを強調しています。イエスが認識の対象なのではなく、自分がイエスに認識され、イエスを証しする者に過ぎないと言うのです。

バプテスマのヨハネは、人間に為し得る悔い改めの業（わざ）とその徴（しるし）を大切にしていますが、救いそのものを成し遂げるのは、「この方」イエスの業であることを水のバプテスマと聖霊のバプテスマの対比で示したのでしょう。その意味で、ヨハネが行った水によるバプテスマは「この方」（1：31、34）が授ける聖霊のバプテスマの道備えでした。イエスの十字架の死によって成就する罪の贖いこそが聖霊によるバプテスマ、聖霊による新生の成就なのです。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」。

準備のための聖書日課			
20日	㊊	使徒言行録 8:26〜40	卑しめられた 神の小羊
21日	㊋	ヨハネ1:43〜51	もっと偉大なことを 見る
22日	㊌	テモテ一1:12〜17	罪人を救うために
23日	㊍	イザヤ40:1〜11	荒れ野に道を備えよ
24日	㊎	マタイ3:1〜12	聖霊と火による バプテスマ
25日	㊏	ヨハネ1:19〜28	荒れ野で叫ぶ 声として

成人科

● 神の子であるイエスさまはなぜ、バプテスマのヨハネから水による悔い改めのバプテスマをヨルダン川で受ける必要がおありだったのでしょうか？「聖書の学び」「苦難の僕」や「みんなで聴く聖書のおはなし」を参考に、話し合ってみます。

●「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ」（1：29）の「世」とは「世界」とも訳せます。今の時代、「世界」は未だ闇の力が覆っているかのようです（参考「成人科」38課）。にもかかわらず、イエスさまは既にその十字架によって「世界」の根源的な罪を取り除いておられます。「既に」と「未だ」の中間期間に生かされている私たちの教会は、来る2022年、主にあってどのように歩めばよいのでしょうか。導きを求めて祈りの時を持ってもよいでしょう。

● パウロは「『キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた』という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です」（一テモテ1：15）と告白しています。自分にとってのキリストの十字架の意味、バプテスマへ導かれた証しがあれば分かち合い、2021年の感謝の祈りをもってクラスを終わってもよいでしょう。

この方こそ神の子

聖書 ヨハネによる福音書1章29〜34節

暗唱聖句 わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。ヨハネ１：34

らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていたバプテスマのヨハネが、ユダヤの荒れ野で「悔い改めよ、天の国は近づいた」と叫びました。すると、エルサレムとユダヤ全土から民がやってきて、ヨハネからヨルダン川で水による悔い改めのバプテスマを受けました。その民の中にガリラヤのナザレという村からやってきたイエスさまがいました。民が、次々と老若男女問わず、ヨハネから悔い改めのバプテスマを受けました。次は、イエスさまの番です。ヨハネは、民の一人としてイエスさまにバプテスマを授けました。ところが、イエスさまが水の中から上がられると、なんと天がイエスさまにむかって開きました。ヨハネは神の霊が鳩のようにイエスさまの上に降(くだ)ってイエスさまの上にとどまるのを見ました。更に「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が天から聞こえました。

その翌日、ヨハネは自分の方へそのイエスさまが来られるのを見て弟子たちに「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と言いました。ヨハネは自分の方へ向かってこられるイエスさまにイザヤが「苦役に課せられて、かがみ込み　彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように」（イザヤ53：7）と預言したメシアの姿を見たのでした。やがて来られるメシアは、民衆のすべての罪を贖(あがな)うために屠り場に引かれる小羊の姿です。その小羊イエスが、今、自分の方へ来られるのを見て、ヨハネは神の霊によって感動して弟子たちに証しをしました。

「わたしはナザレのイエスがメシアとは知らなかった。しかし、主なる神が『聖霊が天から降って、とどまる人が、これから聖霊によってバプテスマを授ける人だよ』と教えてくれた。わたしはイエスにバプテスマを授ける時、イエスさまの上に聖霊が降り、とどまるのを見た。だから、イエスさまこそ、神の子である」。

当時、ローマに苦しめられていた民は、ヨハネをローマの厳しい支配から力で解放してくれるメシアだとか、世の終わりにやってくるエリヤだとか噂していました。しかし、ヨハネは自分の役割を知っていました。その民に彼は「以前から、わたしが言っていたメシアが今、来られた。その方はわたしにはるかにまさる。わたしはかがんでその方の履物のひもを解くしもべとしての値打さえもない」と言いました。「荒れ野で叫ぶ者の声」としての自分の役割を知っていたヨハネの心は、平安そのものでした。

この方こそ神の子

聖書 ヨハネによる福音書1章29〜34節

暗唱聖句 わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。
ヨハネ 1：34

聖書から…

ヨルダン川の岸辺に大勢の人がいました。みんな、ヨハネにバプテスマを授けてもらおうとしていたのです。ヨハネにある人が尋ねます、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜバプテスマを授けるのですか」。「あなた方の知らない方がおられる」、ヨハネはそう答えると一人ひとりと言葉を交わし、出会い、そしてバプテスマを授けて行ったのです。

その翌日のこと、ヨハネはイエスさまが自分の方へ来られるのを見て、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と証言します。立派な信仰告白です。でも、ヨハネは「わたしはこの方を知らなかった」（1：31）とも語り、33 節にも同じ言葉があります。ヨハネはイエスさまが来られ、そのイエスさまこそ神の小羊であると言いつつも、わたしはこの方を知らなかった、と二度も言っています。知らないのはヨハネで、すべてを知っているのがイエスさまだと語るのです。知識がすべてだという時代の中で、知らないということを通して、知っておられる神を示したのです。そのヨハネは「この方こそ神の子である」と証ししています。

ヨハネは自分の役割について、「わたしは水でバプテスマを授ける」（1：26）と、そしてイエスさまについては「その人が、聖霊によってバプテスマを授ける人である」（1：33）と言っています。水か聖霊かということを対比させたいのではなく、ヨハネがいてイエスさまがいる、ということを表しています。水も聖霊も大切なバプテスマの要素です。バプテスマとは、水に沈み、起き上がる時には新しい命を与えられることを象徴しています。

分かち合おう

- バプテスマとは？ 天国への切符？ 救われた証し？ 単なる儀式？ 教会員になるために必要なこと？ 教会員となることはもちろんそうですが、その人がイエスさまと一緒に生きていきたいことを明らかにし、教会は何があろうとその人と一緒に歩もうと引き受けていく、そんな出来事がバプテスマです。自分の経験や教会での出来事があれば、話し合ってみましょう。

- いよいよ冬休みを迎えます。宿題がたくさんあるかもしれません。でも人はなぜ勉強するのでしょうか？ 寅さんは「己（おのれ）を知るためよ」と答えました。学校には修了、そして卒業がありますが、教会学校の学びに卒業はありません。教会学校でなぜ学ぶか、それは神さまの思いを知るためでしょう。一生をかけてそれを学び続けます。最後に、この一年間それぞれが一番うれしかったことを話し合ってみましょう。

幼小科

この方こそ神の子

聖書 ヨハネによる福音書1章29〜34節

暗唱聖句 わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。
ヨハネ１：34

聖書から…

バプテスマのヨハネは、イエスさまを見て弟子たちに「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と言いました。ヨハネはヨルダン川で多くの人々に悔い改めのバプテスマを授けていましたが、それはこれから来られる「神の子」のために、道を整える役目を果たしていることだと自覚していました。そして、イエスさまが現れ、「〝霊〟が鳩のように天から下って、この方の上に留まるのを見」て、このイエスさまこそ、「神の子」であり、「世の罪を取り除く神の小羊」であると確信しました。

「神の霊によって感動して弟子たちに証しをしました」とみんなで聴く聖書のおはなしにあるように、ヨハネは神の小羊であるイエスさまが自分の方へ来られるのを見て喜びがあふれてきました。

39課

12月26日

活動①

「クリスマスの絵本を読もう」

私たちは教会でクリスマス礼拝やイブ礼拝、キャンドルサービスなどでイエスさまのお誕生をお祝いする礼拝を守ってきました。私たちが毎週日曜日に礼拝を守るのは、私たちの罪を取り除く神の小羊であるイエスさまが十字架におかかりになり、３日目に復活されたことを記念して守っています。そのことを覚えながら、クリスマスの絵本を読んで、みんなでその恵みを分かち合いましょう。

活動②　ワークシート

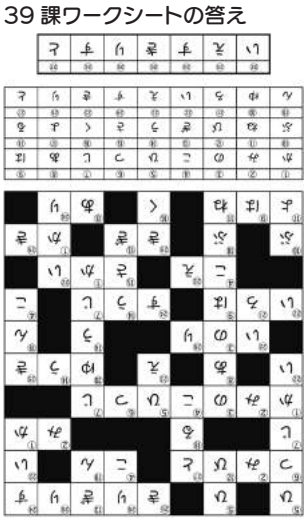
「かみのこひつじ・クロスワード」

同じ数字のところには同じ文字が、違う数字のところには違う文字が入ります。「かみのこひつじ」をヒントに、クロスワードを完成させてください。最後に、「㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉔、㉗」でできる言葉を見つけましょう。

●解き方●「①か②み③の④こ⑤ひ⑥つ⑦じ」をそれぞれの番号に入れます。左上のタテ列を見ると「⑤ひ⑥つ⑦じ①か㉒？」となります。㉒は「い」を入れます。「かみのこひつじ」の「じ」のタテ列をみると「⑦じ⑳？⑭？⑦じ①か」となり、⑳ゆ⑭うとなります。

こんな風に解いてみてください。難しい場合はあらかじめ、回答の文字をいくつか事前に加えておいて、解いてみてください。

39課ワークシートの答え



ワークシート

かみのこひつじ・クロスワード

⑤	■	⑤	■	㉕	㉖	⑬	㉖	㉔
⑥	②	⑫	㉗	■	④	⑲	■	㉒
⑦	■	■	⑱	■	■	■	②	①
① か	② み	③ の	④ こ	⑤ ひ	⑥ つ	⑦ じ	■	■
㉒	■	⑧	■	㉓	■	⑳	⑭	㉕
■	㉒	③	㉖	■	■	⑭	■	⑲
㉒	㉑	⑨	■	㉔	⑭	⑦	■	④
■	■	④	㉓	■	⑮	①	㉒	■
⑩	■	⑩	■	㉕	⑬	■	①	㉕
⑰	⑨	⑪	■	⑯	■	⑧	㉖	■

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗

㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉔	㉗

暗唱聖句手話

今号の聖句 ミカ書４章３節

国は国に向かって

「国」
（やや左寄りに）
親指と4指を突き合せ

左右に開きながら
指を閉じる

「国」
（やや右寄りに）
親指と4指を突き合せ

剣を上げず

左右に開きながら
指を閉じる

「争い」（＝喧嘩）
剣で切り合うように
両手人差指を

前後にふれ合わす

「行う」
両手拳固を

同時に前に出す

「ない」
両手指を軽く広げ、

手話訳 塩山幸子（茂原バプテスト教会員・手話通訳士）

国は国に向かって剣を上げず　もはや戦うことを学ばない。	12月5日　36課暗唱聖句

もはや戦う

手首をひねるように
回転させる

「戦争」
両掌の4指を
中央で向い合せ

激しく前後に
ふれ合わせる

ことを学ばない。

「ため」（目的）
左手指を丸めて作った輪に

右人差指を当てる

「備え」（準備）
（やや左寄りで）指先前向き
向い合せた両手を

右に動かす

「不要」
指先を体に引寄せた両手を

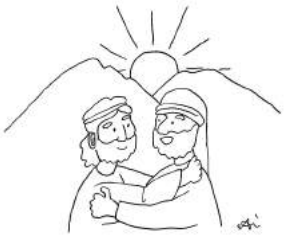
素早くはじくように前に出す

手話表現　小舘和彦（茂原バプテスト教会員・ろう者）

暗唱聖句カード 新共同訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- http://www.bapren.com/

27課　10月3日



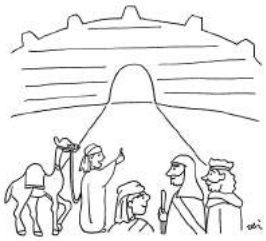
天は神の栄光を物語り　大空は御手の業を示す。　**詩編 19：2**

28課　10月10日

命のある限り　恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

詩編 23：6

29課　10月17日



地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。

詩編 24：1

30課　10月24日

王が助けを求めて叫ぶ乏しい人を　助けるものもない貧しい人を救いますように。

詩編 72：12

31課　10月31日

神に従う人はなつめやしのように茂り　レバノンの杉のようにそびえます。　**詩編 92：13**

32課　11月7日

御顔の光をあなたの僕の上に輝かせてください。あなたの掟を教えてください。

詩編 119：135

33課　11月14日

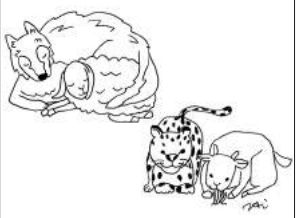
主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。　**詩編 131：3**

34課　11月21日

主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。

詩編 147：15

35課　11月28日



わたしの聖なる山においては何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。　**イザヤ 11：9**

36課　12月5日

国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。

ミカ 4：3

37課　12月12日

彼は立って、群れを養う　主の力…をもって。彼らは安らかに住まう。　**ミカ 5：3**

38課　12月19日

言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

ヨハネ 1：4

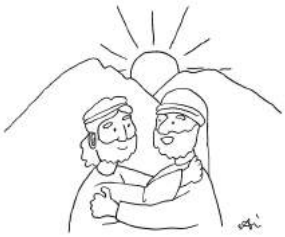
39課　12月26日

わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。　**ヨハネ 1：34**

暗唱聖句カード口語訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- http://www.bapren.com/

27課　10月3日

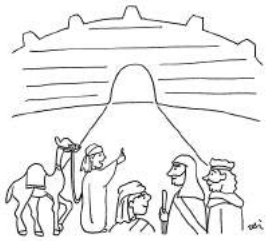


もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。　**詩編 19：1**

28課　10月10日

わたしの生きているかぎりは必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。　**詩編 23：6**

29課　10月17日



地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。　**詩編 24：1**

30課　10月24日

彼は乏しい者をその呼ばわる時に救い、貧しい者と、助けなき者とを救う。　**詩編 72：12**

31課　10月31日

正しい者はなつめやしの木のように栄え、レバノンの香柏のように育ちます。　**詩編 92：12**

32課　11月7日

み顔をしもべの上に照らし、あなたの定めを教えてください。　**詩編 119：135**

33課　11月14日

今からとこしえに主によって望みをいだけ。　**詩編 131：3**

34課　11月21日

主はその戒めを地に下される。そのみ言葉はすみやかに走る。　**詩編 147：15**

35課　11月28日

彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。**イザヤ 11：9**

36課　12月5日

国は国にむかってつるぎをあげず、再び戦いのことを学ばない。　**ミカ 4：3**

37課　12月12日

彼は主の力により…立ってその群れを養い、彼らを安らかにおらせる。　**ミカ 5：4**

38課　12月19日

この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。　**ヨハネ 1：4**

39課　12月26日

わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである　**ヨハネ 1：34**

次号

聖書教育

特　集

レント・イースターメッセージ
マウマウタン

信教の自由を守る
塚田正昭

連　載

時代を生きる教会として「協力伝道　再構築」
宮本 恵

ともに分かち、ともに生きる
坂元幸子

ご意見、ご感想をお待ちしております。
FAX●048-883-1092　Eメール●seishokyouiku@bapren.jp（編集担当）

聖書教育

● 2021 年 8 月 20 日発行・発売　●定価 1,200 円（税込）

発行人　中田 義直
発　行　日本バプテスト連盟
〒 336-0017　埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4
TEL : 048-883-1091　FAX : 048-883-1092
日本バプテスト連盟 HP　https://www.bapren.jp/
聖書教育 HP　https://www.bapren.com/
ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp
郵便振替口座 00150-9-192579

印刷　ニューライフミニストリーズ（新生宣教団）

●内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。
●ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。
●聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。
©2021 日本バプテスト連盟
●乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

●表紙　三浦あや
●みんなで聴く聖書のおはなしカット　香月 藍
●レイアウト　JC ユニット
●幼小科ワークシート　吉﨑 愛

表紙「すべての人を照らすいのちの光」